

研

究

紀

要

第

4

号

平成10年度

西張（2）遺跡の考察

中村 哲也 1~16

本州北端の块状耳飾り

福田 友之 17~30

異形土器 切断蓋付土器ー出土状態と器形を考えるー

成田 滋彦 31~46

東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係  
ー統繩文土器との共伴事例からー

木村 高 47~62

高屋敷館遺跡について

畠山 昇 63~72

1999

青森県埋蔵文化財調査センター



## 西張(2)遺跡の考察

中村哲也

### 1. はじめに

筆者は、平成8年に西張(2)遺跡の調査を担当し、縄文時代早期の集落を検出した。その調査成果は既に報告書として刊行したが（中村他 1998）、十分な考察を果たさないままであった。そこで、本稿では西張(2)遺跡を理解するために縄文時代早期の集落を中心とした幾つかの問題について補足し、考察を試みるものである。

### 2. 遺跡の概要

西張(2)遺跡は青森県三戸郡福地村大字法師岡字西張に所在する（図1）。馬淵川の右岸、標高30m前後の河岸段丘上に位置し、縄文時代早期白浜式期の住居跡が6軒、土坑1基が検出された。この他、縄文時代後期中葉の住居跡、土坑、配石、早期後葉から前期前葉の土坑、縄文時代のものと考えられる溝状土坑も検出されている。

遺跡を乗せる段丘は田面木段丘に相当する。遺跡付近では300~500mの幅を持ち、馬淵川へと注ぐ支谷によって南北を限られた平坦面をなしている。遺跡はこの平坦面の南西寄りに営まれている。すなわち、より河川に近く、南を限る支谷に接している。後期の遺構はこの中でもより南西側に位置する。これに対して、早期の遺構はより平坦面中央部に近い位置に築かれている。

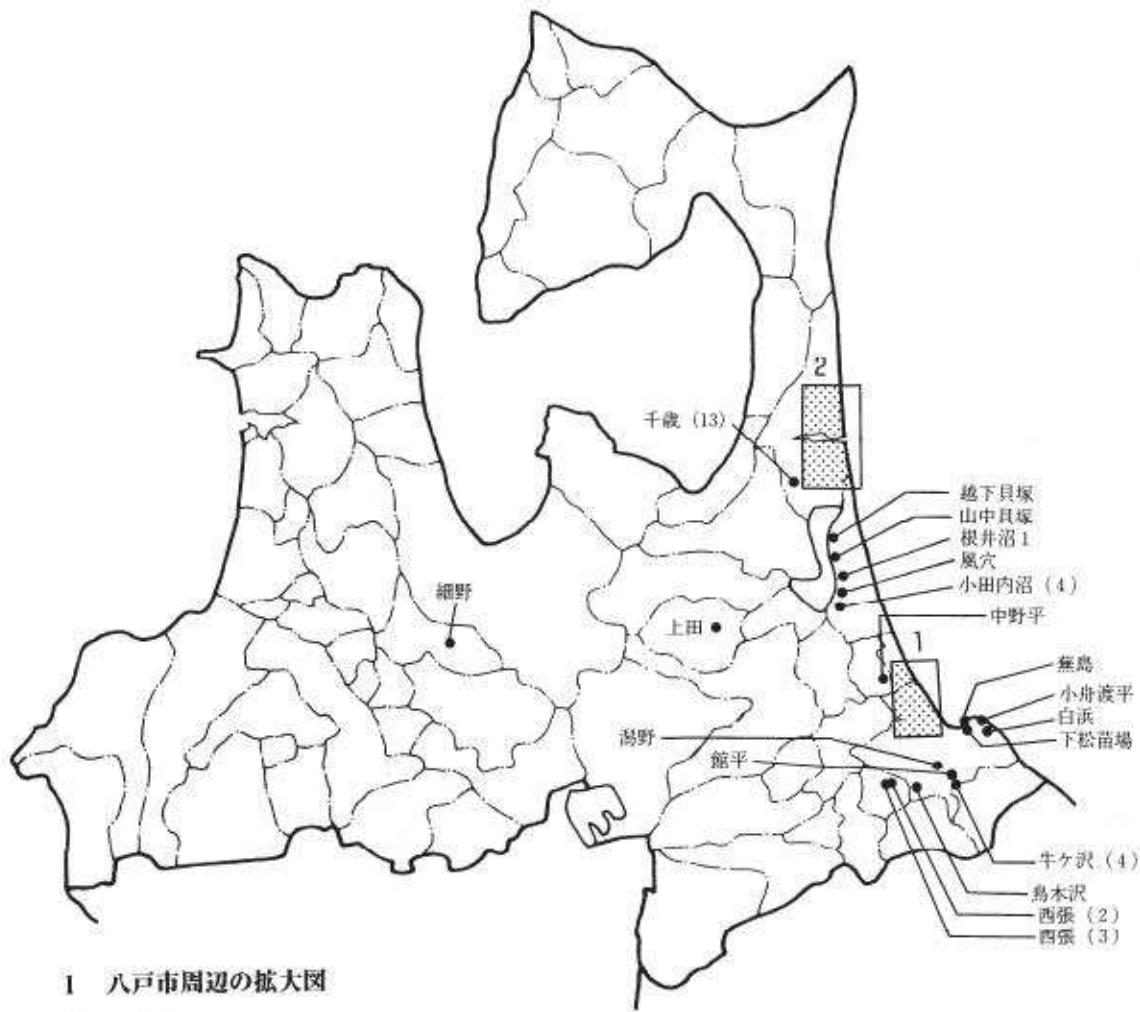
早期の住居跡・土坑は重複せず、約60×60mの範囲に散在する（図2）。この範囲では標高差はほとんどなく、1m以内に収まる。遺物は土器・石器、自然礫が出土した。各住居跡周辺を中心として出土し、一見して切れ目なく分布する。主要な遺物包含層である第Ⅲ層から出土した遺物は原則として三次元における位置を記録して取り上げた（図3・4・6）。ただし、掘り下げ時にジョレン等で移動した遺物は記録していない。また、遺構内の遺物も三次元における位置を記録して取り上げた。位置を記録して取り上げた遺物は土器2348点、石器・自然礫713点である。土器の接合作業を実施した結果、遺構内と遺構外の遺物が接合すること（註1）、最大で45m離れた位置から出土した破片が接合することが確認された。また、接合の方向性もおよそ3方向が認められ、ランダムに接合するわけではない（図5）。土器は概して小片で接合率が低く（註2）、器形復元できるものはなかった。

自然礫は約700点出土した。本遺跡の基盤となる八戸火山灰層・高館火山灰層の中に礫は含まれず、段丘崖からも離れているため、人間の手で持ちこまれたものと考えられる。石器・自然礫のなかには被熱して赤化したものがある。

早期住居跡の下部構造は以下のようなものである。

- ・径3~4mの梢円形ないし隅丸方形の掘方である（ただし第6号住居跡は除く）。
- ・掘方底面の立ち上がり際に住居中央方向に向いた小規模なピットが巡る。床面中央にピットは認められない。
- ・生活面から底面までの深さが約60~70cmである。

これらの特徴から、上屋構造は宮本長二郎氏のいう伏屋A（宮本 1996）が想定される。そのほか上屋構造には直接関係ないが、炉が認められないことも特徴である。



1 八戸市周辺の拡大図



2 六ヶ所村周辺の拡大図

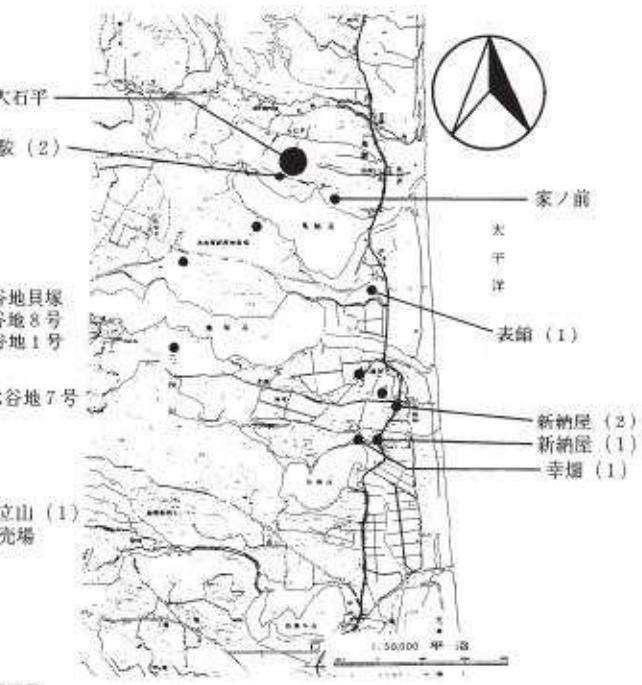


図1 遺跡位置図

## 白浜式出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構種別	住居数	備考	文献	発行年	発行主体
1	幸畑(1)	六ヶ所村	住居	2		幸畑(4)遺跡・幸畑(1)遺跡	1998	青森県教育委員会
2	表館(1)Ⅱ地区	六ヶ所村	住居	2		表館(1)遺跡V	1990	青森県教育委員会
						表館遺跡	1981	青森県教育委員会
3	上尾敷(2)	六ヶ所村	住居	2	縄文使用の白浜式出土	上尾敷(2)遺跡(1)	1988	青森県教育委員会
						上尾敷(2)遺跡Ⅱ	1987	青森県教育委員会
4	新納屋(1)	六ヶ所村				もつ小川原予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	1976	青森県教育委員会
						新納屋(1)遺跡	1999	青森県教育委員会
5	新納屋(2)	六ヶ所村				新納屋遺跡(2)発掘調査報告書	1981	青森県教育委員会
6	家ノ前	六ヶ所村			平成2年度試掘	家ノ前遺跡Ⅱ・幸畑(7)遺跡Ⅱ	1993	青森県教育委員会
7	沖付(1)	六ヶ所村				沖付(1)遺跡	1986	青森県教育委員会
8	大石平	六ヶ所村				大石平遺跡Ⅱ	1986	青森県教育委員会
9	上田	七戸町				上田遺跡	1996	青森県教育委員会
10	根井沼(1)	三沢市	住居・土坑	2		根井沼遺跡発掘調査報告書Ⅰ	1988	三沢市教育委員会
		三沢市			爪形刺突無 線状体多	根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書Ⅱ	1988	三沢市教育委員会
11	小田内沼(4)	三沢市	土坑	2		小田内沼(1)-(4)遺跡	1992	青森県教育委員会
12	山中(1)貝塚	三沢市			貝塚から11m北側	山中(1)貝塚	1992	三沢市教育委員会
13	越下貝塚	三沢市				越下貝塚隣接地試掘調査	1994	三沢市教育委員会
14	風穴	三沢市				風穴遺跡	1996	三沢市教育委員会
15	中野平	下田町	住居・土坑	12	重複あり	中野平・向山(4)遺跡	1991	青森県教育委員会
16	長七谷地1号	八戸市	住居	1		桔梗野工業団地造或に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1980	八戸市教育委員会
17	長七谷地7号	八戸市				長七谷地遺跡発掘調査報告書	1982	八戸市教育委員会
18	長七谷地8号	八戸市	住居	1		長七谷地遺跡発掘調査報告書	1982	八戸市教育委員会
19	長七谷地貝塚	八戸市				長七谷地貝塚	1980	八戸市教育委員会
20	鳥木沢	八戸市				八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ	1986	八戸市教育委員会
21	見立山(1)	八戸市				見立山(1)遺跡・弥次郎窪遺跡Ⅱ	1998	青森県教育委員会
22	根城	八戸市	住居	3	重複あり 全体が中世の遺構と重複	史跡根城跡発掘調査報告書Ⅳ	1983	八戸市教育委員会
						史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ	1983	八戸市教育委員会
23	白浜	八戸市				青森県八戸市白浜遺跡「日本考古学年報」7	1955	江坂 輝彌
24	館平	八戸市				青森県三戸郡館平遺跡「日本考古学年報」4	1958	江坂 輝彌
						白浜・小舟津平式土器にかかる縄文土器出土の早期貝殻文土器について「奥南」1	1980	杉山 武
						館平遺跡	1988	八戸市教育委員会
25	岡野遺跡	八戸市	土坑		平成10年度青森埋文試掘調査による			
26	牛ヶ沢(4)	八戸市	住居		未報告			
27	亮場	八戸市				亮場遺跡発掘調査報告書 大タルミ遺跡発掘調査報告書	1985	青森県教育委員会
28	西張(2)	福地村	住居・土坑	6		西張(2)遺跡	1988	青森県教育委員会
29	西張(3)	福地村			時期不明の堅穴遺構 1基	西張(3)遺跡	1996	青森県教育委員会
						石焼沢・西張(3)遺跡	1987	青森県教育委員会
30	細野	浪岡町				浪岡町組野遺跡出土の早期貝殻文土器・石器「奥南」3	1984	杉山 武

早期住居跡の1軒に貼床が認められ、これを全量採取して水篩選別法により微細な炭化物を回収した。その結果サンショウ属、オニグルミが検出された。水洗に当たっての留意点やサンプル量は（中村他 1998）を参照されたい。

### 3. 問題の設定と考察

本節では報告書で考察できなかった問題について考察を試みる。報告書での事実記載の不足は適宜補っていくこととする。

#### 西張（2）遺跡の集落について

さて、報告書で考察できなかった問題の第一は、上に述べたような集落のあり方は、該期の集落の一般的なあり方なのか否かという点である。青森県から岩手県北部の太平洋岸・馬淵川流域では該期の遺跡が比較的多く分布している（表1）。集落の様相を知り得る遺跡は限られるが、多くは住居跡が1～2軒検出される程度のものである。一方で、下田町中野平遺跡のごとく、大型住居跡を含む多数の住居跡が重複して検出された遺跡もある。これらの遺跡と比較したとき、西張（2）遺跡はどのように評価されるのだろうか。

この問題を考察するに当たって、まず取り上げなければならないのは、各遺跡において一時期に住居は何軒同時存在したのかという問題、集落規模の問題である。住居跡が1～2程度検出された遺跡の同時存在住居跡の最大数を1～2軒ととらえることは可能だろうか。そのためには、調査区と遺構の位置を検討することから始めなければならない。図7～図11は白浜式期の遺構が検出された遺跡の遺構配置図である（遺物の出土状況などが確認できるものに限る）。実のところ集落全体の様相をとらえられた例はない。調査区が広い場合でも、調査区周縁部に遺構が存在するなど、調査区外に遺構が存在する可能性を否定しきれない。従って、他遺跡の場合、検出された住居跡が2軒程度であっても、1時期に最大2軒の住居跡があったととらえることはできない。

一方、西張（2）遺跡では、ほぼ集落の広がりをとらえ得たと考えているが、遺構の重複関係がないため、理論上は最大6軒、最少1軒の住居跡が同時存在し得たことになる。集落規模を単純にとらえることはできそうもない。

集落規模を類推する手かがりは他に求めざるを得ないようである。そこで、遺物と遺構の位置関係および遺物の接合関係について検討することで集落規模の問題にアプローチしてみよう。西張（2）遺跡では遺物の集中域は概ね住居の近辺である。住居域からはずれる15ライン以南、ⅢFライン以西では数片をのぞいて白浜式期の土器は出土していない。概ね住居から20～30mの範囲に集中している。石器・自然礫も同様である。接合関係は、住居跡出土土器と周辺の土器が接合した例がある（図3）。遺構外遺物の接合関係からは遺物の集中ブロックはA～Cの3単位に分離できる。Bブロックはさらに2～3単位程度に分離できそうだ（図5）。この遺物集中ブロックと遺構の位置関係、及び遺物の接合関係はなにを意味するのだろうか。他遺跡での遺構と遺物の出土位置の関係をあわせて検討する事にする。

#### 表館I 遺跡II 地区（図7）

白浜式期の住居跡が近接して2軒検出されている。遺物の集中域は住居からやや途切れ気味だが、概ね住居の近辺に認められる。住居跡からは、床面から遺物が数点ないし十数点出土している。土器はいずれも小片である。

#### 中野平遺跡（図8）

報告書によれば、遺物の集中域は3カ所認められる。住居域近辺から122ラインの間（Aブロック）、

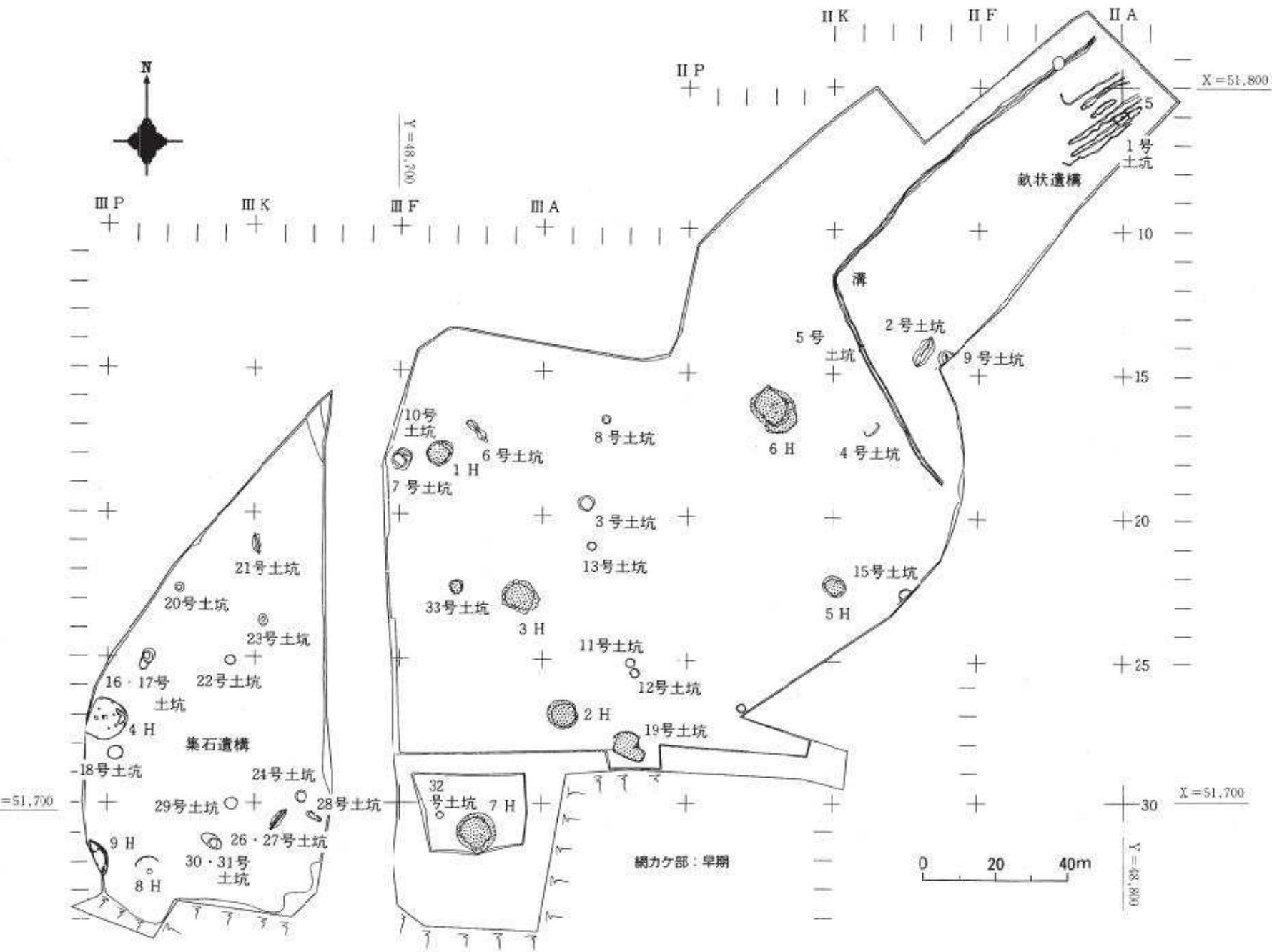


図2 西張(2)遺跡遺構配置図

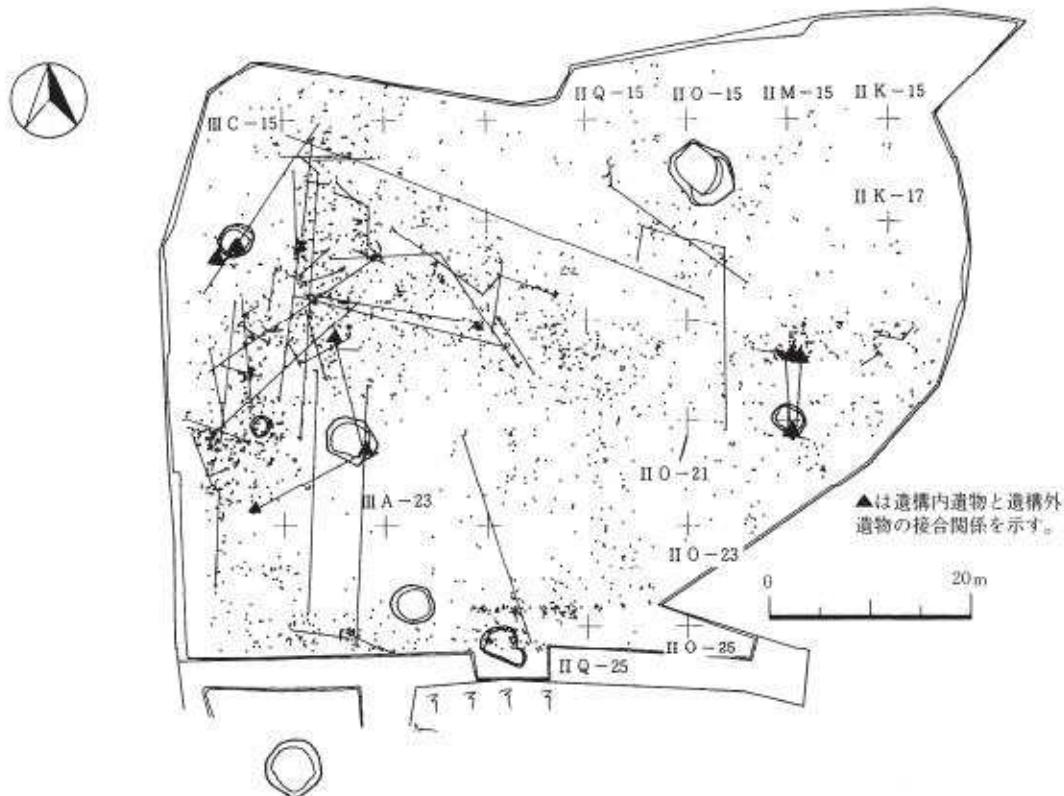


図3 土器分布・接合関係図

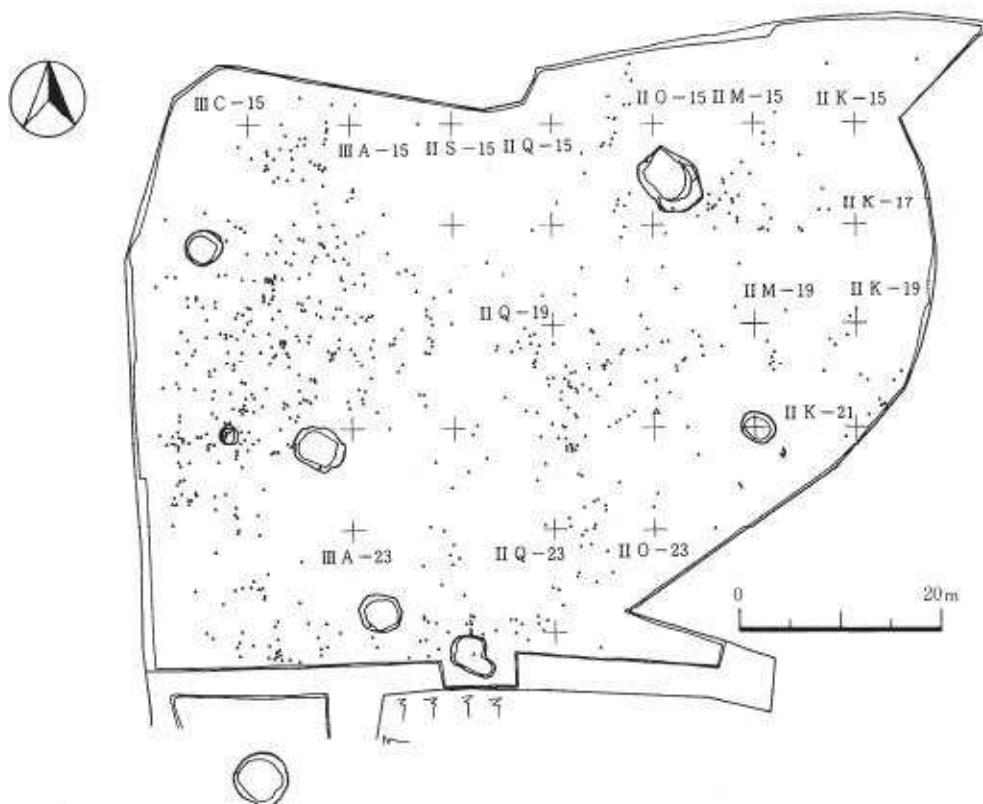


図4 石器・自然礫分布図

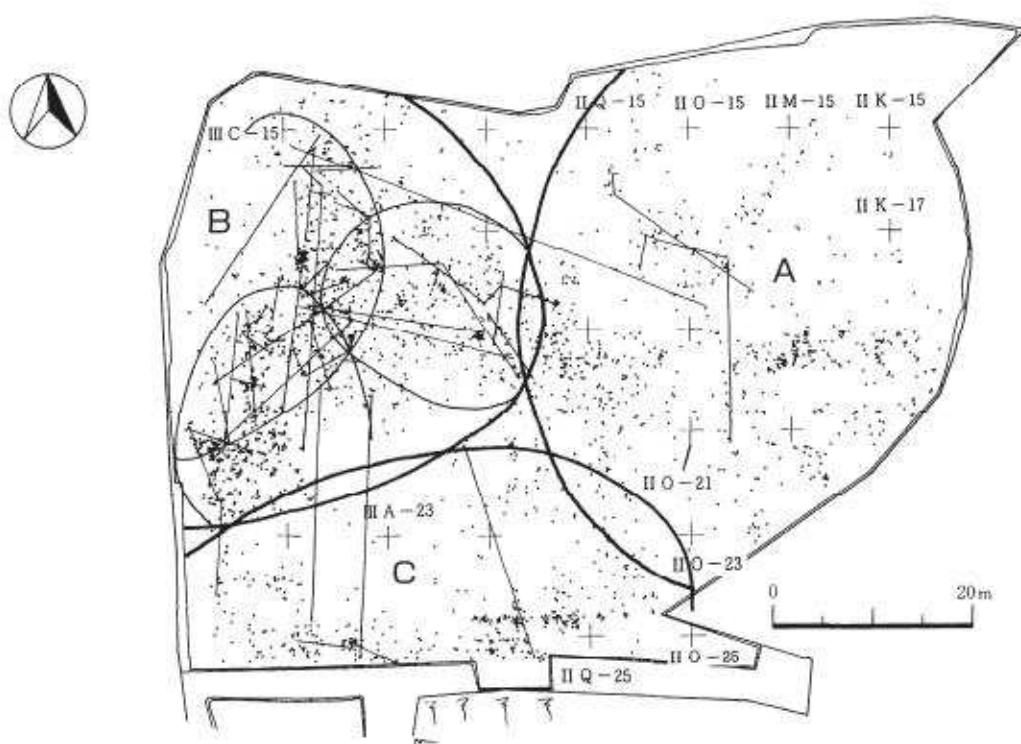


図5 土器集中ブロックの区分

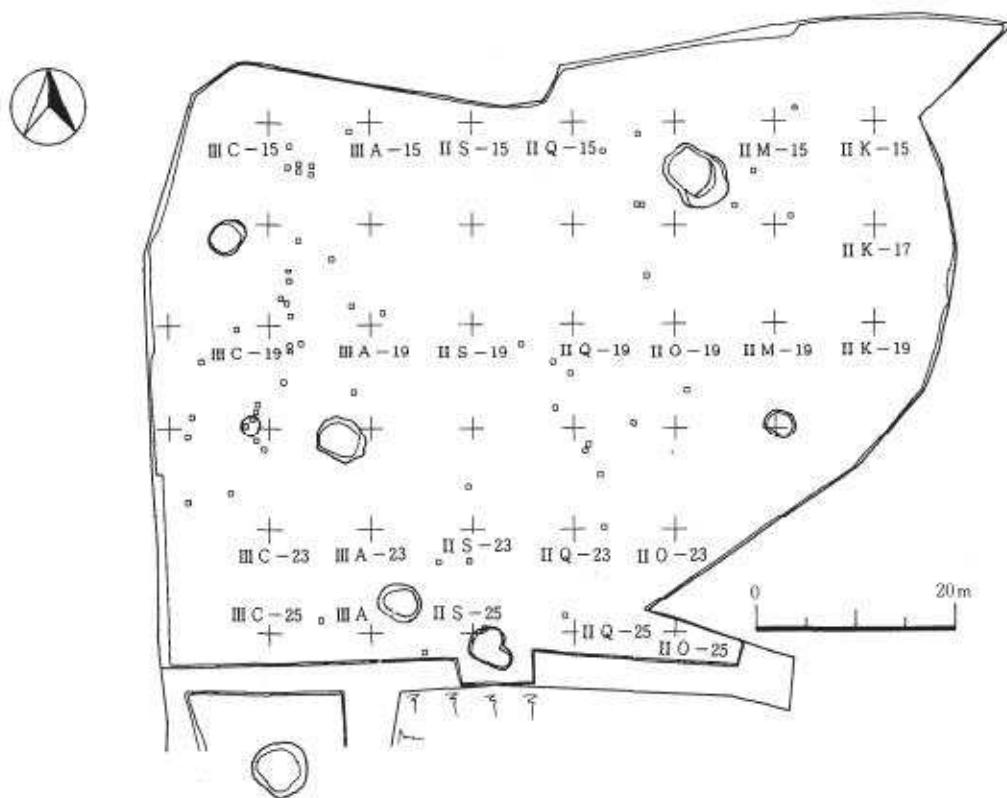


図6 焼碟分布図

I R～II A-134～137を中心とするBブロック、II H～II L-133～137を中心とするCブロックである（報文p257）。B・Cブロックは付近に遺構が認められないが、調査区外に存在する可能性がある。遺構付近に集中ブロックが認められる点では上記2例と共通する。

Aブロックでは復元可能な土器を含む多量の土器・石器が堆積土から出土する住居跡（SI101・102・103A・B・104・106・107）とあまり出土しない住居跡（SI105・108・109・110・112）がある。また、遺構内と遺構外あるいは、遺構間で土器の接合関係が認められる。

#### 上尾駒（2）遺跡（図9・10）

報告書の記述では、「B地区の平坦部C Y～D E-20～140に分布する。数グリッド離れた土器が接合する場合があり、100m以上離れた位置から出土した土器片が接合した例もある」とされる（報文 p397）。しかし、図版に掲載された土器の出土位置はこの限りでなく、出土状況の詳細は不明である。図版に掲載された土器の量から考えて、B区を主体に出土していることは間違いないようである。この区域に遺構はほとんどみられず（註3）、C地区から該期の住居が検出されている。B区近辺の調査区外に住居が存在する可能性も否定できないが、それでも最低で数十mは離れているとみなければならない。住居から離れたいわば「更地」への廃棄行為があつたととらえることも可能であろう。

#### 幸畠（1）遺跡（図11）

出土土器分布図によれば、土器の比較的集中する地点は3カ所認められる。遺構とその周辺（167ラインから171ラインにかけて）、住居から離れた180から188ラインの間、190から195ラインにかけてである。出土土器の大半は第5号住居跡およびその周辺から出土している。示された分布図は百分比で、出土量の母集団が提示されていないため、量の把握をどの属性によったのか、また全体の量はどの程度なのかわからない。そのため住居跡から離れた2カ所の遺物量を集中とみてよいのか、単に少量分布しているとみてよいのか判然としないが、ここではとりあえず極端に少量（たとえば数片程度）ではないものとして扱うことにする。180～188ラインにかけては調査区外に住居跡が存在する可能性も考えられるが、190～195ラインにかけての地形は谷頭であり、間に住居跡が存在するとは考えにくい。少なくとも数十mは離れているとみなければならないであろう。

さて、幾つかの事例を通観したところ、遺構の近辺に遺物が検出される例は一般的に認められるようである。また一方、住居から離れた場所に遺物が分布する事例もある。このように遺構と遺物廃棄のあり方には、現象面において幾つかの場合がありそうである。

- 1 住居跡の近辺に遺物が集中する例。住居内には床面近くに礫石器などがみられる場合を除き遺物がほとんどみられない。あっても小片の土器や剥片石器程度である。遺構内遺物と遺構外遺物の接合関係が認められる場合もある（西張（2）、表館（1）I）。
- 2 住居跡の近辺に遺物が集中する例。住居内には復元可能な土器を含む遺物が多量に認められる（中野平）。
- 3 住居から離れた場所に遺物が廃棄される（幸畠（1）、上尾駒（2））。

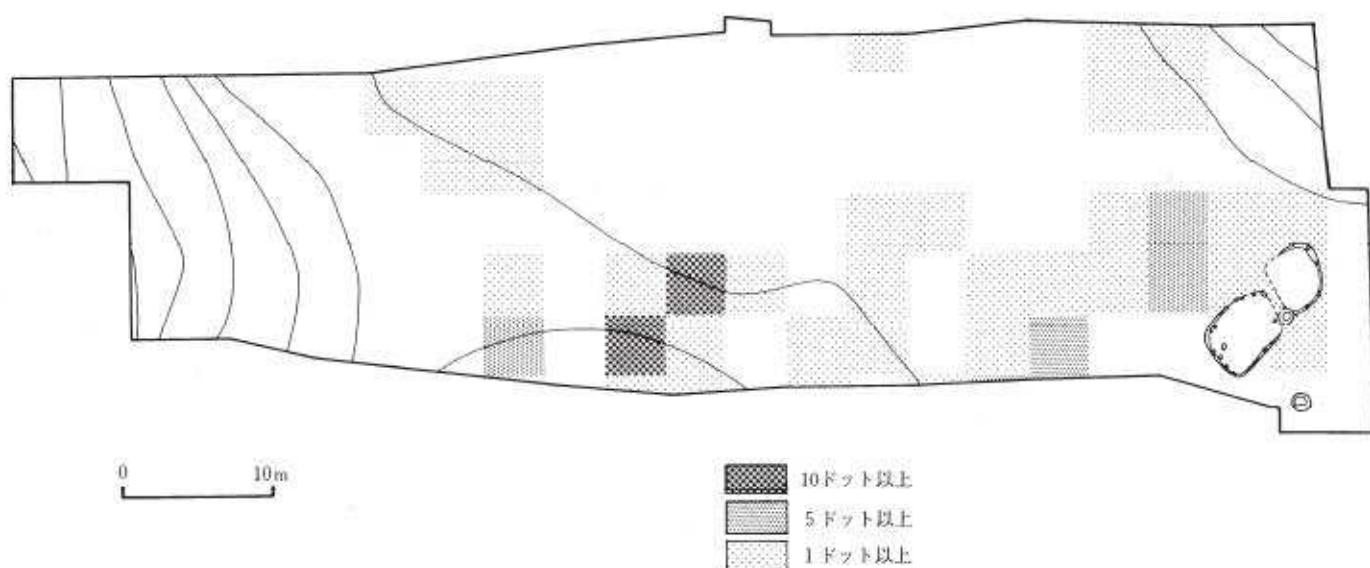


図7 表館(1)遺跡遺構配置・遺物分布図(報告書より一部改変)

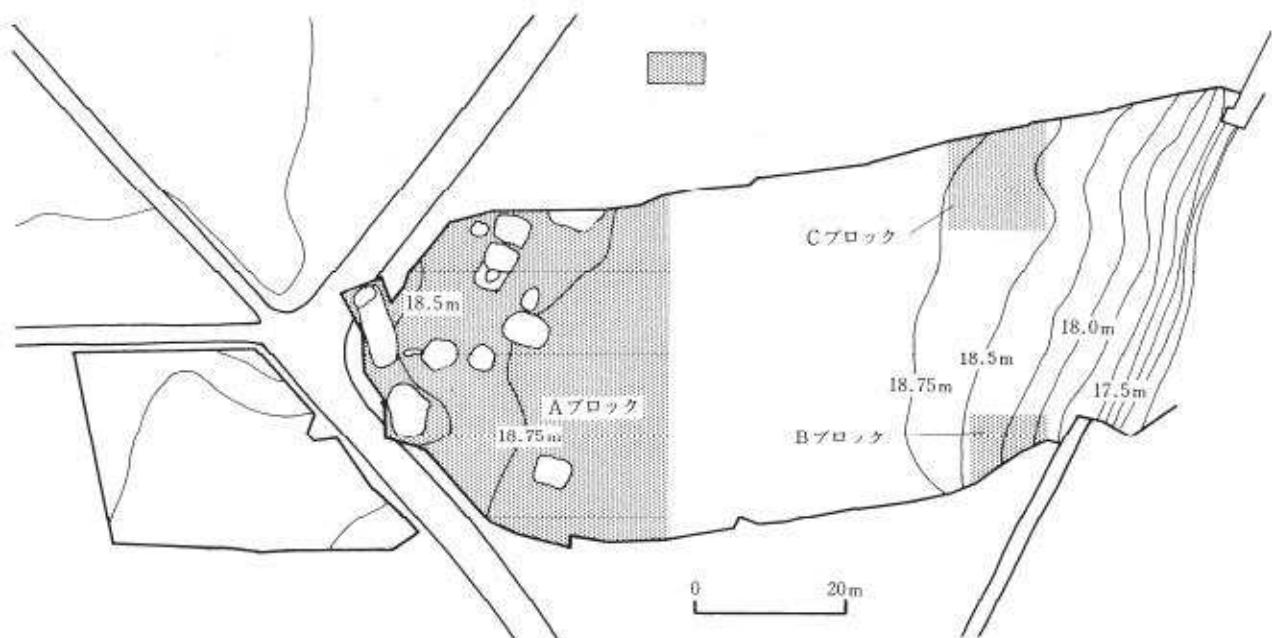


図8 中野平遺跡遺構配置図・遺物集中ブロック位置図(報告書より一部改変)

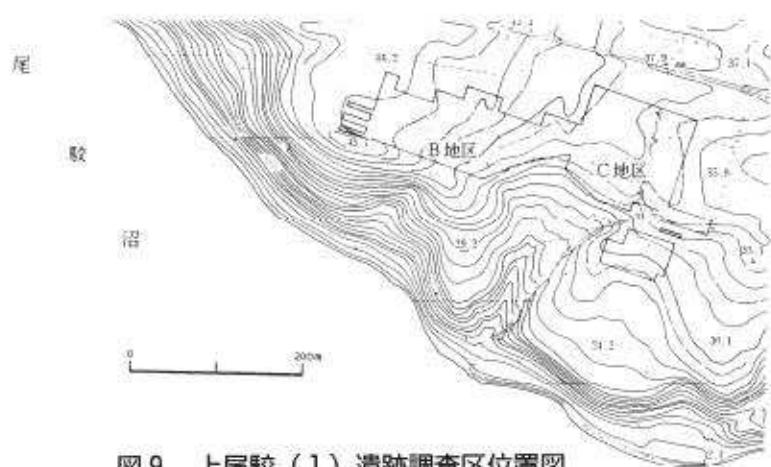


図9 上尾駿(1)遺跡調査区位置図

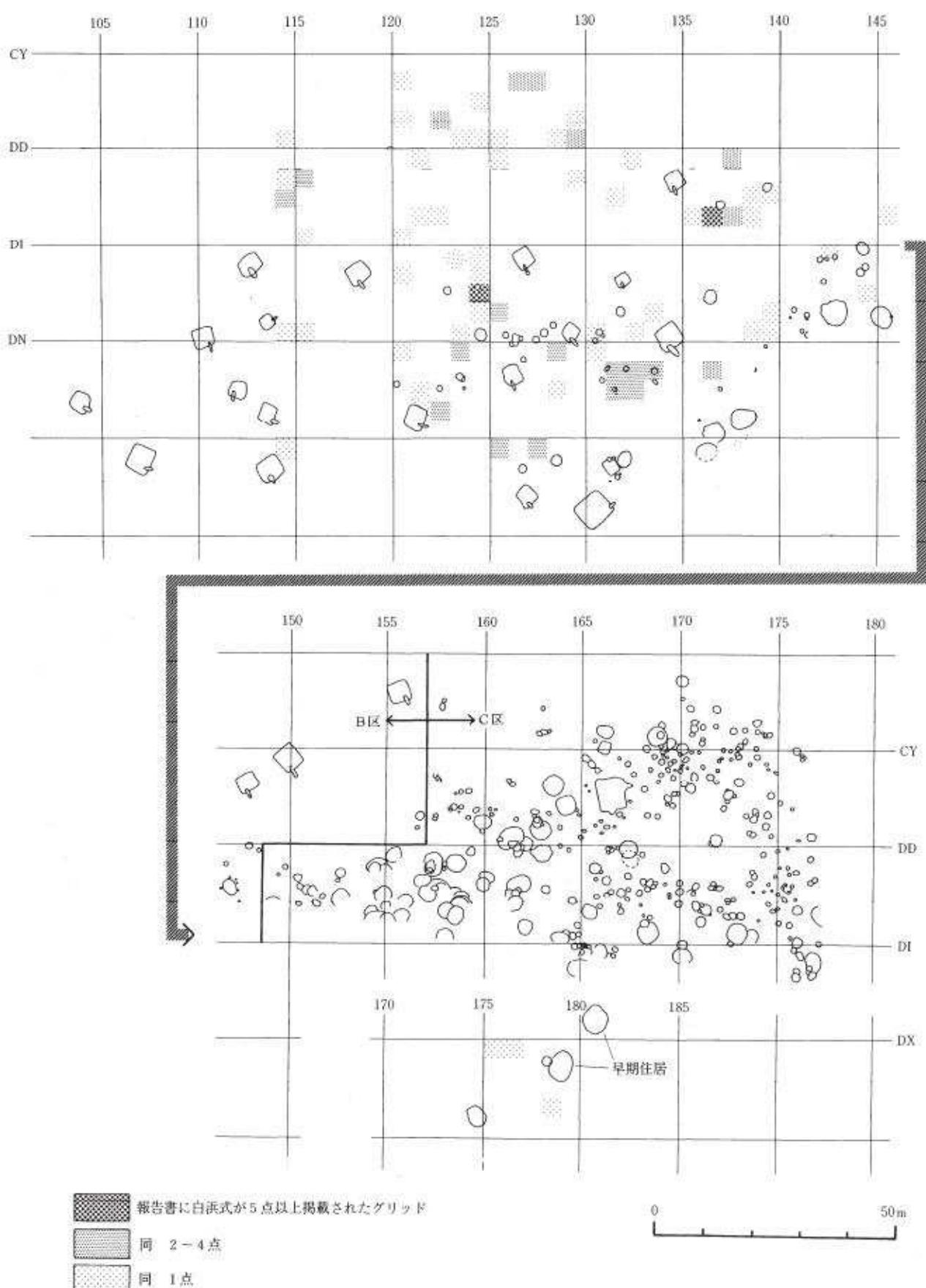


図10 上尾駒（1）遺跡遺構配置・土器分布図（報告書より一部改変）

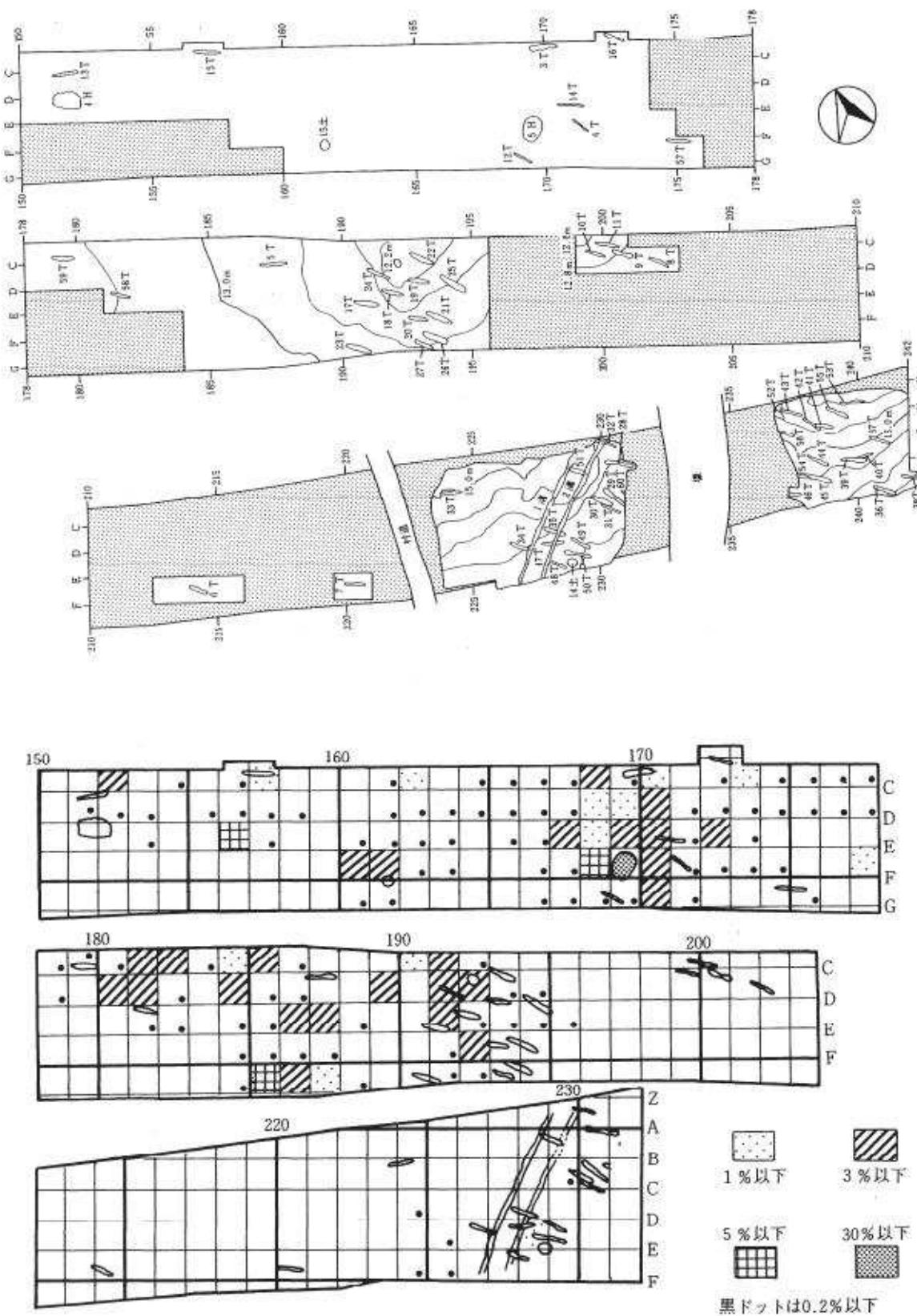


図11 幸畠（1）遺跡遺構配置図・土器分布図  
(報告書より転載、縮尺不同)

では、このような現象の相違はなにによって生じたのであろうか。これについては異なる二つの仮説が考えられる。一は廃棄の主体者と遺構の関係に置き換えてとらえることで、一見異なった現象を時間の流れに沿って理解する立場である。換言すれば、廃棄行為が遺構の構築以前→構築→使用→廃棄→埋没の過程のどの段階で行われたのかを検討することで、一見異なった現象を一貫した原理の下にとらえらる立場である。いまひとつは、異なった現象の原因を場の性格や遺跡の性格に求める立場である。

今一度西張(2)遺跡の遺物出土状況を振り返ってみたい。住居跡からは土器の破片が少量出土した。いずれも小片であり、覆土から出土した。床面付近から出土する土器はほとんど認められない。礫石器・蝶は床面付近から出土したものもある。覆土から出土した土器の中には遺構外の遺物と接合関係を有するものがある。しかし、これらは住居跡覆土上層から出土しており、住居の付近に残された破片が流れ込んだものと判断された。これはいずれの住居にも共通する様相である。

ここで、遺物と遺構の関連に視座を据えた研究の幾つかを概観することにしたい(註4)。金子直行氏は、埼玉県北遺跡の住居において土器型式内を大きく越えない近接した時間差に注意している。(1)炉体土器と床面土器の型式学的な差異から古い遺構の片づけを、(2)炉体土器の重複から住居跡の反復・拡張を、(3)遺構間接合から同一集落内における継続的居住の可能性を指摘している。さらに(1)～(3)を重ね合わせることで、集団移動の可能性を論じている(金子 1987)。

桐生直彦氏は、遺構から出土する遺物のあり方を、主として行為の主体者のレベルで整理している。転用、遺棄、廃棄、流入に4大別している。また、研究史の整理を行い、遺構間接合の分析が集落研究に有効であることを示している(桐生 1989)。

小林謙一氏は、炉体土器と住居址覆土一括依存遺物の接合関係の検討から縄文時代中期の廃棄のあり方を検討している(小林 1993a・b)。

いずれの研究においても、対象とされているのは床面出土土器と他遺構・遺構外の土器、炉体土器と他遺構・遺構外の土器の接合関係である。いわば、一方に時間的に限定される遺物(炉体土器や床面出土土器)があり、これとの接合関係を検討することで、土器型式に現れない(または極めて近い)住居址間の時間差などを導いている。

合田恵美子氏・小林謙一氏・桜井淳也氏は住居堆積土の遺物組成が、周辺の包含層の影響を受けている場合があることを指摘している(合田 1997、小林 1993a・b 小林・桜井 1983)。

西張(2)遺跡の遺物の出土状況は上述したとおりであり、炉体土器はおろか、床面出土遺物すらない。従って、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物の接合関係は遺物が住居廃絶後に流れ込んだことを示すものでしかない。また遺構外の出土遺物の接合関係は廃棄物(遺物)を供給した遺構を示すものでもない。上述の諸研究のごとく、事実関係を整理することで、廃棄物(遺物)が最終的位置(発掘調査における出土位置)にたどり着くまでを具体的に復元することは放棄せざるをえない。そこでやや観念的になるが、作業仮説を提示することにする。その場合上述したように二つの立場が考えられよう。

一は、上に挙げた事例のうち1と3をいわば同一の文脈で理解するものである(仮説A)。住居周辺への廃棄は、住居が使用中に行われたものではなく、現在使用している住居から数十mはなれた更地への廃棄→遺構の構築とその際の片づけ行為という時間的な関係が遺物分布図・接合図に反映しているとするものである。更地への廃棄(上記事例3)は結果としてその後何らの遺構も築かれなかつたからこそ更地への廃棄として把握される。ただし、地形的な要因から遺構が築かれない場合は当然ありうる。この場合、集落規模は理論上は5軒から1軒まであり得るもの、2~3軒の集落は一般的にあり得た可能性が高いと考えることができそうである。

今ひとつは、上記事例の1と3をいわば廃棄のあり方のバラエティとしてとらえ、遺物廃棄と遺構の構築・使用に時間の差を認めないものである（仮説B）。1と3の違いを廃棄の場の性格としてとらえることも射程に含まれる。このような立場をとるなら遺物の分布図・接合関係のあり方は、住居使用中に生じたゴミ（遺物）を住居周辺に廃棄（あるいは断片を取り残した場合などもありうる）→折に触れて住居周辺の廃棄物をまとめるという形で理解されるだろう。この場合、集落規模は一時期6軒としてとらえられることになる。

では、おののの仮説を探った場合、遺物の出土状況はどのように理解できるだろうか。まず、仮説Aでは、6軒の住居跡が時間差を持っていたと考えるのであるから、最低でも2段階の変遷が想定できる。その場合、古い住居の中に土器の廃棄が認められない点が問題となる。中野平遺跡（上記事例2）や幸畠（1）遺跡で確認できたように、窪地に廃棄物を捨てるのはこの時期の集落においても十分にあり得ることであるし、縄文時代を通じて一般的に認められる現象であろう。全ての事例にこのような理解を敷衍することには躊躇もあるが、いま該期の集落においても一般的にあり得たものと考えておきたい。とすれば、時期差があるので、窪地（廃絶された住居）に廃棄物が見られないのは矛盾しているといえる。ただし、上屋構造と住居の廃絶のあり方によっては、整合的に説明されよう。つまり住居を廃絶する際、上屋を取り壊すあるいは片づけることをせず、そのまま放置した場合、住居内への廃棄は認められなくてもよい。中野平・幸畠（1）遺跡の事例から、上屋は残っていなかったと考えることも不可能ではないが、この問題は個別に事例を積み重ねて帰納的な方法で立証されるべきであろう。発掘調査に立ち戻って、住居の廃絶状態や上屋構造を追求する必要がある。

仮説Bでは、現に住居が使用中であるのだから住居内への廃棄が認められないのは当然であり、この点についてはAよりも蓋然性が高いといえる。接合関係のあり方についても、一定期間の生活の中で遺物が移動させられることはあり得ることとして理解できよう（註5）。今ひとつ、卑近な感覚に基づく疑問なのだが、現に居住している住居の付近にものを廃棄するのか、という問題がある。小林謙一氏は縄文時代中期の遺跡の分析から、住居付近の「散らかし」を想定している（小林 1993b）。このような実例からあり得ることと考えられる。全体としては仮説Aよりも無理なく説明できる。

しかし、仮説Aも棄却されたわけではない。いずれかを判断するためには今後発掘調査に立ち戻って考えねばならない。仮説A・Bともに西張（2）遺跡の分析のために提示したものではあるが、基本的な考え方は事例1・3に示した他の遺跡にも一般化する事ができるだろう。そこで、以下に仮説を証明する要件を考え得る範囲で示すことにする。仮説Aが証明されるための要件はまず時期差を確認できる遺物の出土状況が必要である。また、既に指摘したように住居の廃絶状態の検討も必須である。状況証拠としては、遺物集中ブロックが、明瞭に分割されて、その先後関係を想定できることも挙げられよう（註6）。仮説Bについては、床面遺物と遺構外遺物の接合関係が直接の証明となろう。住居周辺の散らかしの一方、（後に住居が構築されそうもない地点の）更地への廃棄を認めることになるので、該期集落における場の理解が必要となる。そのためには、遺物の出土状況の詳細な記述・分析が求められよう。

西張（2）遺跡は、中野平遺跡のように遺構の重複や窪地（窪地周辺も含めて）を利用した遺物の廃棄が認められる遺跡とは性格が異なることも予測されよう（註7）。しかし、西張（2）遺跡を遺跡相互の中で評価するにはなお多くの事例の積み重ねが必要である。

### 炭化した大型植物遺体について

1.で述べたように、早期住居跡のうち、第6号住居の貼床について水篩選別を実施し、少量の炭化した大型植物遺体を得ることができたが、報文中では同定結果を提示するにとどまった。ここでは、その意義について若干の私見を述べてみたい。

まず、若干の事実の補足を行う。水洗を実施した量は1×1mグリッド19区分を1区につき500cc2サンプルである。水洗後、作業員がルーペの観察下で土砂と炭化物を分別した。分離した炭化物は当センター職員齊藤由美子が炭化種子と炭化材に分別し、炭化種子は株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。分析の結果、オニグルミとサンショウ属？が検出された。

サンショウは初夏の未成熟な種実を利用することも可能である。また、秋の成熟した果皮を利用することも可能であり、乾燥させれば長期の保存が可能である（註8）。オニグルミは秋に採集するが、長期の保存が可能で、軽く、可搬性もあり、消費された遺跡が採集された遺跡と同一である必要は必ずしも無いのではないか（註9）。いずれにしても、今回得られた資料は食料採集・消費の季節性を明らかにしうるものではないと思われる（註10）。

では、土壤を選別して植物遺体を回収する意義はどこにあるのだろうか。上記したように、仮に遺跡に性格の差があるのなら、遺跡によって、獲得した植物質食料の組み合わせに差異が認められはしないだろうか。仮に、生業と居住のシステムにおいて季節的な出小屋と母村的な関係が認められるならば、食料獲得の季節性が、出土した植物遺体に反映されはしないかということである。また、近年ではヒエの利用が縄文時代早期後半まで遡ることが確実となった（（財）北海道埋蔵文化財センター1998）。更に遡る可能性が見えてきたともいえよう。更にいえば、縄文時代の植物質食料の変遷をとらえる基礎データとしても位置づけられる。これらの視点に答えるのに炭化した植物遺体の検出だけで十分とは思わないが、一つの手がかりとして必要なことであろう。本県においてこの時期の水洗選別が実施された例はほとんどなく、基礎的なデータの集積が必要である。その際、住居の廃絶状態の検討等の視点は重要となろう。

### 4.結語

報告書作成時に触れることのできなかった問題について考察を試みた。その結果、なお多くの基礎的データを集積することが必要であることを痛感した。翻っていえば、これまでにあまり議論がなされず、議論が調査に還元されなかつた事を示しているようにも思われる。自省とともに今回の考察を今後の調査に生かしていきたい。なお、土器の編年上の位置づけについて若干述べたいこともあるが、機会を改めて述べることとした。

## 註

- (1) 報告書では、第3号住居跡出土土器観察表の2の土器について、「1H-P-3と遺構外P-819・1009接合」と記載されているが、「3H-P-3と遺構外P-819・1009接合」誤りである。訂正するとともにお詫び申し上げたい。
- (2) 出土位置を記録して取り上げた破片2,348点のうち、174点が接合した。接合率は7.4%である。出土位置を記録しないで取り上げたものもあり、これらと接合するものもある。これらを加えれば接合率は更に低くなるものと思われる。
- (3) B地区では該期の土坑とされるものが2基検出されている。しかし、遺物はいずれも該期の土器とみられる小片が1~2片掲載されているにすぎない。流れ混みの可能性も否定できないであろう。また、確認面と基本土層との関係も不明である。なぜそれが早期であるのか、報告書から根拠を読みとることはできない。
- (4) 本来触れなければならない研究は数多い。しかし、入手できなかつたため触れ得ない文献が多くある。また、筆者の怠慢により十分にその意図を咀嚼できなかつたものも多い。今後の課題としたい。
- (5) ABどちらをとるにせよ、遺物の接合関係は人間の活動により廃棄された遺物が移動させられることは変わらない。本県における縄文時代早期の遺跡ではしばしば相当の距離をおいて出土した遺物が接合することが指摘されているが、人間活動によるゴミの移動が一般的であったことを示していると思われる。更にいえば、該期以外の遺跡においても一般的に認められると思われるが、これまでほとんど注意されていない。遺物の出土量や出土状態に一因があるものと思われる。
- (6) 具体的には以下のようない例が想定される。2軒の住居跡が検出され、一方に遺物集中プロックが認められ、一方には認められない。あるいは更に幾つかの住居跡があった場合でも上のようない状態に分離可能である場合。
- (7) 中野平遺跡は4時期の変遷があり、各時期3~4軒、最大6軒の住居が存在したと想定されている。接合資料の検討から得たものではなく、遺構の重複・住居の構造・遺構間の距離・軸方向等から想定されたものである。第一次的な資料による証明ではないものの、複数時期があることは確かであろう。これを長期の継続居住の結果と見るか、反復居住（石井 1977）の結果と見るかはおくとしても、利用される頻度の高い遺跡であった事が指摘できる。
- (8) 筆者の実体験による。現在、一般的にどのような利用法があるのか資料は収集していない。
- (9) この問題を検討するためには量的な評価が必要となろう。その場合、炭化種実のみでは評価が難しいかもしれない。
- (10) 得られた資料が限定されるのは選別を行った資料の量に起因している可能性もある。その意味では更に水洗選別を行う必要がある。

## 参考文献

- 合田恵美子 1997 「堅穴住居の覆土形成に関する一考察(IV) — 覆土と周辺包含層の土器出土状況の比較から —」『東京考古』15
- 青森県教育委員会 1988 「上尾駿(2) 遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告  
1990 「表館(1) 遺跡V」青森県埋蔵文化財調査報告書第127集  
1991 「中野平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第134集  
1998 「幸畠(4) 遺跡・幸畠(1) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告
- 石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査團
- 中村哲也他 1998 「西張(2) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 第233集
- 金子直行 1987 「Ⅶ 発掘成果のまとめ」『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財事業団
- 桐生直彦 1989 「住居址間接合資料の捉え方—現状認識のためのノートー」『土曜考古』13 土曜考古学研究会
- 小林謙一 1993a 「第IV章 第2節(2) 縄文中期分析のための基礎データの整理」『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第1巻 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室  
1993b 「縄文遺跡における廃棄行為復元の試み —住居覆土中一括依存遺物及び炉体土器の接合関係—」『異貌』13 共同体研究会
- 小林謙一・桜井淳也 1983 「早川天神森遺跡」
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1998 「函館市 中野B遺跡(Ⅲ)」(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第120集
- 宮本長二郎 1996 「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版

## 前号の訂正のお願い

前号(第3号)の中村・坂本論文に誤りがありました。下記の通り訂正をお願いいたします。

	誤	→	正
p58 16行目	29棟検出されてい 2類16棟 2b類6棟		26棟検出されてい 2類12棟 2b類2棟

17行目	3a 2類1棟	3a 2類3棟
------	---------	---------

p60 16行目	現象と関連する	減少と関連する
----------	---------	---------

p61	39	幸畠(1)S104	2b	39	幸畠(1)S104	3a2
	40	幸畠(1)S104	2b	40	幸畠(1)S104	3a2

# 本州北端の块状耳飾り

福田友之

## I. はじめに

縄文時代の装身具のひとつに「块状耳飾り」がある。環状形の一カ所に切り目の入った耳飾りである。東日本では縄文時代早期末葉から中期にかけて用いられた。大半は石製品である。本州北端に位置する青森県域では、ほとんどすべてが縄文前期・中期の円筒土器文化の遺跡から出土している。

東日本の縄文時代には、地域・時期によって多種多様な装身具が用いられており、本県域も同様である。近年、これらの装身具について少しづつ研究成果が発表され、津軽海峡に面した本県域のもつ地域的特性が次第に明らかにされつつある。津軽海峡は縄文時代以降、本州と北海道を結ぶほかに日本海と太平洋を結ぶ海の交通路として各時代それぞれの文化の展開に大きな役割を果たしてきており、とくに広域分布をひとつの特色とする块状耳飾りについても、本県域の状況が注目されるところである。しかしながら、この地域の状況については、平成元年(1989)に福地村館野遺跡の出土例に関する(註1)白鳥文雄氏によって触れられたのみである。その際に扱った資料は8遺跡・12点(出土地不明分を含めると17点)である。しかし、本県域では、その後新資料が多数出土している状況がある。そこで本稿では、本県域出土の块状耳飾りを集成し、その時期や意義等について若干述べてみたい。

## II. 青森県域出土の块状耳飾りとその出土状況

本県域では現在18カ所の遺跡から、35点(出土地不明分も含めると41点)の块状耳飾りが出土している。出土状況には、遺構から出土したものと遺構外の包含層から出土したものがある。遺構別では竪穴住居跡・土坑・盛り土がある。

### (1) 遺構からの出土例(図2~4、表1、写真1)

#### A. 竪穴住居跡からの出土例

現在、5遺跡から6点出土している。

##### ①八戸市西長根遺跡(27。中期中葉・大木8b式期)<sup>(註2)</sup>

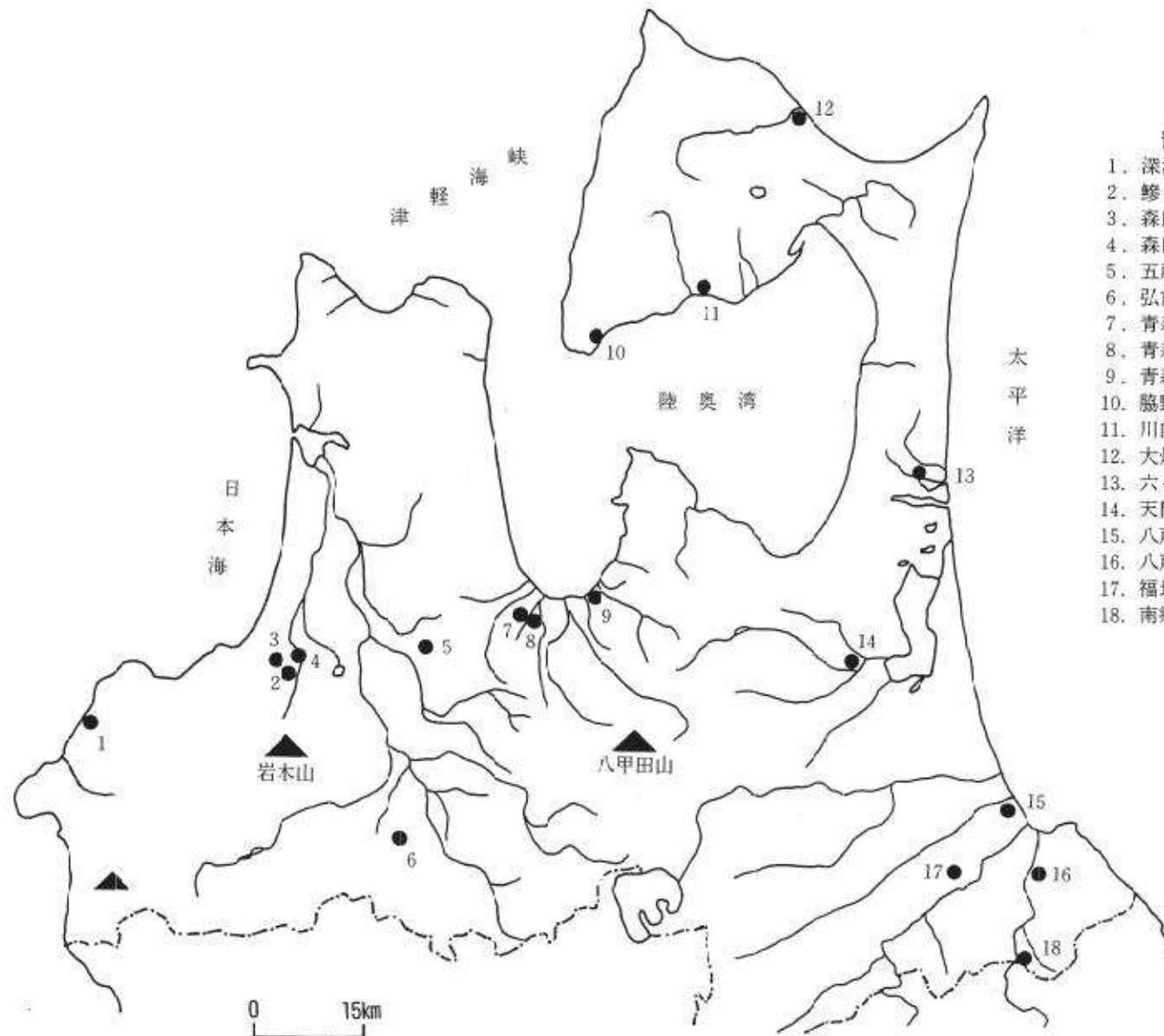
第10号住居跡(長径8.6m以上、短径7.2mの楕円形プラン)の覆土4層から多数の深鉢形土器のほか、石鎌・尖頭器・石匙・石錐・スクレイパー・磨製石斧・敲き石・すり石・砥石・軽石製品等の各種石器、環状土製品・硬玉製の大珠とともにヒスイ製の块状耳飾り片(重さ4.3g)が1点出土した。

##### ②深浦町津山遺跡(1。中期初頭・円筒上層a式期)<sup>(註2)</sup>

第9号住居跡(長径7.94m、短径6.08mの楕円形プラン。円筒下層d式期)の覆土から多数の円筒上層a式土器片のほか、石鎌・石匙・両面加工石器・不定形石器・異形石器・石錐・すり石・半円状偏平打製石器・剝片・チップ類多数とともに軟玉製の块状耳飾り片(重さ9.0g)が1点出土した。

##### ③脇野沢村瀬野遺跡(19-20。前期末葉・円筒下層d式期~中期初頭・円筒上層a式期か)<sup>(註16)</sup>

第2号住居跡と第5号住居跡から計2点出土している。第2号住居跡(長さ5.70m、幅4.75mの隅丸長方形プラン)覆土から円筒下層d式を主体(円筒上層a式も少しある)とする多数の土器片のほか、石鎌・石槍・石錐・石匙・剝片・磨製石斧・石錐・すり石・碟器・石皿・軽石製品とともに



#### 青森県域の玦状耳飾り出土遺跡

1. 深浦町津山遺跡（中期初頭）
2. 鰐ヶ沢町鳴沢遺跡（前期末葉）
3. 森田村矢伏長根遺跡（前期末葉か）
4. 森田村石神遺跡（前期文葉）
5. 五所川原市原子（前期天葉～中期初頭か）
6. 弘前市沢部(2)遺跡（前期中葉）
7. 青森市三内巣圈遺跡（前期末葉～中期初頭か）
8. 青森市三内丸山遺跡（中期前葉～中葉か）
9. 青森市矢田前？（前期末葉～中期初頭か）
10. 脇野沢村瀬野遺跡（前期末葉～中期初頭）
11. 川内町熊ヶ平遺跡（前期末葉）
12. 大畠町水木沢遺跡（前期末葉か）
13. 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡（中期中葉）
14. 天間林村二ツ森貝塚（前期末葉～中期初頭か）
15. 八戸市長七谷地貝塚（早期末葉～前期初頭）
16. 八戸市西長根遺跡（中期中葉）
17. 福地村館野遺跡（前期後葉か）
18. 南郷村畑内遺跡（前期中葉～中期初頭か）

図1 青森県域の玦状耳飾り出土遺跡

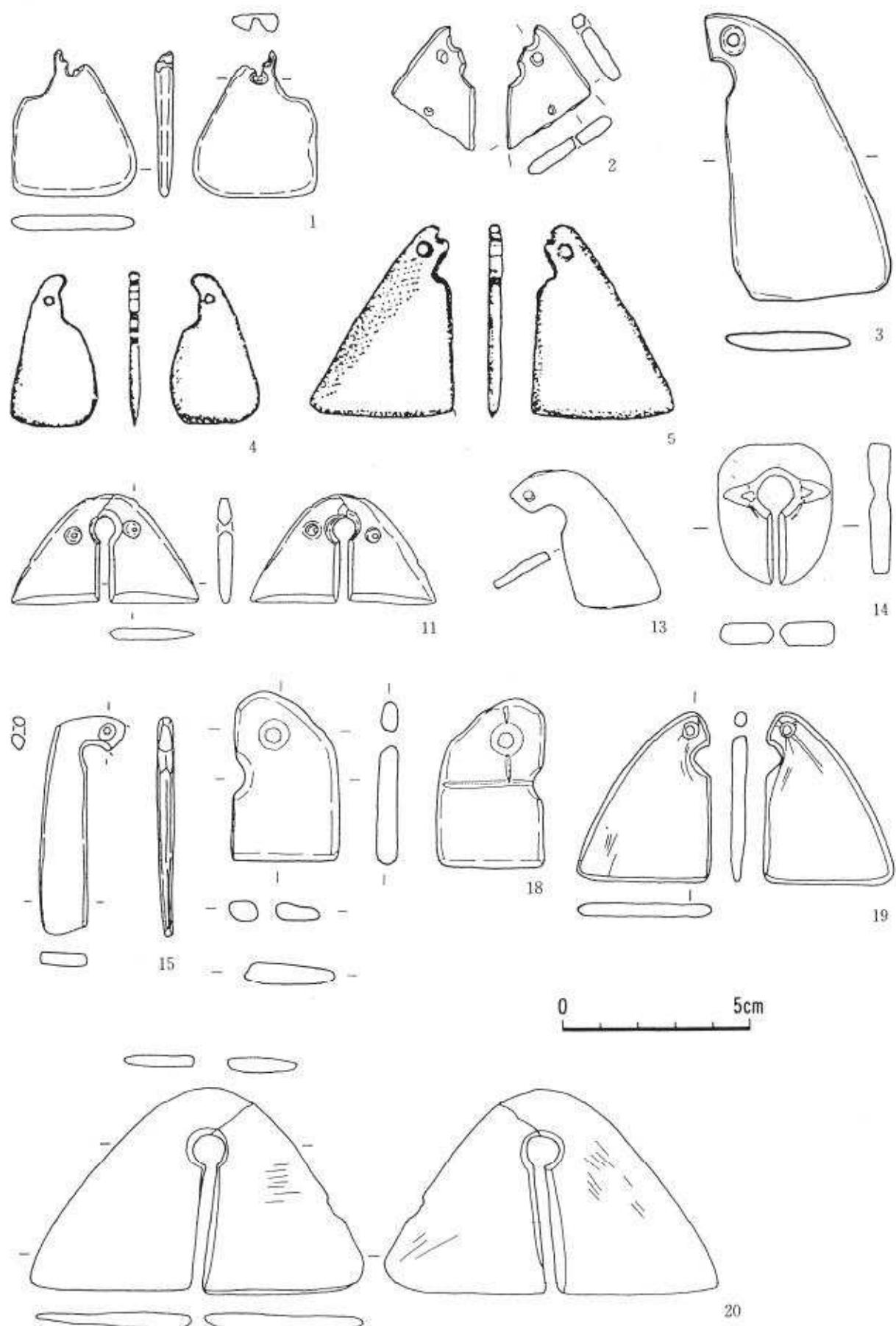


図2 青森県域出土の玦状耳飾り(1)

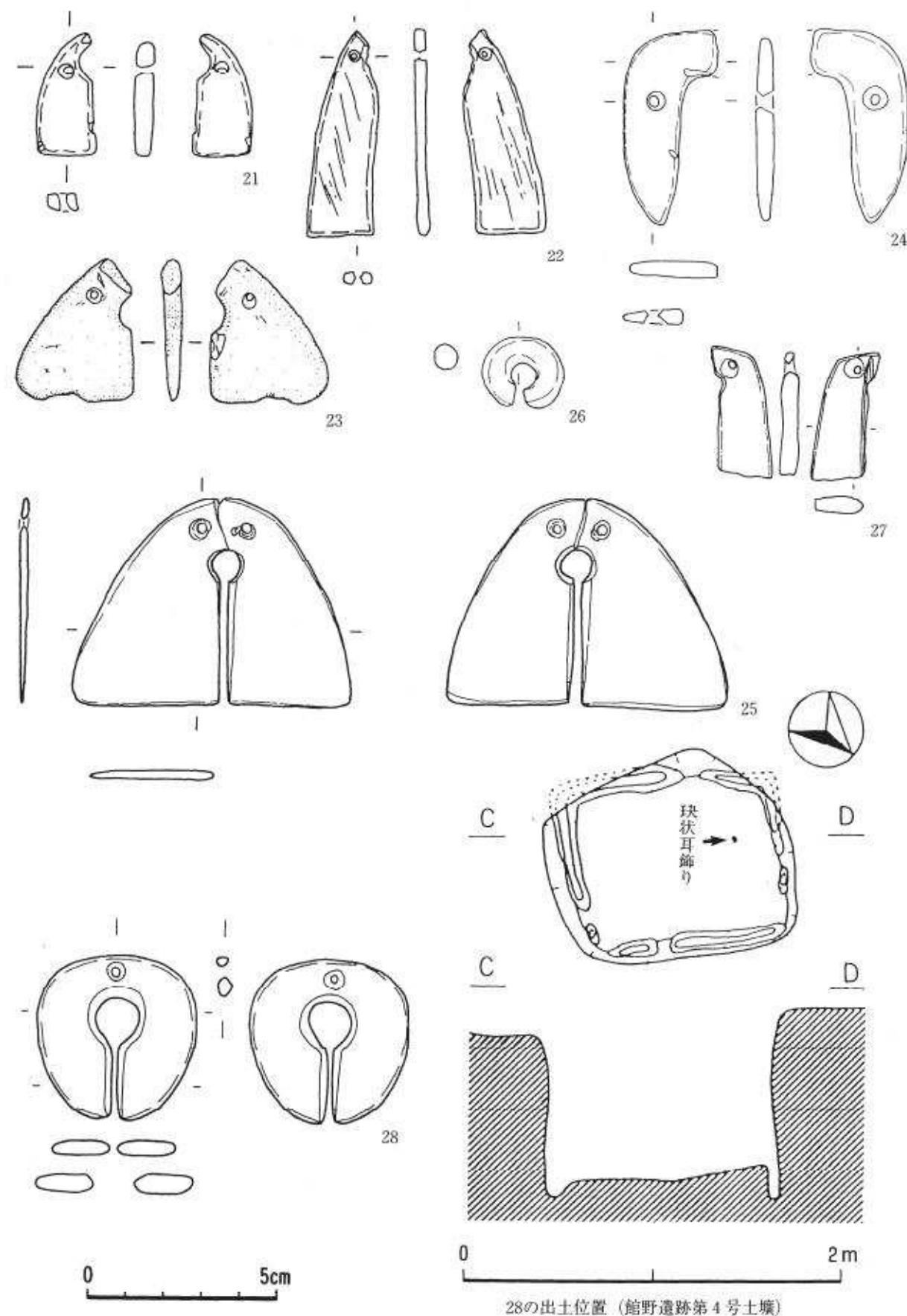


図3 青森県域出土の玦状耳飾り(2)

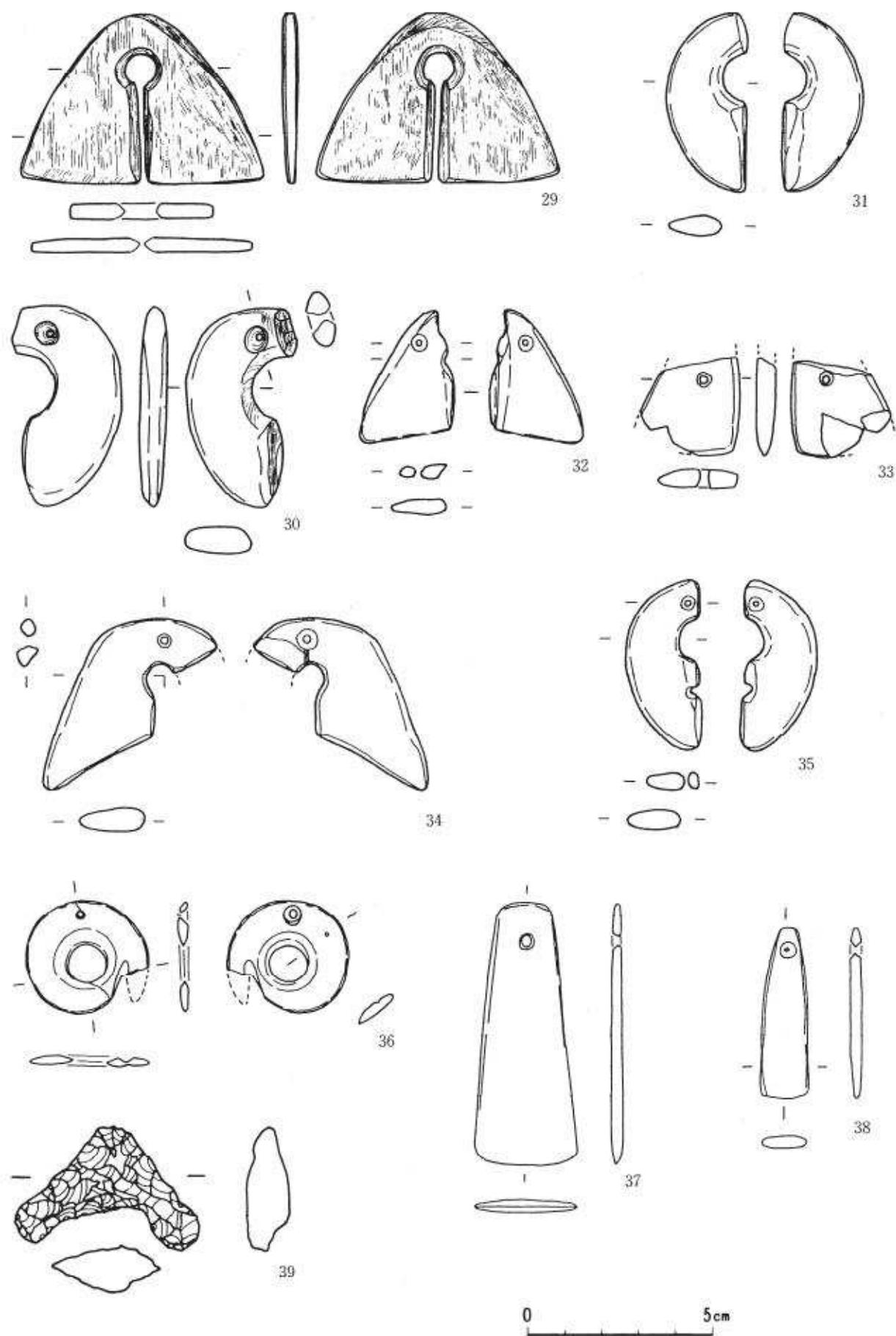


図4 青森県域出土の玦状耳飾り(3)と関連資料

表1 青森県域出土の块状耳飾り一覧

番号	遺跡名	点数	出土状況	時期(土器型式)	石材	注	備考(形態など)
図2-1	深浦町津山	1	第9号住居跡覆土	中期初頭(円筒上層a式)	軟玉	2	三角形,半欠,1孔,9.0g,住居跡は円筒下層d式期
2-2	鰐ヶ沢町鳴沢	1	包含層	前期末葉(円筒下層d2式)	粘板岩	3	三角形,半欠,2孔
2-3	森田村矢伏長根	1	表面採集	前期末葉か	滑石	4	三角形,半欠,1孔,旧勝山ヤブシ長根配石遺跡
2-4	森田村石神	1	1区包含層	前期末葉(円筒下層d1式)	滑石	5	三角形,半欠,1孔
2-5	森田村石神	1	4区包含層	前期末葉(円筒下層d1式)	凝灰質硬砂岩	5	三角形,半欠,1孔
写1-6	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-8
1-7	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,孔不明,PL.38-9
1-8	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-10
1-9	森田村石神	1	採集	前期末葉か	蛇紋岩?	6	三角形,半欠,1孔,PL.38-11
1-10	森田村石神	1	採集	前期末葉か	緑色碧玉?	6	長方形,完形,上部1孔,擦切線,PL.38-12,未製品か
図2-11	五所川原市原子	1	採集	前期末葉～中期初頭か	蛇紋岩	7	三角形,破片2点(各1孔,色違い)接合
写1-12	弘前市沢部(2)	1	包含層	前期中葉(円筒下層a式)	滑石	8	方形未製品,中央窪み,図版第5図-4,旧沢部II号遺跡
図2-13	青森市三内盡園	1	包含層	前期末葉～中期初頭か	不明	9	三角形,半欠,1孔
2-14	青森市三内丸山	1	以下,盛り土主体	中期前葉か	—	10	円形(隅丸方形状),完形
2-15	青森市三内丸山	1		中期中葉か	—	10	長方形(縦長),半欠,1孔
写1-16	青森市三内丸山	1		中期前葉	—	11	長円形,完形,P-102右上
写1-17	青森市三内丸山	1		中期前葉か	蛇紋岩?	11	三角形,半欠,1孔,P-102左下
—	青森市三内丸山	1		中期前葉か	—	11	三角形,半欠,1孔,P-102右下
—	青森市三内丸山	2		中期前葉か	蛇紋岩等?	12	三角形,半欠,各1孔,P-53上中,下左
—	青森市三内丸山	1		中期中葉か	—	13	長方形,半欠,1孔,P-30中
図2-18	青森市矢田前?	1	採集	前期末葉～中期初頭か	不明	14-15	斜横形,半欠,1孔,再加工,市内矢田か?
2-19	脇野沢村瀬野	1	第2号住居跡覆土	前期末葉(円筒下層d式)	蛇紋岩	16	三角形,半欠,1孔,9.7g
2-20	脇野沢村瀬野	1	第5号住居跡覆土	前期末葉～中期初頭(円筒下層d～円筒a)	翡翠	16	三角形,破片2点(孔なし)接合,30.7g,住居跡は円筒下層b式期
—	脇野沢村瀬野	1	表面採集	前期～中期	不明	17	三角形,半欠,藤沼邦彦氏が1969年5月に表面採集
図3-21	川内町熊ヶ平	1	捨て場A(包含層)	前期末葉(円筒下層d1式主体)	玉髓	18	三角形,半欠,1孔
3-22	川内町熊ヶ平	1	捨て場A(包含層)	前期末葉(円筒下層d1式主体)	珪質頁岩	18	三角形(縦長),半欠,1孔
3-23	大畠町水木沢	1	包含層	前期末葉か	滑石	19	三角形,半欠,1孔,8.0g
3-24	六ヶ所村富ノ沢(2)	1	第9号往居跡床面	中期中葉(桜井式かそれ以前)	緑色ホルンフェルス	20	長方形,半欠,1孔,7.7g
3-25	天間林村二ツ森	1	表面採集	前期末葉～中期初頭か	緑色細粒凝灰岩	21	三角形,破片2点(各1孔)接合,19.5g
3-26	八戸市長七谷地	1	包含層	早期末葉～中期初頭	滑石	22	円形(環状),完形
3-27	八戸市西長根	1	第10号住居跡覆土	中期中葉(大木8b式)	翡翠	23	斜横形(縦長),半欠,1孔,4.3g
3-28	福地村館野	1	第4号土壤底面	前期後葉か	緑色ホルンフェルス	15	円形,完形,上部に1孔,16.0g,II区,県立郷土館展示
図4-29	南郷村畠内	1	包含層	前期末葉～中期初頭か	緑色凝灰岩	24	三角形,完形,17.7g
4-30	南郷村畠内	1	第40号住居跡	前期中葉～末葉か	蛇紋岩	24	円形,破片,16.4g,再加工
4-31	青森市内	1	採集	前期後葉か	滑石か	1	円形,破片,孔なし,県立郷土館蔵
4-32	青森市内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石か	1	三角形,破片,1孔,県立郷土館蔵
4-33	五所川原市内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石	26	三角形,破片,1孔
4-34	深浦町内	1	採集	前期末葉～中期初頭か	滑石か	1	三角形,破片,1孔,県立郷土館蔵
4-35	不明	1	採集	前期後葉か	滑石	1-25	円形,破片,上部に1孔,県立郷土館蔵
—	不明	1	採集	前期～中期	不明	27	破片,個人蔵,佐井村内出土か

\*なお、三内丸山遺跡からは以上の他にも块状耳飾りが出土しており、計10点以上になるとみられる。また、村越潔氏は青森市新城岡町遺跡、木造町田小屋野貝塚出土の块状耳飾りが県立郷土館に収蔵されている旨記載されている(注8、28)が、この表にあるものと同一のものかどうかを含めて不明である。また、石材の記述については、統一がとれていないものがあるがあえて引用文献どおりにした。

に蛇紋岩製の块状耳飾り片(重さ9.7g)が1点出土した。また、第5号住居跡(径約5.60mの円形プラン。円筒下層b式期)覆土から円筒下層b式・d1式土器片、円筒上層a・b式土器片のほか、石槍・剣片・磨製石斧とともに翡翠製の块状耳飾り片が2点(接合した。重さ30.7g)出土した。

④六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡(24。中期中葉・楓林式期かそれ以前)

第9号住居跡(長さ4.9m、幅約3.5mの隅丸長方形プラン)床面から不定形石器とともに緑色ホルンフェルス製の块状耳飾り片(重さ7.7g)が1点出土した。ただし、土器は出土していない。

⑤南郷村畠内遺跡(30。前期中葉~末葉か)

第40号住居跡(長さ5.1mの不整形プラン。後期前半期)覆土から前期中葉・末葉、後期前半の土器片や石砲とともに蛇紋岩製の块状耳飾り片(重さ16.4g)が1点出土した。

### B. 土坑からの出土例

現在、1遺跡から1点出土している。

①福地村館野遺跡(28。前期後葉か)

II区第4号土壙(長さ1.30m、幅1.10mの不整長方形プラン。深さ0.90m。時期不明)の北西側の底面直上から緑色ホルンフェルス製の块状耳飾りの完形品(重さ16.0g)が1点出土したが、ほかの遺物はまったく出土していない。また、内部から人骨や赤色顔料は検出されていないが、プラン等から土壙墓とみられる。

### C. 盛り土からの出土例

現在、1遺跡から出土している。

①青森市三内丸山遺跡(14~17。中期前葉~中葉か)

盛り土遺構から完形品が2点・破片が6点出土している。従来であれば、遺構以外の包含層の出土品として扱われてきたものであろう。なお、この遺跡からはこれらのほかにも块状耳飾りが出土しているが、整理途中のため、正確な出土点数や出土状況・共伴した土器等は不明である。

### (2) 遺構外からの出土例(図2~4、表1、写真1)

①包含層からの出土例

現在、8遺跡から12点出土している。

早期末葉~前期初頭とされる八戸市長七谷地貝塚例<sup>(注26)</sup>、前期中葉の弘前市沢部(2)遺跡例<sup>(注27)</sup>、前期末葉とされる鰯ヶ沢町鳴沢(2)、森田村石神(4・5)、川内町熊ヶ平(21・22)、大畠町水木沢(23)の各例があり、ほかに前期末葉~中期初頭とみられる青森市三内靈園(13)、天間林村二ツ森貝塚(25)、南郷村畠内(29)例等がある。

②採集例

出土状況がまったく不明な採集品が13点(3・11・18・6~10・31~35)あるが、そのなかには五所川原市原子(11)発見の完形(復元)品がある。また、石神(10)には、块状耳飾りの製作工程途中の未製品とみられるもので、両面の孔の上下に縦の擦切り痕を残したものもある。

### III. 青森県域の块状耳飾りの様相

つぎに、本県域出土の块状耳飾りの形態分類を行い、それぞれの時期について述べるが、本来の形狀が想定されうるものに限定する。

### (1) 塗装耳飾りの形態分類(図2~4、写真1)

本県域出土の玦状耳飾りは大きくつぎの5タイプに分類される。

Aタイプ・・・円形(環状)で丸い断面をもつ。長七谷地貝塚から滑石製品(26)が出土している。

Bタイプ・・・円形(環状)で断面は扁平。切り目は縦の長さの1/2程度のもので、滑石製品とみられる青森市内例等(31・35)がある。

Cタイプ・・・円形(やや角張る)で断面はやや扁平。切り目は縦の長さの1/2程度のもので、滑石・蛇紋岩製品がある。沢部(2)例(12)は未製品、三内丸山(14・16)・館野(28)例は完形品で、館野例上部には1カ所貫通孔がある。また、畠内例(30)は欠損品であるが、破損面を磨って再利用したものである。

Dタイプ・・・長方形で断面は扁平。長い切り目をもつ。富ノ沢(2)例(24)は緑色ホルンフェルス製、三内丸山例(15)は長方形で縦長のものである。

Eタイプ・・・三角形で断面は扁平。頂部は弧状で、両端は丸みを持つものが大半を占める。大半が縦の長さの1/2以上の長い切り目を持つ。蛇紋岩・緑色凝灰岩製品等がある。本県域の玦状耳飾りには、このタイプのものがもっと多くあるが、さらにつぎのように細分される。

(a) 横長のもの・・・津山(1)、石神(4~9)、原子(11)、三内靈園(13)、三内丸山(17)、瀬野2例(19・20)、水木沢(23)、ニツ森(25)、畠内(29)、青森市例(32)があるが、水木沢例のように切り目が短いものもある。

(b) ほぼ正三角形のもの・・・矢伏長根(3)、熊ヶ平例(21)がある。

(c) 縦長のもの・・・熊ヶ平例(22)がある。

(d) 将棋形を呈するもの・・・上部が将棋の駒のように角張ったもので西長根例(27)がある。

Fタイプ・・・A~Eタイプ以外のものをここに分類したが、将棋形の矢田前?例(18)、下部が斜辺状を呈する深浦町例(34)がある。矢田前?例はE(d)タイプ、深浦町例はE(a)タイプに入れるべきかも知れないが、ともに再加工品とみられ、もともとの形態が不明なものである。

## (2) 现状耳飾り各タイプの時期

つぎに、各タイプの所属時期について述べるが、共伴した土器がわかるものから述べる。まず、本稿でAタイプとした長七谷地例は、伴出した土器が縄文早期末葉から前期初頭のものであることから、この時期のものと考えられる。また、Cタイプとした沢部(2)例は前期中葉の円筒下層a式土器、畠内例は前期中葉~末葉の土器に共伴していることから、それぞれの土器の時期のものと考えられる。また、Dタイプとした富ノ沢(2)例は、竪穴住居跡における土器との共伴関係から中期中葉のもの、また、E(a)タイプとしたものは、竪穴住居跡の内外で円筒下層d式~円筒上層a式土器に共伴する場合が多いことから、前期末葉か中期初頭と考えられる。また、E(b)タイプとしたものは熊ヶ平例によって前期末葉(円筒下層d式)と考えられ、E(c)タイプとしたものも同時期であろう。また、E(d)タイプとしたものは、西長根例が中期中葉の大木8b式土器に共伴していることから、この時期と考えられる。また、Fタイプとしたものは、再加工の前の形態が三角形であったとみられることから、前期末葉か中期初頭と考えておきたい。

なお、以上のはかに共伴した土器が不明であり、本県域の資料によるだけでは時期決定ができない

ものがあるため、これらについては諸先輩の研究成果や他県の例を参考にして述べる。

わが国出土の块状耳飾りの型式分類は、樋口清之氏(A~F分類)をもってはじめとするが、その後新たな分類と年代比定が藤田富士夫、西口陽一(①~⑪区分)、堀江武史(A~E分類)氏等によって行われている。また、近隣の北海道の块状耳飾りについては、三浦正人氏がまとめたものがある。

これらによれば、本稿のAタイプは、樋口氏のC類、西口氏の①に相当し、時期は藤田氏の富山県編年によれば前期初頭、西口氏も前期初頭としていることから、長七谷地例を早期末葉の土器もあることによって早期末葉と即断することはできない。早期末葉～前期初頭の時期と幅広く考えておくべきであろう。また、Bタイプは、本県では土器との共伴例がないが、秋田県協和町上ノ山II遺跡例(大木4・5式期主体)に類例があり、前期後葉と考えられる。樋口氏のC類、西口氏の③に相当し、西口氏も前期後半と推定している。また、Cタイプとした館野例は土壙墓内から出土した本県域唯一の例で、伴出土器はないが、上ノ山II例に類例があることから、同様に前期後葉と考えられる。樋口氏のB類、西口氏の④か⑤に相当するが、西口氏も⑤を前期後葉と推定している。また、E(a)～(c)タイプは、近隣では北海道函館市サイベ沢遺跡で円筒下層d1式に伴って出土し、同余市町フゴッペ貝塚のFH-20住居跡では前期末葉～中期初頭の土器に伴って出土している。このうちE(a)タイプは西口氏の⑨、E(b)タイプは樋口氏のE類、西口氏の⑥、E(c)タイプは西口氏の⑧に相当するが、西口氏もE(a)～(c)タイプを前期末葉～中期初頭と推定している。

なお、三内丸山例は、中期とされる盛り土遺構から出土したものが大半である。中期がまちがいないものとすれば、形態的にみて、Cタイプの(14)・(16)は前期の形態に近い点から、中期前葉あたり、また、Dタイプとした方形(樋口氏のA類、西口氏の⑦に相当)で、とくに縦長の三内丸山例(15)は、岩手県北上市樺山遺跡第II区例(中期中葉・大木8a式期)に長方形状の類例があることから、中期中葉あたりであろうか。ただし、三内丸山例については块状耳飾りの全容がまだ発表されていないため、結論は差し控えておきたい。報告書の早期刊行が期待される。

### (3) 块状耳飾りの製作と用途

石神・沢部(2)の両遺跡から块状耳飾り未製品とみられるものが各1点出土している。これから両遺跡を、ただちに玉作り(攻玉)遺跡とすることは、未製品等が少ないためできないが、津軽でも前期中葉～前期末葉の頃には、块状耳飾りが作られていたことは間違いない。ただし、それが当地から他地域へ供給を目的としたものであったとは考えられず、もっぱら自家用目的であったとみられる。

また、块状耳飾りの用途に関しては、前に述べたように、土壙墓内で人骨とともに出土した例は本県域では皆無であり、唯一土壙墓から出土した館野の場合は1点のみの出土であった。このことから前期後葉頃の本州北端地域では、块状耳飾りの片耳装着が行われていたことが想定される。また、本県域から出土した块状耳飾りの破損品は、大半が上部に1カ所穿孔されたものである。これらは、矢田前？・畠内例等の破損面に整形痕が認められることから、最終的に垂飾品(ペンダント)として再利用されたものが大半であったと考えられる。

### (4) 块状耳飾りと同時期の装身具(図5)

伊豆の八丈島(東京都八丈町)にある倉輪遺跡(前期末葉～中期初頭)から、本県域に多いE(a)タイプの块状耳飾りが1点(40)出土している。ここからは「“の”字状石製品」も1点(41)ともに出土している。ひらがなの「の」の字に似ていることから命名された装身具であり、本県では三戸町泉山遺跡で中期中葉の土器とともに1点(36)出土している。この石製品は、新潟県や北陸地方を主として全

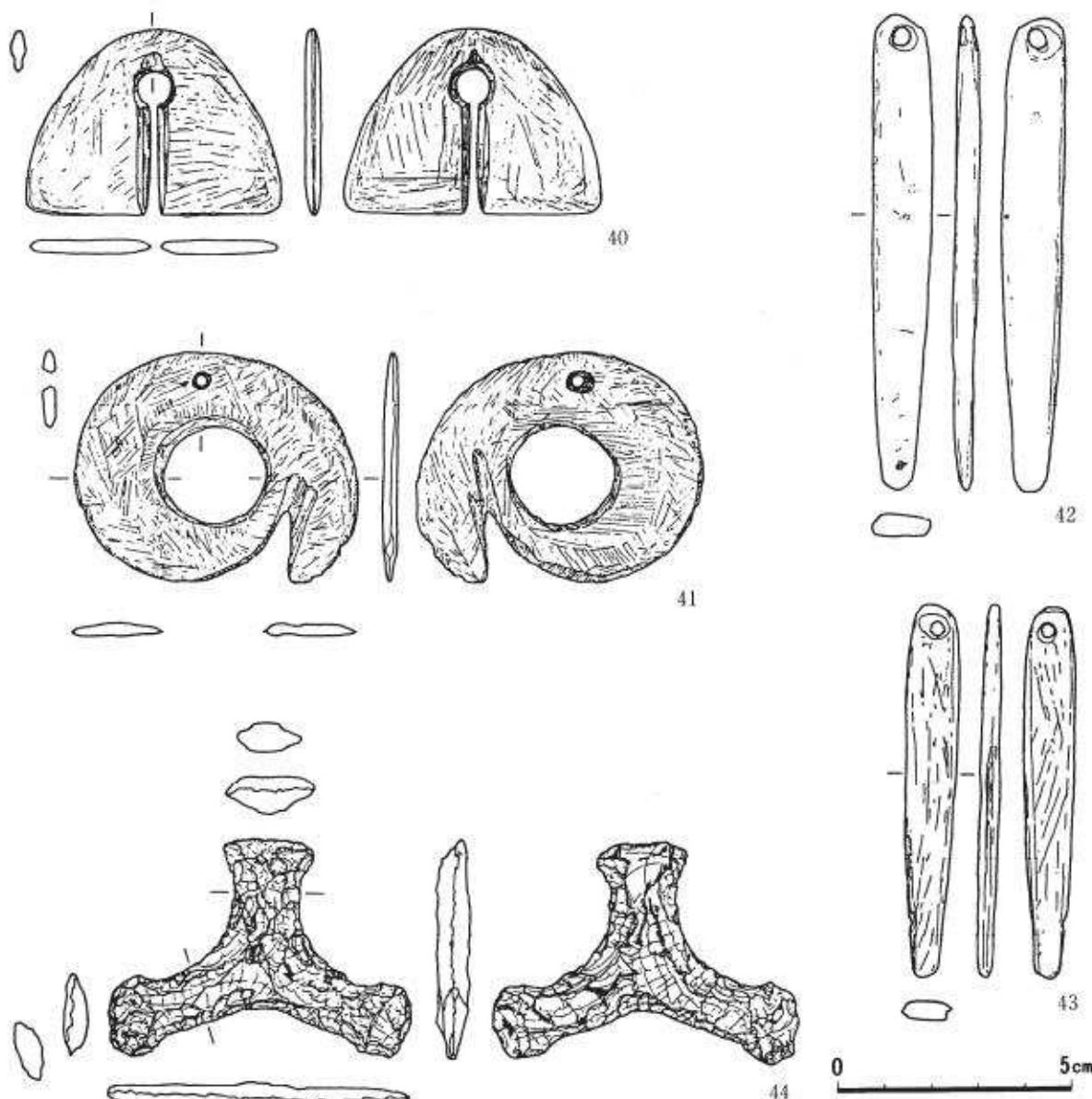


図5 八丈島倉輪遺跡出土の石製装身具

国12遺跡から13点出土しており、主たる時期は前期末葉～中期初頭である。これらのなかで泉山例のみがやや新しいのは伝世されたためとみられるが、これも本来的にはE(a)タイプの块状耳飾りと同時期に用いられた装身具である。また、倉輪では、块状耳飾りの破片を再加工した蛇紋岩製のペンダントが1点出土し<sup>(注41)</sup>、墓壙内では壮年女性の後頭部付近から棒状垂飾が2点(42・43)発見されている。藤田氏は、これを「ヘラ状垂飾」と呼称し、「ヘアピン」に類した髪飾りと考えているが、これと多少形態は異なるものの、短冊状の石製垂飾品が三内丸山からも出土<sup>(注42)</sup>している。块状耳飾りと同様の蛇紋岩製である。時期は不明であるが、块状耳飾りに並行する時期のものであろう。今ここで、仮りに「短冊形垂飾品」と呼称するが、棒状垂飾とは上部の1孔と細長い点が類似している。しかし、三内丸山2例の両端が幅広で直線的である点が異なっている。したがって、これと倉輪例を直接結びつけることはできないが、三内丸山では、块状耳飾りと同时期に、場合によってはセットとして「短冊形垂飾品」が垂飾品(ペンダント)として用いられたことも考えられる。倉輪ではさらに、これらの石製品とともに「Y字状石製品」(頁岩製)も1点(44)出土している。これに類似した石器は、本県で

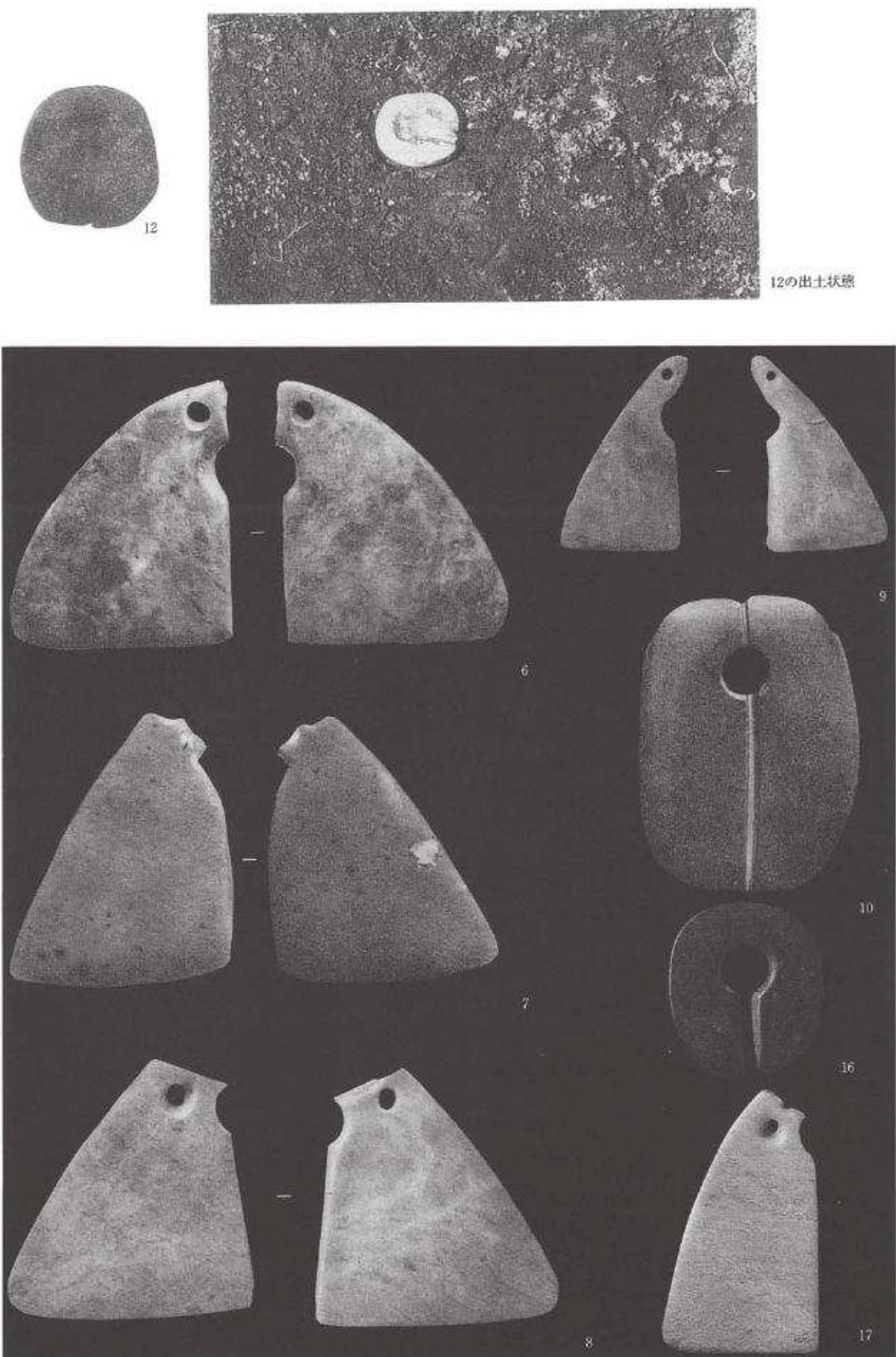


写真1 青森県域出土の玦状耳飾り  
(縮尺は、ほぼ原寸大にあわせてある)

は異形石器として扱われ、泉山例<sup>(注40)</sup>のほかにやや形態が異なるものの熊ヶ平・富ノ沢<sup>(2)</sup><sup>(注41)</sup>等のほか東北・北海道各地から出土している。これらの石器は剝片石器のため一般的には何らかの利器と考えられがちであるが、装身具と考えることはできないものであろうか。装身具とすれば、「短冊形垂飾品」と同様に、块状耳飾りと同時期に、場合によってはセットとして用いられた可能性も考えられるのである。

#### IV. おわりに

以上、青森県域出土の块状耳飾りを紹介し、型式分類・時期比定等を行った。また、同時期の関連するとみられる装身具についても触れた。これによって、本県域の块状耳飾りは、縄文早期末葉～前期初頭のものを最古とし、前期中葉・後葉から、中期初頭・中葉へとほぼ時期的につながることが明らかになった。そして、そのなかで前期末葉～中期初頭のE(a)～(c)タイプ(三角形)のものがもっとも多い(全体の過半数を占める)ことも判明した。しかし、共伴した土器が不明であるため、明確な時期比定ができなかったものも多い。また、本県域において块状耳飾りと同時期の装身具として一般的に知られるものは、中期前葉以降のヒスイ製品であるが、本稿で指摘したそれ以外の石製品は、東北地方では類例がきわめて少ないこともあって、従来ほとんど指摘されなかつたものである。今後、块状耳飾りを考える際に注意してもよい遺物であろう。

現在、本県域出土の块状耳飾り総数は41点(18遺跡以上)である。この数は北海道や東北各県とくらべて決して少いわけではなく、むしろ多いと言うべきであろう。これらの块状耳飾りは、早期末葉～前期初頭の攻玉遺跡が多数分布する北陸地方(長野県北部を含む)<sup>(注42)</sup>から継続的に大半がもたらされたものとみられる。それは攻玉遺跡の有無・技術・石材の点から推測されることである。块状耳飾りをめぐる北陸地域と津軽海峡域との長期にわたる交流が想定される。その交流のなかで、本稿でE(a)～(c)タイプとした前期末葉の块状耳飾りは列島規模で広範囲に分布しており、中期前葉以降にとくに緊密化する「北陸地域(糸魚川)～津軽海峡域間のヒスイをめぐる長距離交流の直前ないしは開始段階」を象徴する装身具と考えられる。块状耳飾りの研究は、単にその装身具としての意味だけではなく、文化交流史的意味からも重要である。

黒潮洗う絶海の孤島・八丈島倉輪遺跡からは、先に述べたE(a)タイプの块状耳飾りとともに北陸系土器や糸魚川産ヒスイとみられる玉類も出土している事実は、その意味できわめて象徴的である。

本稿を終えるにあたり、弘前大学人文学部の藤沼邦彦氏、天間林村教育委員会の甲田美喜雄氏、県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室の岡田康博・中村美杉両氏、県埋蔵文化財調査センターの木村鐵次郎・白鳥文雄両氏からは種々ご教示をいただいた。また、畠内遺跡出土の資料は当センターの茅野嘉雄氏に実測していただいた。銘記して感謝申しあげる次第である。

#### 『注』

- (1)白鳥文雄 1989 「块状耳飾りについて」 『館野遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- (2)青森県埋蔵文化財調査センター 1997 『津山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
- (3)青森県埋蔵文化財調査センター 1992 『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
- (4)西村正衛・櫻井清彦 1953 「青森県森田村附近遺跡調査概報(第二次調査)」 『古代』 第10号
- (5)村越潔 1970 「石器およびその他の遺物」(江坂輝弥編 1970 『石神遺跡』所収)
- (6)江坂輝弥編 1970 『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社

- (7) 福田友之 1997 「市史編纂だより38 新発見の考古資料紹介—青竜刀形石器と块状耳飾りー」『広報ごしょがわら』N0.886
- (8) 青森県教育委員会 1974 『小葉山地区遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第11集
- (9) 小野忠明編 1962 『三内丸山遺跡調査概報』 青森市の文化財1 青森市教育委員会
- (10) 青森県教育委員会 1996 『三内丸山遺跡VI』 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
- (11) 朝日新聞社 1997 「三内丸山遺跡と北の縄文世界」『アサヒグラフ別冊』通巻3928号
- (12) 東奥日報社 1994 「今甦る縄文の巨大集落 緊急特集三内丸山遺跡」
- (13) 朝日新聞社 1994 「三内丸山遺跡 よみがえる縄文の都」『アサヒグラフ』通巻3780号
- (14) 東北大学文学部 1982 『東北大学文学部考古学資料図録』第2巻
- (15) 青森県埋蔵文化財調査センター 1989 『館野遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
- (16) 西野 元編 1998 『青森県脇野沢村 瀬野遺跡(第2分冊)』 脇野沢村
- (17) 東北大学文学部考古学研究室が1969年5月に瀬野遺跡を発掘調査した際に、藤沼邦彦氏が表面採集した旨、藤沼氏からご教示いただいた。
- (18) 青森県埋蔵文化財調査センター 1995 『熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
- (19) 青森県教育委員会 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- (20) 青森県埋蔵文化財調査センター 1992 『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書V(1)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第143集
- (21) 天間林村教育委員会 1994 『二ツ森貝塚遺跡発掘調査報告書』 天間林村文化財調査報告書第2集
- (22) 青森県教育委員会 1980 『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- (23) 八戸市教育委員会 1995 『西長根遺跡発掘調査』『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- (24) 青森県埋蔵文化財調査センター 1999 『畠内遺跡V』 青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- (25) 鈴木克彦 1984 「風韻堂コレクションの装身具」『青森県立郷土館調査研究年報』第9号
- (26) 福田友之 1993 「参考資料」『五所川原市史 史料編1』 五所川原市
- (27) 平成3年(1991)7月に佐井村在住の所蔵者宅で実見した。
- (28) 村越 潔 1974 『円筒土器文化』 雄山閣考古学選書10
- (29) a. 橋口清之 1933 「块状耳飾考—石器時代身体装飾品之研究其一」『考古学雑誌』第23巻第1号  
b. 橋口清之 1933 「块状耳飾考—石器時代身体装飾品之研究其二」『考古学雑誌』第23巻第2号
- (30) 藤田富士夫 1970 「攻玉遺跡からみた块状耳飾の編年」『玉—日本玉研究会誌』第1号
- (31) 藤田富士夫 1989 『玉』 考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社
- (32) 西口陽一 1983 「耳飾りからみた性別」『季刊考古学』第5号 雄山閣出版
- (33) 堀江武史 1992 「块状耳飾りの分類と製作工具に関する」『國學院大学考古学資料館紀要』第8輯
- (34) 三浦正人 1983 「块状耳飾」(財)北海道埋蔵文化財センター編 『川上B遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第13集)
- (35) 秋田県埋蔵文化財センター 1988 「上ノ山II遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II下』秋田県文化財調査報告書第166集
- (36) 市立函館博物館 1958 『サイベ沢遺跡—函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書』
- (37) (財)北海道埋蔵文化財センター 1991 『余市町フゴッペ貝塚』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集
- (38) 北上市教育委員会 1968 「北上市稻瀬町禪山遺跡緊急調査中間報告」文化財調査報告第3集
- (39) a. 八丈町教育委員会 1986 「八丈町倉輪遺跡」  
b. 八丈町教育委員会 1987 「東京都八丈町倉輪遺跡」
- (40) 青森県教育委員会 1976 「泉山遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
- (41) 前山緒明 1994 「"の"字状石製品の分布をめぐる新動向—角田山麓縄文遺跡群の事例から—」『新潟考古』第5号
- (42) 藤田富士夫 1996 「ヘラ状垂飾についての一考察」『画龍点睛』 山内先生没後25年記念論集刊行会

(43) 青森県埋蔵文化財調査センター 1993『富ノ沢(2)遺跡発掘調査報告書VI(2)』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集

※なお、本稿で使用した図・写真は、引用文献に掲載されているものであるが、三内靈園例は白鳥氏が再トレースしたもの、矢伏長根例は、今回あらたに筆者が再トレースしたもの、また、二ツ森例は筆者が以前に実測したものである。

# 異形土器 切断蓋付土器

## -出土状態と器形を考える-

成田滋彦

### 1 はじめに(図1)

今回記載する『切断蓋付土器』とは、従来、蓋付土器・会口土器と呼称されていた土器であり、『…土器製作時の際に生乾きの状態で土器を切断して体部と蓋部とに二分する土器…』(傍線筆者)(成田1986)と定義したものを切断蓋付土器と理解する。そのため、当該時期で出土する蓋のみの土製品については、土器自体を切断していないため、切断蓋付土器の範疇には入らない。

筆者は昭和61年までの資料を用い、東北地方の資料を中心に『切断蓋付考』として、弘前大学考古学研究第3号に執筆した。その際に、このような特異な土器の切断蓋付土器の性格及び用途に関しては、祭礼儀式用として当時は把握したが、更に増加した資料を用いて出土状態と器形から使用用途を考えていきたいと思う。

なお、記載にあたっては対象地域を北海道・青森県・秋田県・岩手県とし、対象時期を縄文時代中期・後期に限定して考察する。

### 2 切断蓋付土器の出土状況(図2~4)

切断蓋付土器の出土状況を、遺構内と遺構外とに分けて記載する。

#### ー住居跡ー(図2・3)

住居跡内から出土したのは、6遺跡(注1)で9軒の住居跡から出土している。

##### 《住居跡の大きさ》

椭円形・円形の形態で、4m前後の住居跡の大きさが主体を占めている。三内遺跡(青森県1978)では、一部のみの検出であるが、6.6mを測り住居の拡張がみられ、大型住居跡の可能性が考えられる。また、張出部に埋甕が存在しているなど、他の検出住居跡と相異する。

なお、沖附(2)遺跡(青森県1986)では、住居跡の中央部に長径1.7m・短径1.2mの方形の落ち込みを有している点は、他の住居跡の床面構造と相異する面をもつている。

以上のように切断蓋付土器が出土した住居跡は、他の住居跡と形態・大きさを比較すると変化はみられない。この事は、岡本氏(岡本1983)が指摘しているように祭りの道具をゆうする住居跡は『…特



- 1 浜町A遺跡 2 戸井貝塚 3 矢不來2遺跡 4 中の平遺跡 5 今津遺跡 6 尻高(4)遺跡 7 大曲I遺跡 8 十面沢遺跡 10 三内遺跡 11 三内丸山(6)遺跡 12 小牧野遺跡 13 堂沢遺跡 14 月見野遺跡 15 浜懸遺跡 16 石持納屋遺跡 17 大石平遺跡 18 上尾駒(2)遺跡 19 沖付(1)遺跡 20 沖付(2)遺跡 21 弥栄平(6)遺跡 22 小田内沼(1)遺跡 23 薬師前遺跡 24 中ノ沢西張遺跡 25 苗代沢遺跡 26 切谷内遺跡 27 莉窪遺跡 28 長者森遺跡 29 田面木平遺跡 30 牛ヶ沢(4)遺跡 31 外長根(4)遺跡 32 泉山遺跡 33 君成田IV遺跡 34 駒板遺跡 35 滝谷III遺跡 36 田中(3)遺跡 37 合名沢遺跡 38 青久保遺跡 39 馬立II遺跡 40 馬立I遺跡 41 卵塚遺跡 42 立石遺跡 43 飛鳥平遺跡 44 大湯環状列石 45 高屋館遺跡 46 北の森II遺跡 47 はりま館遺跡

定の役割をもった住居の存在を想定させるが、それでも住居は他のものと変わることろは少ないため、祭りの場と日常生活の場あるいは集団の場と家族の場というものが未分化の状態を示すものと考えられよう…』としたが、切断蓋付土器をゆうする住居跡も集落内に於ける住居の変化はみられない。しかし、三内遺跡では大形住居から出土しており、大形住居の存在も検証する必要があると思われる。

#### 《切断蓋付土器の出土状況》

上尾駒(2)遺跡(青森県1988)では、B J 9号竪穴住居跡で炉内(注2)から出土し、C J 62号竪穴住居跡の床面から『…切断蓋付土器は、底部を上にした倒立状態で出土した…』このような倒立状態の置き方は、弥栄平(6)遺跡の第11号住居跡にもみられ『…床面南壁際から完形の第Ⅲ群2類土器(1)が1個体倒立した状態で出土した。口縁部をやや床面に埋め込んだ状態で設置したものである…』(青森県1991)とした状態であり、意識的に置かれた状態であることが考えられる。

なお、床面からの出土は上尾駒(2)遺跡B J 7号竪穴住居跡・馬立Ⅱ遺跡のB II a 10住居跡・B II b 9-2住居跡(岩手県1988)からも床面から出土しているが、出土位置は不明である。一方、住居跡の覆土からは三内遺跡のJ-14号竪穴住居跡・馬立Ⅰ遺跡のG II f-1住居跡(岩手県1988)から出土している。

なお、沖附(2)遺跡の第7号竪穴住居跡の出土は、第4層中で30cm離れて接合しており、別個に置いた可能性が考えられる。

#### 《住居跡内の堆積土》

堆積土の状況を概観すると、上尾駒(2)遺跡のB J 7号竪穴住居跡では第5層中から焼土・B J 9号竪穴住居跡の第1・4層中から焼土粒が出土しており、馬立Ⅱ遺跡のB II a 10住居跡で、第3層中から焼土粒が出土している。

これらの事例から、住居跡内の焼土の出土は焼失家屋で生じた焼土の堆積状況ではなく、住居跡の廃棄後に凹地で火を焚いた痕跡と考えられ、何らかの火を焚く行為を行ったと考えられる。

このように覆土を利用しておこなう行為は、前記した火を用いるものと、弥栄平(6)遺跡の第11号住居跡のように火を用いないものがあるが、住居跡の凹地を利用した行為が存在したと考えられる。

#### 《住居跡内の共伴遺物》

切断蓋付土器と他の遺物の共伴関係は、切断蓋付土器のみの出土の馬立Ⅱ遺跡、石器・石製品が共伴している弥栄平(6)遺跡・沖附(2)遺跡・上尾駒(2)遺跡のB J 7号竪穴住居跡があり共伴の遺物が少ないパターンの遺構と、馬立Ⅰ遺跡のように、ミニチュア土器・土製品等と多量の遺物が共伴しているパターンの遺構がみられる。

なお、三内遺跡のJ-14号竪穴住居跡からは、同一層位中から双口土器という異形土器と共におり、二個一対の関連が考えられる。

このように、前記した住居跡内の堆積状況からも考えてみると、切断蓋付土器の使用は、住居跡の床面でおこなわれた第一の行為が存在し、その後に住居跡廃棄後に切断蓋付土器を用いない第二の行為が存在した。その際は、遺物を多く用い火を使用した行為が行われたと考えられる。

#### -土坑- (図4)

##### 《出土遺跡》

切断蓋付土器が土坑内から出土したのは、青森県では尻高(4)遺跡(青森県1985)・小田内沼(1)遺跡(三沢市1992)・小牧野遺跡(青森市1996)・今津遺跡(青森県1986)・沖附(2)遺跡(青森県1986)・大石平遺跡(青森県1987)・上尾駒(2)遺跡(青森県1988)・薬師前遺跡(倉石村1998)と、秋田県の飛鳥平遺

跡(秋田県1982)の9遺跡から土坑内で出土している。

なお、今津遺跡の第1号埋設土器及び上尾駒(2)遺跡のB-3埋設土器は、報告書中では埋設土器と報告されているが、図版等を再検討すると土坑内に直立して出土したと考えられるので、土坑の項目に分類して記載する。

#### 《土坑の形態・大きさ・堆積土》

形態には、断面形がフラスコを呈するフラスコ状ピットと、平面形が橢円形・円形・不整形等のピットの形態がみられる。

土坑の底面は、フラスコ状ピットが150cmを越えるのに対して、フラスコ状ピットは100cm前後に集中している。

なお、小牧野遺跡の第128号土坑のフラスコ状ピットは、坑底面178cm・深さ193cmと検出したフラスコ状ピットの中で最大である。また、大石平遺跡のX-2区では検出した第209号フラスコ状ピットも坑底面が200cmを測り、X-2区の中では最大を測るものである。

この事は、切断蓋付土器が出土したフラスコ状ピットは、集落の中でも大型な土坑であることが指摘できる。

堆積土では、小牧野遺跡の第128号土坑の堆積土中に焼土を含んでいるが、前記の住居跡内の体積土で指摘したその場で火を焚いて生じた焼土かどうかは判断できない。

#### 《切断蓋付土器の出土状態》

出土位置は、土坑内の底面と覆土に分かれる。底面は、大石平遺跡ではフラスコ状ピットの周縁部から多く出土し、今津遺跡・飛鳥平遺跡・上尾駒(2)遺跡B-3埋設は横位の状態で出土している。

なお、薬師前遺跡では直立と倒立がみられるものである。覆土からは、沖附(2)遺跡・小牧野遺跡第128号土坑が横位の状態で出土し、小田内沼(1)遺跡では『…土壤内から埋設された切断土器が直立して出土した。土壤内の底面に据え置かれず、覆土2層を寄せて据え置き、その後さらに覆土2層で埋めたものと思われる…』として人為的に堆積土を動かしているものである。

#### 《共伴遺物》

切断蓋付土器と共に伴した遺物は、尻高(4)遺跡・小牧野遺跡の第128号土坑が石器と共に伴しており、大石平遺跡の第330号土坑では石器と土器片円盤が、沖附(2)遺跡では粗製の深鉢形土器が共伴している。なお、薬師前遺跡では3号棺から猪牙製垂飾品9点とベンケイ貝製腕輪4点が出土している。

#### 《人骨の有無》

薬師前遺跡では、土器内から壮年期男性・壮年期女性・成人か小児の3個体分の人骨が出土している。

また、小田内沼(1)遺跡では土器内の土壤分析をおこなった所、埋葬した土坑墓の可能性が高いという結果を得ている。

### 一埋設土器一(図4)

埋設土器は、上尾駒(2)遺跡(青森県1988)のB-1埋設土器1基のみの検出であり、遺跡内に位置する住居跡群とは、離れた地点から検出している。

出土状態は、やや傾いているが直立状態で出土しており、埋設土器の掘り方は円形を呈する。

土器は完形で器外面に赤色顔料を塗布している。

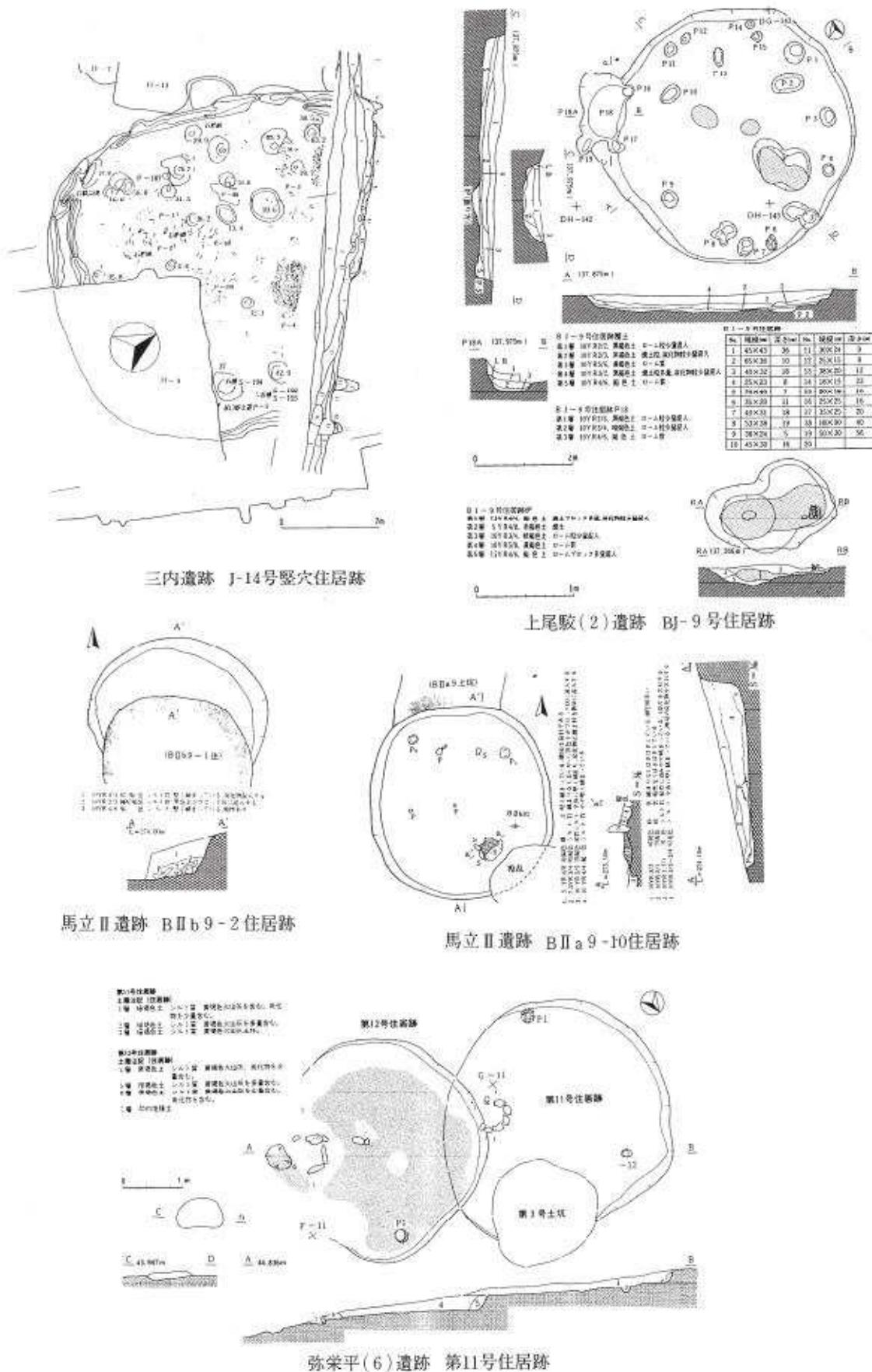
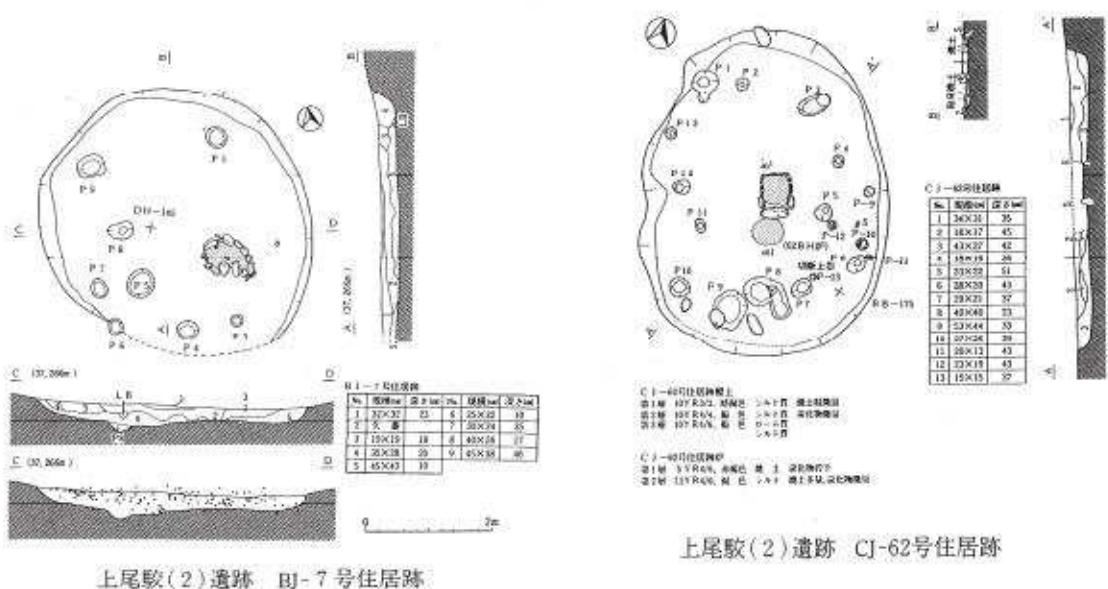
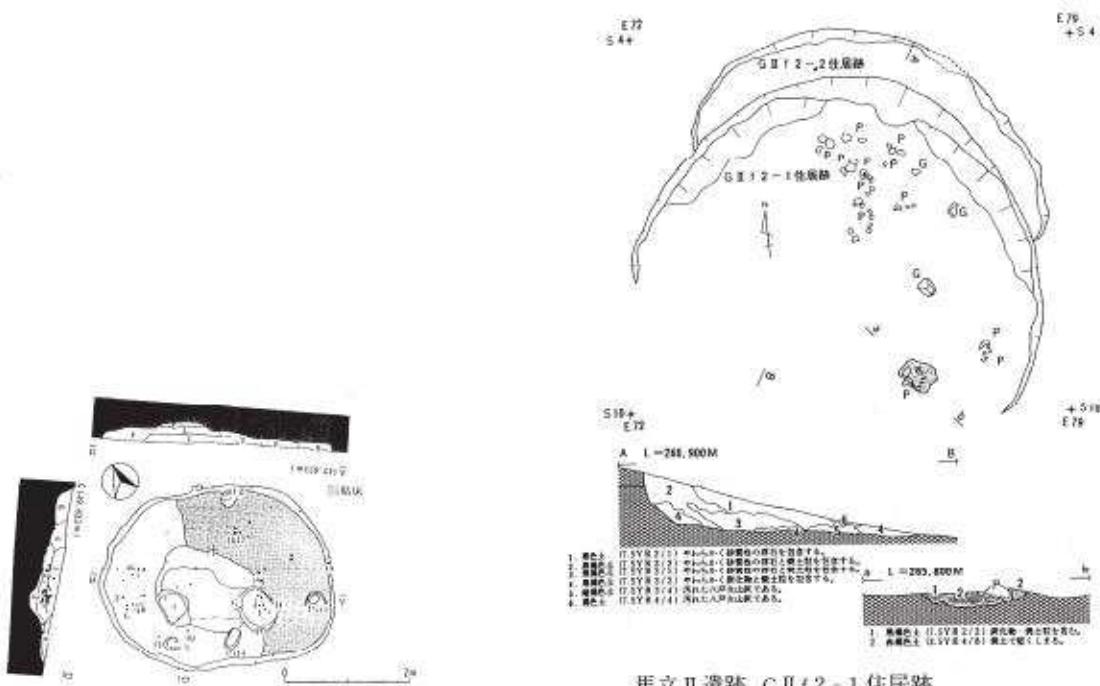


図2 住居跡(1)



上尾駁(2)遺跡 CJ-62号住居跡



沖附(2)遺跡 第7号竪穴住居跡

図3 住居跡(2)

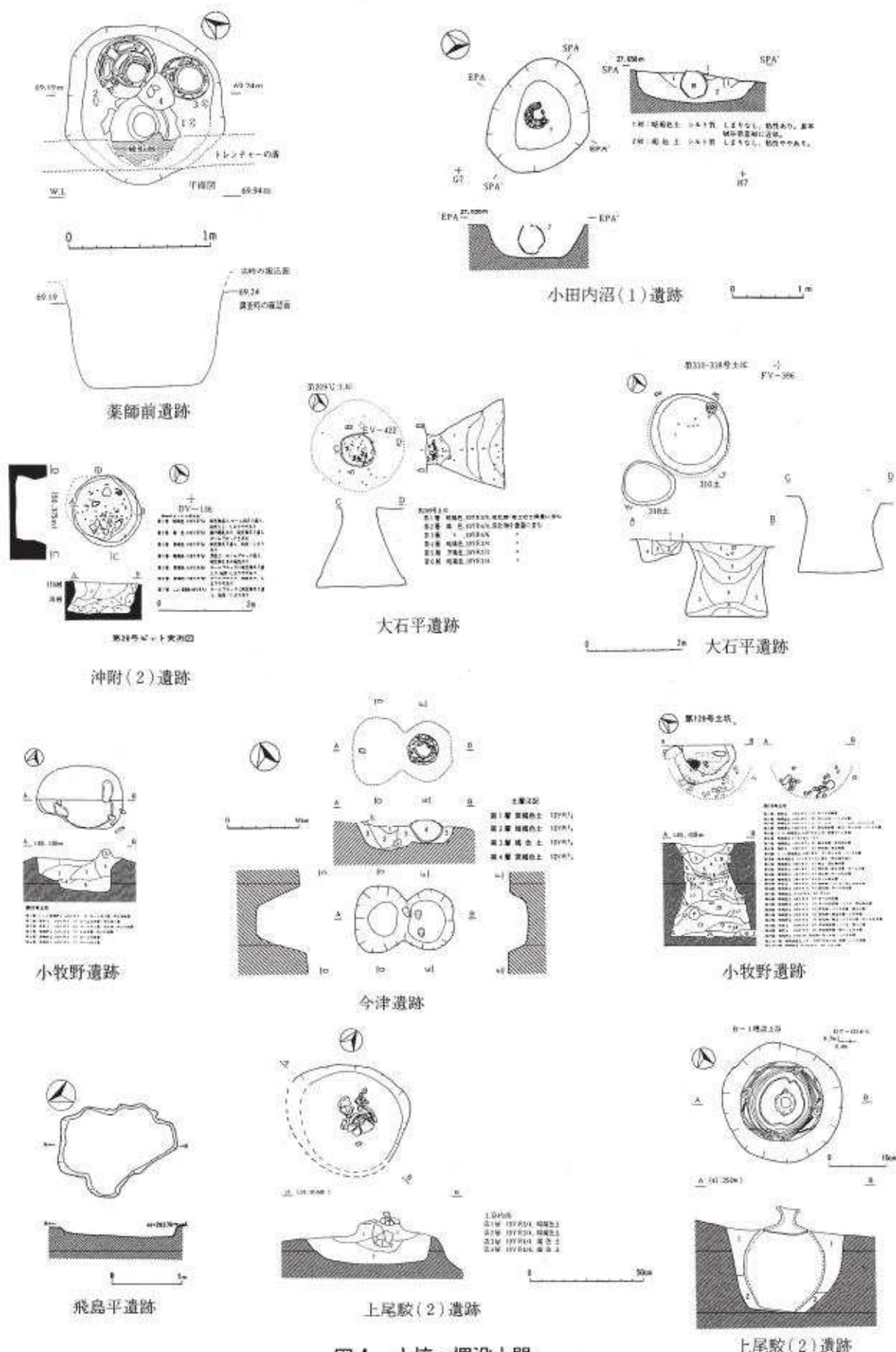


図4 土坑・埋没土器

## —遺構外—

### 《出土遺跡》

遺構外とは、遺構に伴わない遺物包含層と呼称されているものを遺構外に分類している。

遺構外から出土した遺跡は、北海道2遺跡・秋田県4遺跡・岩手県9遺跡・青森県25遺跡と40遺跡と遺構外からの出土が多い。

また、遺跡内においては、遺構外のみの出土遺跡と、遺構（土坑及び住居跡）と遺構外が組合わされて出土がみられる遺跡もあるが、遺構外のみの遺跡が多く占める。

### 《出土状態》

報告書中で、出土状態を記載しているものは、外長根(4)遺跡(青森県1981)で、直立状態で出土し、部分的に飛び散った状態で出土しており、長者森遺跡(青森県1983)でも直立状態で出土し、蓋部が1m離れた地点から出土している。

遺跡内では、大石平遺跡(青森県1987)で切断蓋付土器が南側地区に集中して出土しており、使用場所の限定も考えられる。また、高屋館遺跡(秋田県1990)・大湯環状列石(鹿角市1986・1993・1995・1998)のように環状列石の遺構と関連が強い出土もみられる。

なお、遺構との関連では弥次郎窪遺跡(青森県1990)の『…北側の南面斜面上から出土した第Ⅲ群土器も同様であるが、土壙等の遺構が集中している範囲と出土地点が一致する…』として、土坑との関連が強いと指摘している。

しかし、切断蓋付土器の出土状態を記載している報告書が少なく、遺構外からの出土状態を十分に検証できないのは残念である。

## 2 切断蓋付土器の器形（図5）

### A 《切断蓋付土器のプロポーション》

土器のプロポーションは、口頸部が内反し、内反度の強いものと、強くないものがある。胴部は中央部及び下半部が張りだした壺形の器種である。

口縁部と底部の計測を対比図の図5をみると、口縁部の計測を1とすると、底部の計測が2という1:2の比率のものが主体を占める。なお、尻高遺跡図5-2は、口縁部と底部が1:1という比率であり、他の土器とは形態に差がみられるものである。

胴部の文様帶は、図5-3からみると切断面のラインと、器形が最大に張りだすライン及び底部のラインとで対比すると、すべて1:1の対比で文様区画帯を構成しており、多くの切断土器も同様である。なお、図5-4は、1:2の対比で区画帯を広義に構成しているものであるが類例は少ない。このようにプロポーションを計測及び比率の対比という観点からみると、切断蓋付土器の器形のプロポーションは、底部及び口縁の対比との関係を意識した製作であり、かつ文様区画帯にも一定の規制がみられるものである。

### B 切断蓋付土器と他の器種との関連

#### 《上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡》

青森県六ヶ所村に所在する上尾駒(2)遺跡(青森県1988)と大石平遺跡(青森県1985・1986・1987)の二遺跡は、尾駒沼と老部川に挟まれた標高約50mの河岸段丘上で、尾駒沼寄りに上尾駒(2)遺跡、老部川寄りに大石平遺跡が位置している。

両遺跡は、むつ小川原開発に伴う工事で青森県教育委員会が、昭和58年～61年にかけて、ほぼ全面を調査した遺跡である。

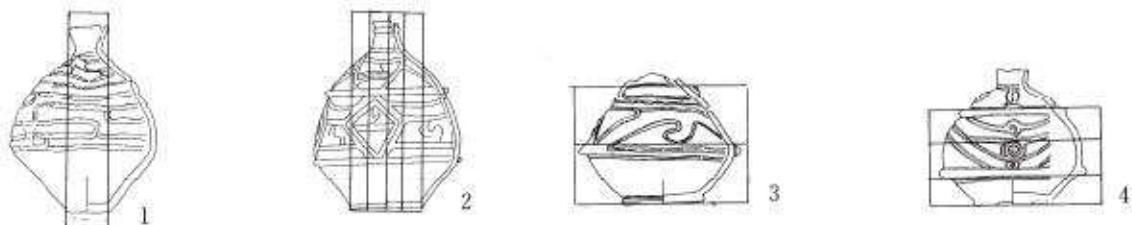


図5 計測対比図

調査の結果、縄文時代後期の集落である点、時期が十腰内I式を主体としている点、大規模な集落である点など多くの共通点をもつ遺跡である。また、集落の距離が800mしか離れておらず、当時からこの集落が同一時期に形成されていたのか、時間差をゆうする集落であったかなど議論があった。しかし、いまだ二遺跡について比較及び検討を加えた論考は表れていない。

今回、切断蓋付土器が両遺跡から出土しており、同一時期の面から切断蓋付土器をも含めた他の器種にも検討を加え、切断蓋付土器の用途にふれてみたいと思う。

なお、集落の構造及び他の遺物も総括しての検討が必要であるが、形態及び器種に限定して検討を加えたい。

#### 《器種の問題》(図6・7)

上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡の出土土器の器種は、深鉢・鉢・台付鉢・片口・壺形の5器種に分かれる。

磯崎氏は十腰内I式の器形について『…津軽方面の十腰内I式は壺・鉢・浅鉢などが多く、皿、注口などは極めて少ない…』(磯崎1964)と指摘しているが、この器種の傾向は十腰内文化圏の器種にあてはまる。

土器に関しては、口頸部が内反するA種と、外反するB種及び底辺部がえぐれるC種とに分け、更に種の中で細分する。

A種1…口頸部が内反し、胴部上半がはるもの (図6)

A種2…口頸部が内反し、肩部がはるもの (図6)

B種1…口頸部にむかって外反するもの (図6)

B種2…口唇部寄りが内反するもの (図6)

C種…底辺部がえぐれ、あげ底を呈するもの (図6)

深鉢形は、器種の中で最も多く出土するもので、A種の形態を多く占める。

鉢形は、形状において深鉢形の形態と同様のA種・B種の他に、C種が存在し器種の中でも多くのバリエーションをゆうする。

台付鉢形は、A種2及びB種2の形状がみられず、形態が片寄る器形である。

片口は、器高の差があるものの、A種1のタイプである。

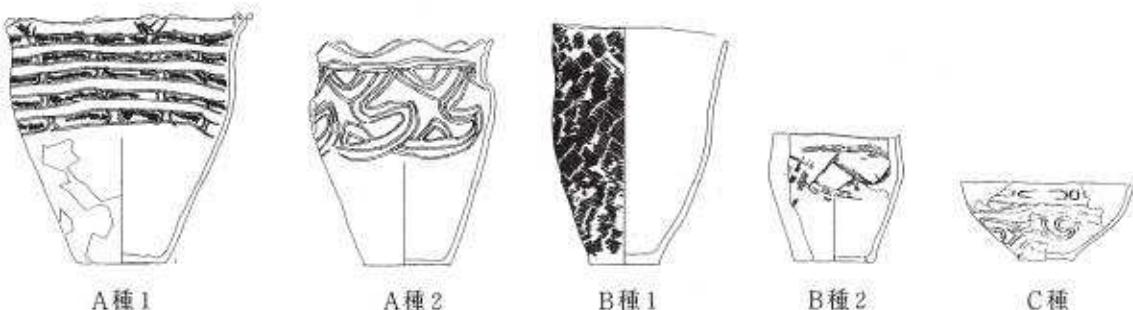




図7 切断蓋付土器と壺形土器の対比図

壺形は、基本的な形態としてはA種1である。A種1の中で張りだす部位の部分が胴部上半・胴部中央部・胴部下半部とに分かれる。また、橋状把手をゆうする土器もみられる。

以上のように器種と形態を上尾駿(2)遺跡と大石平遺跡とで比較・検討(図7)すると、深鉢形ではA種1を多く製作し、主体的な形態である点は両遺跡ともに変化はみられない。

鉢形は多くのバリエーションをもつ点も類似している面を有し、深鉢形と鉢形と片口についても形態に変化はみられない。

壺形では、上尾駿(2)遺跡で長頸壺及び形状の胴部上半が張るプロポーションをもつ土器が多く、橋状把手を有する壺形が少ないという特徴があるのにに対して、大石平遺跡では胴部上半部がはる形態が少なく、橋状把手をゆうする壺形が多いという特徴があり、形状面で相異する面が指摘できる。

切断蓋付土器は、胴部下半部が張りだし口頸部の内反度が強く、口縁部が狭い点及び突起の吊り手を有する点など、切断蓋付土器以外の壺形土器と形態を異にしている。

また、大石平遺跡では大形で胴部下半部が張りだす形態のものが多いなど、切断蓋付土器においても二遺跡に形態の差がみられる。

なお、大石平遺跡では鉢形C種と台付鉢形の出土が多いのに対して、上尾駿(2)遺跡では壺形土器に多くのバリエーションがみられる点と台付鉢形が少ない点があげられる。

この二遺跡は、器種の中の形状のバリエーション及び器種の製作や、遺跡における使用という面で相異している。この事は、切断蓋付土器の製作でもプロポーション・器高の面で差異がみられる。つまり、器種及び切断蓋付土器からみれば、別個の集団ではないかと考えられる。

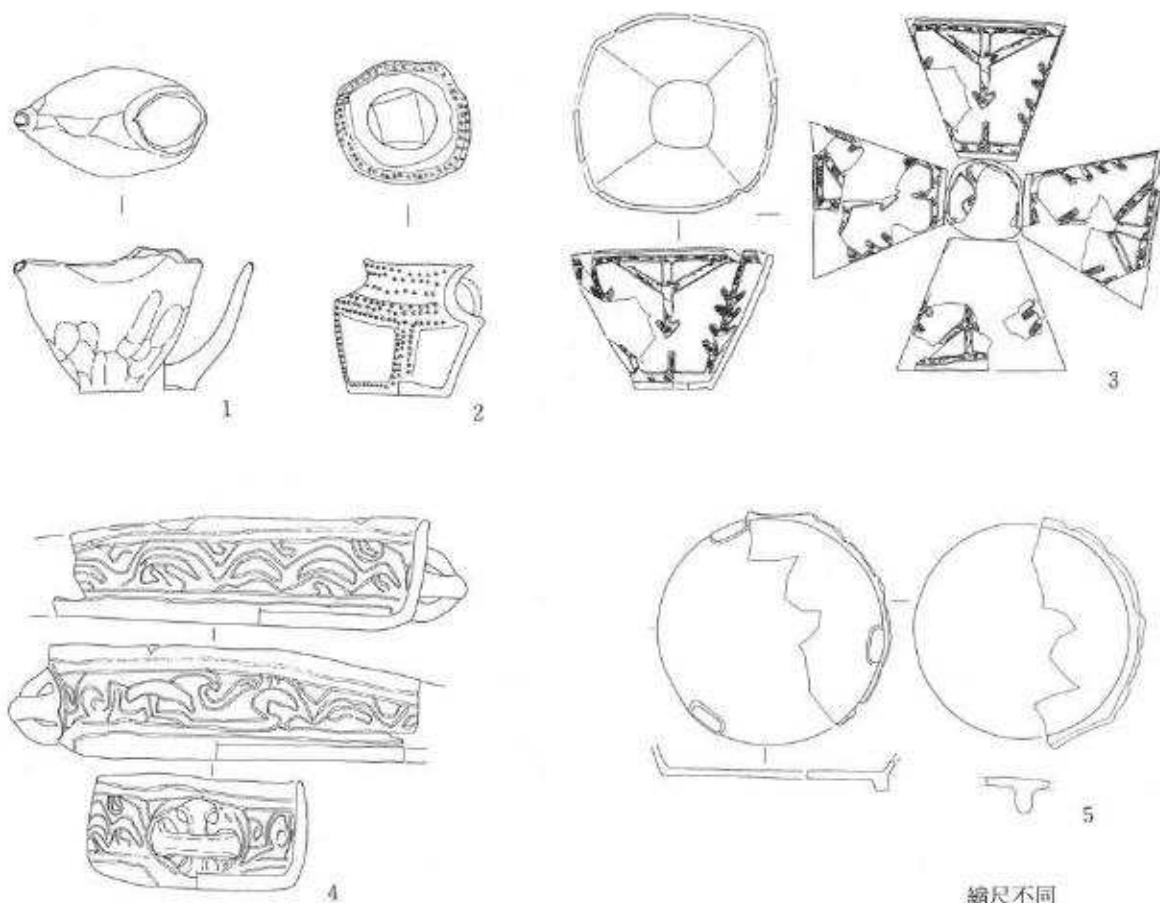


図8 異形土器集成

縮尺不同

### 《異形土器の発生》(図8)

切断蓋付土器以外の異形土器を概観する。

今回は、異形土器の範疇に片口及び注口土器は含んでいないが、本地域の器種の中では極端に出土例が少ない。また、動物を底面に貼り付けている動物内蔵土器及び狩猟文土器も、今回の異形土器に含んでおらず、日常容器とは異なるプロポーションを呈する土器を異形土器として把握した。(注3)

図8-1は、報告書中では双口異形土器と呼称されているものである。無文で二つの開口部を両端に有し、胴部がふくらむ現代の「鳩笛」に似た形態である。

図8-2・3は、形状が方形を呈する土器である。

2は口頸部が内反し平口縁で把手を有する形状であり、3は底辺部から口唇部にかけて外反する形態である。文様は、2が全面に刺突文・3が四面に弓矢状の文様と樹木を組み合わせた文様を施している。

図8-4は、片側に十字形の把手が付く把手付鉢であり、全体の形状は現代の「おまる」にちかい形を呈している。文様は、沈線の橢円形文様を片面では規則性をもつモチーフに対して、片面は不規則なモチーフで施文されている。

図8-5は、脚部をもつ土器である。全体の形態は不明であるが、残存部から推定すると脚部をもつ皿形土器と思われる。

これらの異形土器の時期は、1が縄文時代中期の最花式・3が縄文時代後期の前十腰内I式、2・4・5が縄文時代後期の十腰内I式に比定される。

土器に施文される文様をみると、2は十腰内I式では部分的にしか使用していない円形刺突を全面に施文している点や、1は四面に狩猟文のモチーフで構成されている点、4は片面の施文が十腰内式の文様パターンの基本である主体文様と副次文様の組み合わせがみられるの対して、片面は不規則なモチーフで相反する文様構成となっている。

このようにみてくると、異形土器の発生は、当初から日常容器とは別個なものとして考えられて器を作製し、文様も日常容器とは相反する文様を描くという社会的背景が存在していたと考えられる。なお、形状からみると1・2・4の把手及び注口を有するプロポーションの土器は、容器に物を蓄え注ぐ(注4)という用途が考えられ、3・5は注ぐという行為より物を蓄えるという行為が優先される用途が考えられる。形態の面から判断すると、二つの用途が考えられると思われる。

### C 《切断蓋付土器の時期別変遷》

出土した切断蓋付土器の時期別の変遷をみると、切断蓋付土器の製作は三内遺跡の縄文時代中期後葉の最花式から縄文時代後期中葉の十腰内I式にかけての時期に製作される。

時期毎に概観するが記載するにあたって、縄文時代中期を最花式・大木10式併行期に、縄文時代後期は前十腰内I式期と、十腰内I式とに大別して記載する。

なお、切断蓋付土器の時期を決定するにあたっては、発掘調査時の共伴遺物を基本に区別したが、一部の土器は文様施文で判断している。

#### 一縄文時代中期一

##### 《最花式》図9-1

最花式に該当するのは、三内遺跡(青森県1978)であり、出土した切断蓋付土器の中では初現期の土器である。

形態は、口縁部を一部欠損しているが、胴部下半に膨らみをもつものであり、器外面に横位調整がみられる無文の土器である。

当初、この土器は縄文時代後期に分類されていた土器であった。この原因は無文土器＝後期という考え方であった為であり、出土したJ-14号住居跡の共伴遺物を再検討すると最花式に併行すると考えられたからである。

#### 《大木10式併行期》図9-2・3

三内稻荷林遺跡(成田1986)注(5)・戸井貝塚(戸井町1993)が概当すると思われる。

形態は、図9-2が胴部下半が張りだすもので、前段階の形態と類似したものと、胴部の中央部が張りだし口頸部が長い形態の二種の形態がみられる。

文様は、磨消縄文を用いて胴部下半に波頭状文を巡らして区画帯を構成し、区画帯の内部にJ字状及び楕円形文様を施文している。

#### 一縄文時代後期一

##### 《前十腰内I式期》図9-4~19

縄文時代後期初頭期～前葉期に至る期間を、前十腰内I式期として一括してまとめて把握する。

長者森遺跡(青森県1983)・螢沢遺跡(青森市1979)・今津遺跡(青森県1986)・弥栄平(6)遺跡(青森県1991)・沢掘込遺跡(青森県1992)・沖付(2)遺跡(青森県1986)・薬師前遺跡(倉石村1998)・牛ヶ沢(4)遺跡(青森県1997)・北の林II遺跡(秋田県1982)・馬立II遺跡(岩手県1988)・青ノ久保遺跡(岩手県1987)から出土した切断蓋付土器が、出土状態及び共半遺物から当該期に該当すると思われる。

形態は、胴部下半が張りだすグループ、胴部中央部及び上半部が張りだすグループ、口頸部から胴部にかけてずん胴のグループ、橋状把手をもつグループの四形態に分類でき、胴部下半が張りだすグループのものが多い。

文様は、文様要素として沈線及び磨消縄文を用いて施文している。

文様構成は、図9-14が器外面の全面に文様を施文しているが、多くは胴部の張りだし部に横位の沈線を巡らして区画帯を構成している。

区画帯の内部には、コの字状文及び横位方向に展開する稚拙な入組文を施文している。

##### 《十腰内I式期》図10-20~36

十腰内I式は、編年状a・b式に二分できるが、今回は二分せず十腰内I式と一括した。

当概期に相当する遺跡は、中の平遺跡(青森県1975)・上尾駒(2)遺跡(青森県1988)・大石平遺跡(青森県1987)・弥次郎窪遺跡(青森県1990)・小田内沼(1)遺跡(三沢市1992)・小牧野遺跡(青森市1996)・大湯環状列石(鹿角市1993・1998)が概当すると思われる。

また、十腰内I式に至っては、切断蓋付土器が出土する遺跡と出土しない遺跡とに分かれる。

形態は、胴部下半が張りだすグループ、胴部上半及び中央部が張りだすグループ、ずん胴形のグループ、橋状把手をもつグループの四形態であり、前段階と比較すると胴部上半及び中央部が張りだすグループの形態が多いのが特徴である。

文様は、図10-21が器外面の全面に施文しているが、他は横位沈線及び粘土紐を巡らして区画帯を構成している。

区画帯の内部には、横位方向に展開する稚拙な入組文図10-26、及び縦位方向に展開する渦巻文様と図10-24と、横位沈線間にS字状文図10-31を施文している。

### 3 おわりに

今回、切断蓋付土器を出土状態と器形という観点から分析をこころみた。

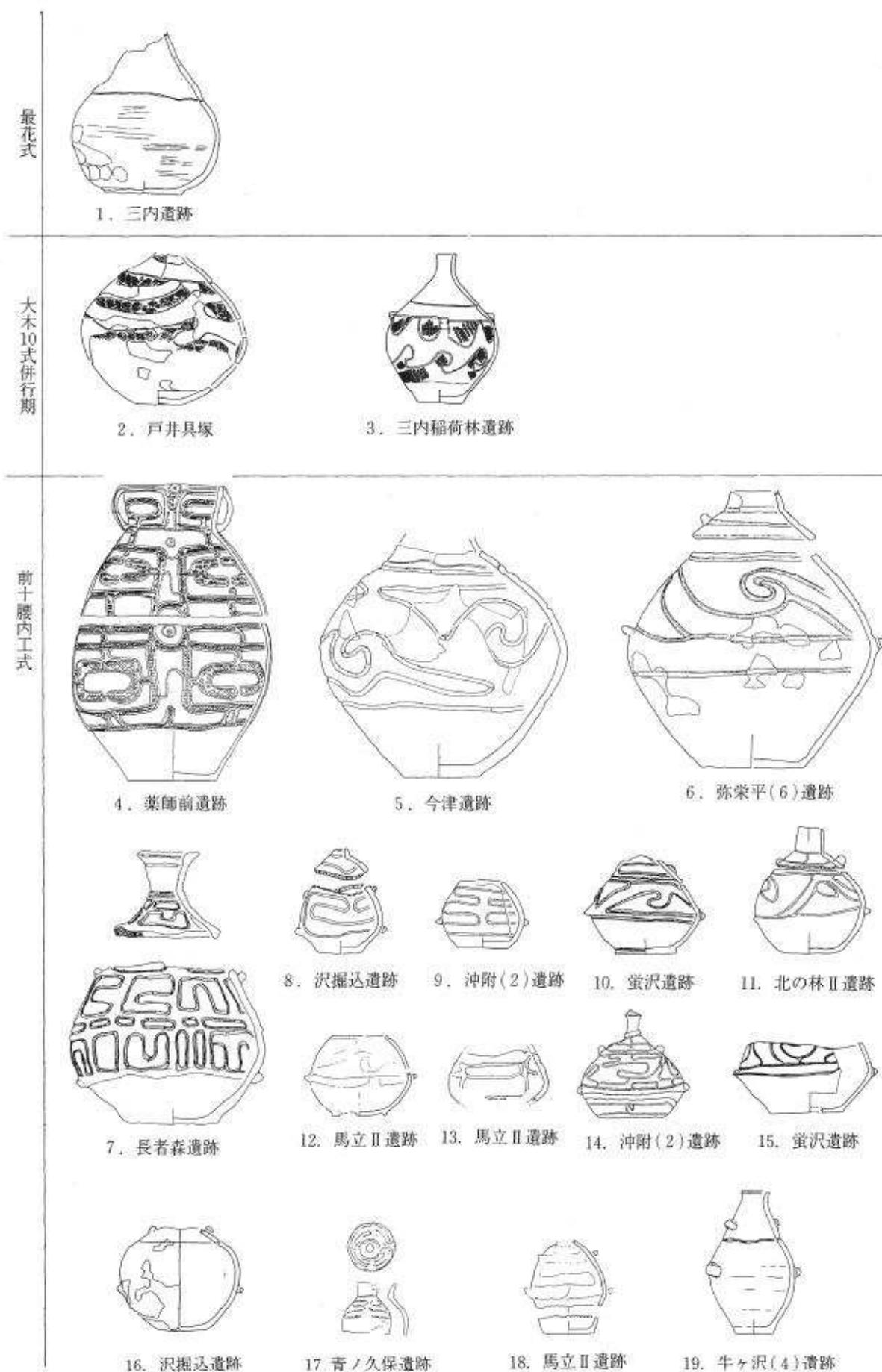


図9 切断蓋付土器変遷図（1）

十腰内工式

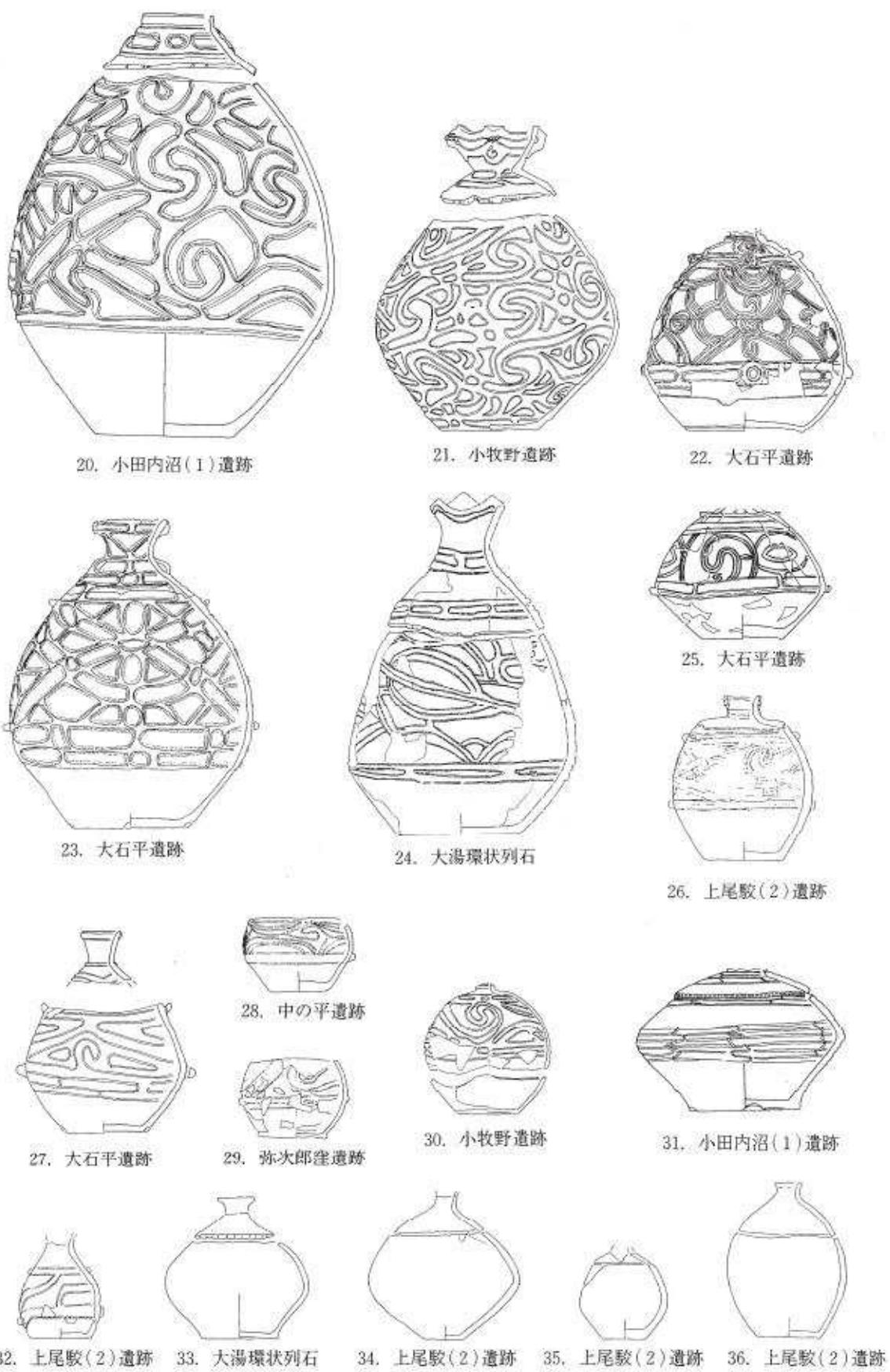


図10 切断蓋付土器変遷図（2）

出土状態においては、住居跡内で床面に倒立した状態で設置している例や、住居跡内の覆土の面で火を焚いた痕跡などから考えて、住居跡を利用した切断蓋付土器を伴う祭式が考えられる。なお、住居跡の利用は関東地方で出土する異形台付土器が、住居廃絶の儀式(内田1985)で使用したと指摘している。

また、薬師前遺跡の人骨の出土、小田内沼(1)遺跡の土壤の分析、土坑底面の出土などから、切断蓋付土器が埋葬時の容器及び埋葬関連の容器(副葬品・供献品)として使用したこと事が考えられる。器形面では、十腰内Ⅰ式期の上尾駒(2)遺跡と大石平遺跡の出土土器の分析から、他の器種と異質である点、日常の壺形と相異する形態を有する点など、製作の当初から、他の日常容器とは別個の容器を製作したと考えられる。

前記の《器種の問題》で壺形の中で形が相異する点を指摘した。形と機能については、佐原氏が『…土器の形は土器の機能だけで決定されるわけがない、機能のうえで不必要的要素が加わることもある…縄文人にとっては、それを加える呪術的な必要性があったのである…』(佐原1979)とした。つまり、切断蓋付土器が何故に土器を切り離さなければならないのかという行為は、佐原氏が指摘した不必要的要素であり、特に胴部下半を切断している例などは、不必要的要素そのものではないだろうか。

このような特殊の容器を産み出した背景には、当時期が埋葬の面で甕棺葬や環状列石の形成、遺物の面では器種の分化、第二の道具の多量の製作など遺構の面で多くの変革を迎える時期である。それ以前の縄文時代中期末葉(大木10式併行期)~縄文時代後期初頭(牛ヶ沢式)では、小規模な集落であり、遺構・遺物面では変革はみられない。十腰内Ⅰ式期に至って大規模な集落を形成する段階であり、種々の遺構及び遺物の面で変革がみられる。

また、谷口氏が縄文時代後期の時代背景として『…呪術的な儀式に際して、特別な器が用意され使われたことは十分に考えられる…』(谷口1988)とした。呪術社会の段階で生じた器の発生が考えられ、十腰内文化圏の中の呪術社会という社会背景の一つとして存在し、出現したとも考えられる。

### 注

- 注(1) 浜町遺跡(戸井町1990)と駒板遺跡(岩手県1986)の2遺跡は、住居跡の覆土から、遺物が各時期にわたって混在して出土しており、後世の搅乱を受けた事も考えられるので、今回の分析からは除外している。
- 注(2) 炉内でありながら二次火熱を受けていない、この事は住居跡廃棄後の置かれたものであり、祭祀行為が伺えるものである。
- 注(4) 国立歴史民俗博物館にて、小三内遺跡出土の縄文時代中期の三脚土器を実見した。報告書以外の遺物を調査すれば、事例は増加すると思われる。
- 注(5) 青森県鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡の平成10年の発掘調査では、縄文時代中期末葉の大木10式併行期の注口をもつ異形土器が出土し、赤色顔料がついた状態で出土しており、水溶性の液体より粉末状のものを保管していた事が考えられ、すべてこの種の容器が注ぐ為の容器かどうかは検討が必要である。
- 注(6) 本遺跡は遺跡台帳に記載されていないものであり、現在の三内丸山遺跡の範疇として判断していくのではないだろうか。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会(1975)『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
- 青森県教育委員会(1977)『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 青森県教育委員会(1978)『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会(1981)『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』－外長根(4)遺跡－青森県埋蔵文化財調査報告書第64集
- 青森県教育委員会(1983)『長者森遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第74集
- 青森県教育委員会(1985)『尻高(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
- 青森県教育委員会(1986)『今津遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
- 青森県教育委員会(1986)『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会(1988)『上尾駒(2)遺跡Ⅱ発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 青森県教育委員会(1987)『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 青森県教育委員会(1990)『弥次郎窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第128集
- 青森県教育委員会(1991)『弥栄平(6)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第138集
- 青森県教育委員会(1992)『沢掘込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
- 青森市教育委員会(1996)『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 秋田県教育委員会(1982)『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』－飛鳥平遺跡－秋田県文化財調査報告書第89集
- 秋田県教育委員会(1982)『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』－北の林Ⅱ遺跡－秋田県文化財調査報告書第90集
- 秋田県教育委員会(1990)『高屋館遺跡』秋田県文化財調査報告書第198集
- 磯崎正彦(1964)『日本原始美術Ⅰ 繩文土器』－繩文式土器各論IV後期の土器－
- 岩手県文化振興事業団(1986)『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集
- 岩手県文化振興事業団(1987)『青ノ久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第118集
- 岩手県文化振興事業団(1988)『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集
- 岩手県文化振興事業団(1988)『馬立Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集
- 内田儀久(1985)『異形土器台付土器用途考(上)－使用目的の考察－』なわ第23号
- 岡本孝之(1983)『第5巻 繩文土器Ⅲ』「用途・機能論」雄山閣出版
- 鹿角市教育委員会(1986)『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』鹿角市文化財調査資料31
- 鹿角市教育委員会(1993)『大湯環状列石発掘調査報告書(9)』鹿角市文化財調査資料45
- 鹿角市教育委員会(1995)『大湯環状列石発掘調査報告書(11)』鹿角市文化財調査資料52
- 鹿角市教育委員会(1998)『大湯環状列石発掘調査報告書(14)』鹿角市文化財調査資料61
- 倉石村教育委員会(1997)『薬師前遺跡』倉石村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 佐原真(1979)『土器の用途と製作』有斐閣
- 谷口康浩(1988)『繩文人の道具－繩文土器の様式と変遷』講談社
- 戸井町教育委員会(1990)『浜町A遺跡Ⅰ』
- 戸井町教育委員会(1993)『戸井貝塚Ⅲ』
- 成田滋彦(1986)『切断蓋付土器考』弘前大学考古学研究第3号 弘前大学考古学研究会
- 八戸市教育委員会(1997)『牛ヶ沢(4)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第71集
- 三沢市教育委員会(1992)『小田内沼(1)遺跡発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 北海道埋蔵文化財センター(1987)『上磯町矢不來2遺跡』北海道埋蔵文化財調査センター報第37集

## 東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係 －縄縄文土器との共伴事例から－

I はじめに

先に挙げた3系統の土器の1つである該期の続縄文土器は、型式名では後北C2-D式とされている。その分布の中心は北海道にあるが、弥生土器の終末期には、東北地方と新潟県域にも分布圏を拡大し、北東北の数遺跡において弥生系土器と東北地方の古式土師器である塩釜式（本論で言う塩釜式とは、北陸系・関東系などの、外来系を含む広義のものである）と共に伴している。

### (1) 手順

まず、塩釜式と共に伴した後北C2・D式を北海道の既存編年に照らし合わせ、また、後北C2・D式と共に伴した塩釜式を南東北の既存編年に照らし合わせて、北東北出土の後北C2・D式と塩釜式の時期比定を行う。次にその結果を用いて、後北C2・D式と塩釜式の2つの編年の対応関係を確認する。さらに、その対応関係をもとにして、後北C2・D式と共に伴した弥生系土器が塩釜式とどのような時間的関係にあるかを推定する。

今回、検討対象の中心として取り上げる遺跡は、後北C2・D式と弥生系土器が共伴した秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡、後北C2・D式と塩釜式が共伴した岩手県盛岡市永福寺山遺跡、後北C2・D式と塩釜式が出土した青森県五所川原市隠川(11)遺跡の3遺跡である。なお、北東北以外にも良好な共伴関係を示す遺跡はいくつかある<sup>15</sup>が、それらの遺跡の報告は概要報告の段階に留まっているため、今回は分

析対象に含めない。

では以下に、本稿において基準とする、後北C2・D式と塩釜式の既存編年の採択理由とそれを用いるまでの手続き等について述べる。

## (2) 後北C2・D式土器

北東北出土の後北C2・D式は、破片資料がほとんどであるため、北東北出土資料のみを用いた変遷過程の明確化は、現段階では無理である。しかし、いくつか知られている復元個体を巨視的に観察すれば、その文様構成の変遷は、北海道出土の資料と基本的にはほぼ同様であると考えられる。こういったことから、北東北出土資料の編年的位置を確定するにあたっては、北海道における既存編年に対比させる方法が現状において最適である。

北海道における後北C2・D式の編年については、1980年代以降に限定すると、これまでに大沼忠春（大沼1982, 89, 97）、石本省三（石本1984）、大島秀俊（大島1991）、上野秀一（上野1992）、鈴木信（鈴木1998）らの研究があるが、いずれの編年も大沼による1982年の編年を基本にしていると思われる。よって、ここでは、大沼編年（大沼1982）を基準編年として用いることにする。

大沼による後北C2・D式の変遷は4段階に分けられており、その細分型式名と変遷過程は、「C2式初」→「一般的なC2・D式」→「C2・D式後葉」→「C2・D式末」というものである。

ところで、大沼編年の後北C2・D式の第2段階にあたる「一般的なC2・D式」は、上野秀一によりさらに「古」と「新」の2段階に細分されている（上野ほか1987、上野1992、1994）。「古」の基準資料は、北海道札幌市K135遺跡4丁目地点出土のVII群土器であり、「新」の基準資料は、同遺跡出土のVIII群土器である（図1）。VII群土器とVIII群土器は、層位的に分離されたもので、VII群土器は、VIIc層から、VIII群土器はそれより上層のII～V層から出土したものである。上野によるこれらの「古」と「新」の細分は、この層位的事実と、復原個体の全体文様構成の分類に基づいて行われたものである。

本稿ではこの層位的事実に裏付けられた新古の細分を、大沼による後北C2・D式の変遷に組み込み、後北C2・D式の変遷を全体で5段階と捉える。即ち、「C2式初」→「一般的なC2・D式」（古）→「一般的なC2・D式」（新）→「C2・D式後葉」→「C2・D式末」とする。

ただし、3点ほど問題がある。それは、本稿で扱う資料における「一般的なC2・D式」を「古」と「新」に分離しようとしても、破片資料が主体であるため、上野によるこの細分を簡単には適応させ難いことである。また、K135遺跡4丁目地点の資料は、大型の深鉢が多いことから、住居内で使用された可能性が高いものと思われるが、今回扱う資料は、土壙墓に伴ったもの、あるいはその可能性の高いものである。加えて、それらは、小型深鉢や注口付深鉢などが比率として高いが、このような小型の土器は、文様帶の圧縮や単位の欠落があるため、文様構成を系統別に分類するには問題がある（鈴木1998）。

これらのこと考慮すると、上野が行ったような文様構成の分類をもとにした「古」と「新」の分離法は今回扱う資料に適応させるのはかなり難しい。こういった状況から、今回扱う資料を「古」と「新」に分離するにあたっては、文様構成以外の情報も生かすことが必要となる。その場合には、1つの個体の中では均一に全周している要素が望ましい。この点から、先ず第一に口縁部の形態を重視することとし、補足的に、部分的に残る文様要素のあり方を観察した上で、時期比定するといった方法を探る。

※ 本稿では、後北C2・D式の時間差を感じ的に理解しやすいよう、大沼編年で用いられている4段階の細分型式の各

名称を、便宜的に第1段階～第4段階に呼びかえる。つまり、「C2式初」＝第1段階→「一般的なC2・D式」＝第2段階→「C2・D式後葉」＝第3段階→「C2・D式末」＝第4段階、と表記する。また、上野による第2段階の「古」を「第2段階-1」に、第2段階の「新」を「第2段階-2」と表記する。さらに、「微隆起線に縁取られた帶繩文」という表現も簡略化したいため、このような2つの要素で構成される文様を、便宜的に「隆線帶繩文」と表記し、微隆起線の縁取りのない帶繩文を「無線帶繩文」と表記する。

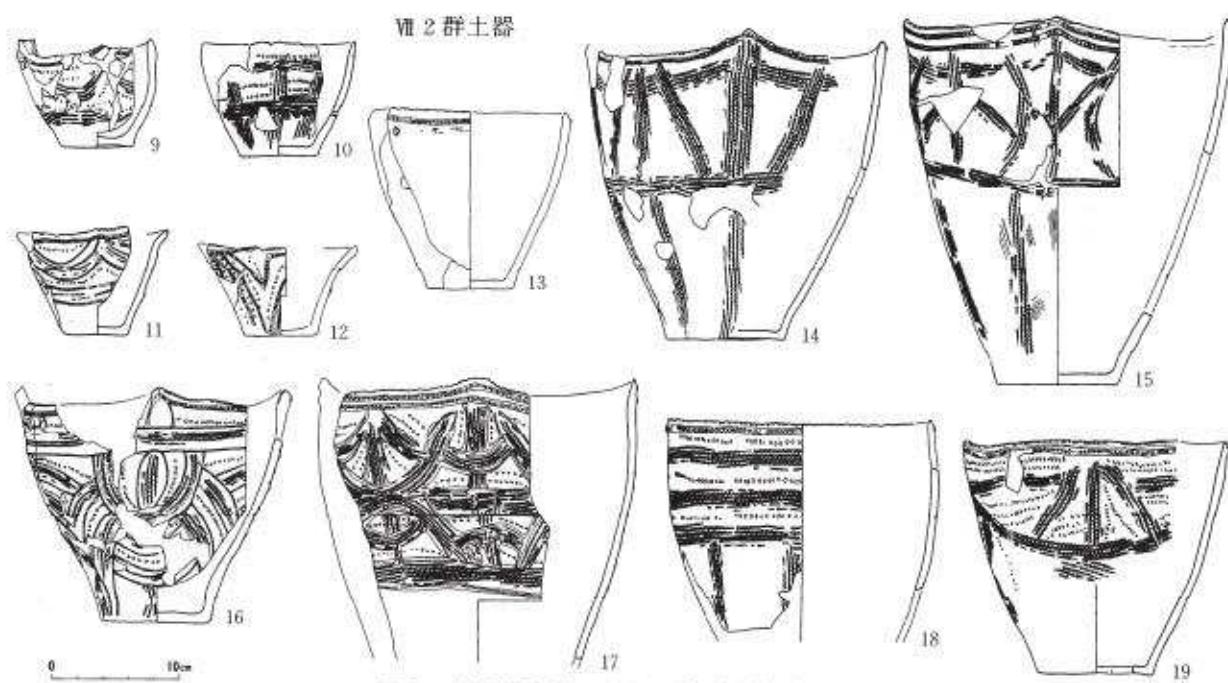
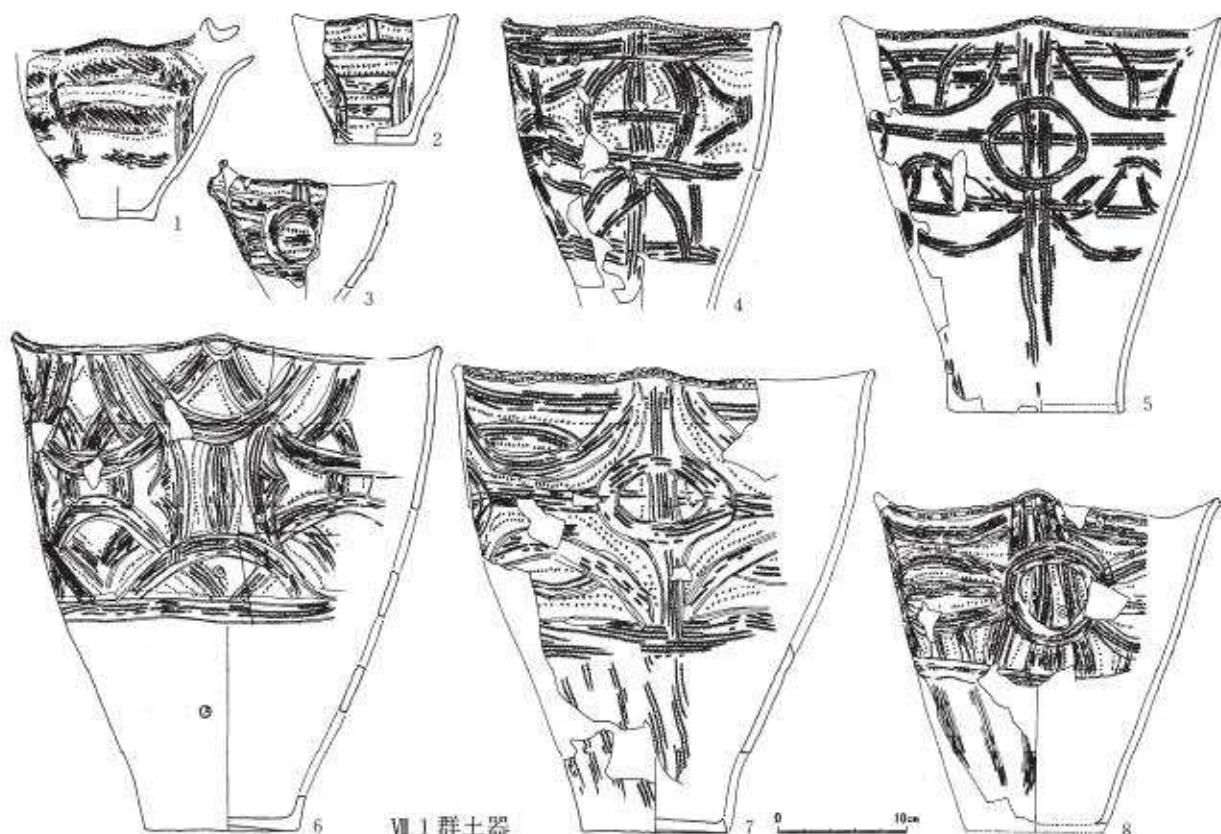


図1 K135遺跡・4丁目地点出土土器（一部）

【「古」と「新」の分離方法】K 135 遺跡 4 丁目地点のⅦ 1 群土器とⅦ 2 群土器の口縁部形態を巨視的に見ると、口唇部直下に刻目貼付帯が 1 条巡るタイプ（以下、これを 1 条タイプと表記。）と口唇部直下に刻目貼付帯が 2 条巡るタイプ（以下、これを 2 条タイプと表記。）、そして刻目貼付帯が全く付されないタイプ（以下、これを 0 条タイプと表記。）の 3 種類が見られる<sup>16</sup>（図 2）。ここでは、これら 3 種類の口縁部形態のうち、1 条タイプと 2 条タイプに注目する。

K 135 遺跡 4 丁目地点Ⅶ 1 群土器の、口縁部を有する復元個体全体における 1 条タイプと 2 条タイプの資料の合計個体数は 33 点で、うち、1 条タイプは 31 点（93.9%）を占め、2 条タイプはわずか 2 点（6.1%）

のみという構成比を示す。一方、Ⅶ 2 群土器の口縁部を有する復元個体全体における 1 条タイプと 2 条タイプの資料の合計個体数は 24 点であり、1 条タイプは 18 点（75.0%）みられ、2 条タイプは 6 点（25.0%）という構成比を示す（表 1・グラフ 1）。このように、「一般的な C2-D 式」の「古」と「新」の間には、口縁部形態の構成比に差がみられ、時期が新しくなるにつれて 2 条タイプの増加している可能性が指摘できる<sup>17</sup>。このことから、「一般的な C2-D 式」を「古」と「新」に分離するにあたっては、この構成比を積極的に参考としながら、残存する部分的な文様要素にも判断材料を求めるとしている。なお、本稿では、口縁部破片を扱う場面が少なくないことから、ここでは便宜的に、構成比を求める際には、1 点の破片資料を大小にこだわらず、機械的に 0.1 個体と数えることにし、接合した破片資料は、その状態で 0.1 個体と数える<sup>18</sup>。口縁部を十分に有する復元個体は 1 個体と数える。

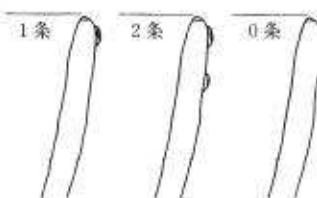
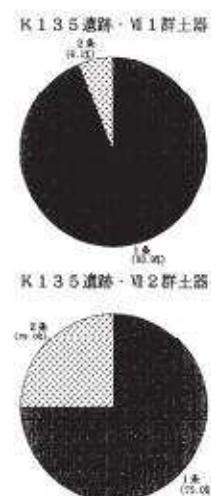


図 2 口縁部形態の各タイプ模式図

表 1 K 135 遺跡 4 丁目地点

後北 C2-D 式	総点数	1 条タイプ		2 条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
Ⅶ 1 群土器	完形 33	31	93.9	2	6.1
Ⅶ 2 群土器	完形 24	18	75.0	6	25.0



グラフ 1 1 条タイプと 2 条タイプの構成比

### (3) 塩釜式土器

氏家和典によって設定された塩釜式（氏家 1957）の変遷については、氏家（氏家 1972）、丹羽茂（丹羽 1985）、田中敏（田中 1987）、次山淳（次山 1992）、辻秀人（辻 1993, 1994, 1995）らの研究がある。これらの編年の中で、辻による編年（辻 1993, 1994, 1995）は、丹羽、田中、次山の研究成果をまとめつつ、塩釜式以前の古式土師器についても言及しており、さらに、他地域における編年との対応関係にも触れている。これらの点から、本稿では、辻編年（辻 1994, 1995）を基準編年として用いることにする。

辻による塩釜式の変遷は、6 段階に分けられており、その細分名と変遷過程は「II-1 期」→「II-2 期」→「III-1 期」→「III-2 期」→「III-3 期」→「III-4 期」というものである。また、塩釜式最古の時期である II-1 期より以前には、「I-1 期」と「I-2 期」の 2 つの段階が設定されている。各段階の畿内地方との対応関係については、I-1 期と I-2 期が、「庄内式の新しい段階」に、II-1 期と II-2 期が「布留式の古い段階」に並行するとされている（辻 1995）。

【畿内編年との対応関係】辻編年の II-1 期は、辻によれば、次山編年の「1 段階」にはほぼ相当し、次山によれば、次山編年 1 段階は、寺沢薰による近畿地方（大和）編年（寺沢 1986）の「布留 0 式」の「新しい内容をもつ段階と対応」する（次山 1992）。よって、辻の言う通り、II-1 期と II-2 期は「布留式の古い段階」に並行すると言えるが、寺沢の「布留 0 式」は、米田敏幸による近畿地方（河

内) 編年(米田1992)に対比させた場合、「庄内式期Ⅳ」に相当するようである(寺沢、米田とも纏向遺跡辻土坑4下層資料を基準資料の一部にあてている)。このことから、辻編年のⅡ-1、2期は、米田編年の庄内式期Ⅳの新しい段階と、「庄内式期V/布留式期I」にはほぼ対応することになる。

しかし、辻編年のⅡ-1、2期は、辻によれば、田嶋明人による北陸地方(南西部)の漆町遺跡編年(田嶋1986)との対比において、漆7群に相当するとされ(辻1995)、米田は、漆7群を米田の言う庄内式期Ⅳにはほぼ対応させている(米田1994a)。

このように、辻編年を畿内編年に

対応させる際、寺沢編年に直結させて米田編年に対応させた場合と、田嶋編年を介して米田編年に対応させた場合とでは、若干のずれが生じる。要するに、各地域との対応関係は、細かい部分においてまだ問題が残されているものと思われるが、田嶋による漆町編年は、米田編年と非常によく一致している(米田1994a)という事実を重視し、本稿における、辻編年のⅡ-1、2期の位置については、北陸編年を介して畿内編年に対応させた場合を採用しておきたい。即ち、辻編年Ⅱ-1、2期は米田の庄内式期Ⅳと対応し、その後段階の辻編年Ⅲ-1期は庄内式期V/布留式期Iに対応するものとして捉えておく。なお、本稿では、記述の明瞭化を図るために、庄内式、布留式の呼称は、便宜的に全て米田編年に倣うこととする<sup>39</sup>。

表2 辻編年と各地域における編年との対比

米田編年 (1992, 94a)	田嶋編年 (1986)	辻編年 (1994, 95)	次山編年 (1992)	寺沢編年 (1986)	米田編年 (1992)
庄内式期Ⅳ	漆7群	Ⅱ-1期	1段階	布留式	庄内式期Ⅳ
		Ⅱ-2期			
庄内式期V 布留式期I	漆8群	Ⅲ-1期			

### III 各遺跡出土資料の検討

#### (1) 寒川Ⅱ遺跡(図3)

【遺跡の概要】秋田県能代市に所在する寒川Ⅱ遺跡からは、後北C2-D式期の土壙墓が6基検出され、土器は第2号から第6号までの5基の土壙墓から出土している<sup>40</sup>(図3)。第2号土壙墓の埋土の上層、溝(S D71)に攪乱された部分からは、数個体分の後北C2-D式の破片(1~6)が出土し、壙底東側のピット上と袋状ピット内からは弥生系土器である無文の鉢形土器(8)と羽状撲糸文の施される壺形土器(7)が出土している。溝(S D71)に攪乱された部分から出土した後北C2-D式は、第2号土壙墓出土土器として報告されている(小林ほか1988)。

【後北C2-D式土器の編年的位置】5基の土壙墓から出土した後北C2-D式は、いずれも曲線状の隆線帶繩文を効果的に組み合わせた文様構成を持つものが主体的で、底部は全て平底であることから、それら全体の資料間に大きな時間差は看取されず、大枠ではほぼ第2段階に位置づけられる。では、5基の土壙墓から出土した後北C2-D式の全体および第2号土壙墓出土の後北C2-D式における1条タイプと2条タイプのあり方について概観してみる。

壺形土器が副葬されていた第2号土壙墓に伴う後北C2-D式は、全て破片であるが19片ほど出土している。そのうち、口縁部破片は5片(1~5)あり、1点のみは1条タイプ(3)で、ほかは全て2条タイプ(1、2、4、5)である。第3号から第6号の4基の土壙墓資料を見ると、第4号土壙墓資料(10)と第5号土壙墓資料(16)の2点の口縁部が2条タイプ、第5号土壙墓資料(14)と第6号土壙墓資料(19)の2点の口縁部が0条タイプである以外は全て1条タイプで占められる。第2号土壙墓の口縁部破片資料を加えた1条タイプの全点数は6.1点を数え、1条タイプは寒川Ⅱ遺跡の主体を占めていることが分かる。

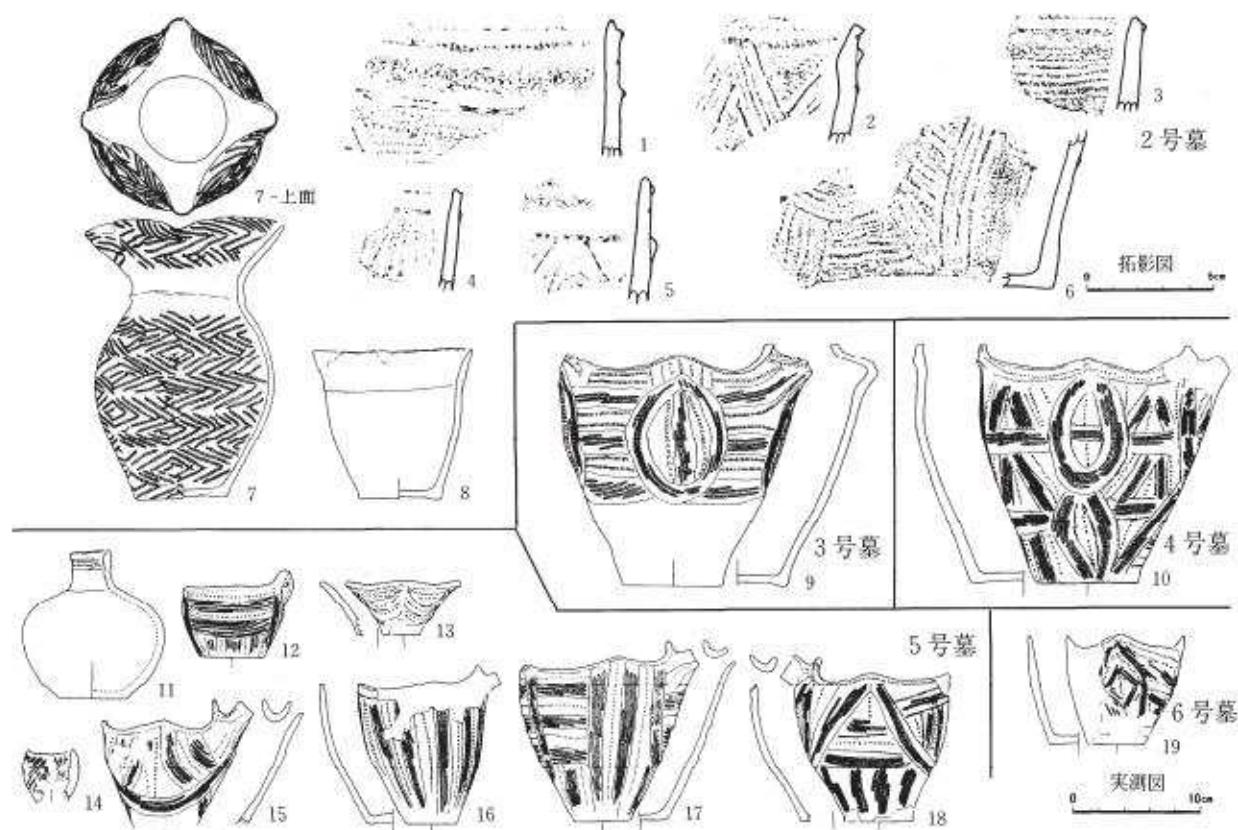


図3 寒川II遺跡・出土土器(一部)

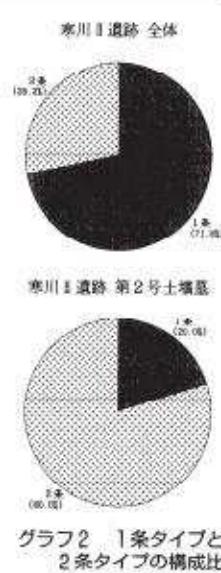
以上、5基の土壙墓から出土した後北C2-D式の全個体および第2号土壙墓出土の後北C2-D式における1条タイプと2条タイプのあり方について概観した。これらのことまとめたものが表3である。

表3 寒川II遺跡

5基の土壙墓から出土した後北C2-D式全体の1条タイプと2条タイプの構成比は、71.8%と28.2%を示し、また、第2号土壙墓出土の5片の後北C2-D式における1条タイプと2条タイプの構成比は、20.0%と80.0%を示す。5基の土壙墓から出土した後北C2-D

土壙墓番号	総点数	1条タイプ 点数	1条タイプ 比率	2条タイプ 点数	2条タイプ 比率
第2号土壙墓	口縁 0.5	0.1	20.0	0.4	80.0
第3号土壙墓	完形 1	1	100.	—	—
第4号土壙墓	完形 1	—	—	1	100.
第5号土壙墓	完形 6	5	83.3	1	16.7
第6号土壙墓	—	—	—	—	—
合計	8.5	6.1	71.8	2.4	28.2

式全個体について、グラフ2をもとにこの結果を巨視的に見れば、K135遺跡4丁目地点のⅦ2群土器、即ち、第2段階-2の資料の口縁部形態の構成比に近似していることが分かる。一方、第2号土壙墓から出土した後北C2-D式の構成比グラフでは、K135遺跡4丁目地点のⅦ2群土器、即ち、第2段階-2における1条タイプと2条タイプの構成比が逆転した状態に近い。しかし、これら4片の2条タイプの口縁部破片における2段目の貼付帯は、1段目の貼付帯よりも約2cmほど下に位置しており、通常とは異なるつくりのものである。寒川II遺跡からこういった口縁部をもつ資料は、他に出土していないが、K135遺跡4丁目地点のⅦ1群土器(第2段階-1)の中に見られる(図1-4)。また、第5号土壙墓から出土している小型の鉢(13)は、K135遺跡4丁目地点Ⅶ2群土器(第2段階-2)の中にやや類似したものが2点ほど(図1-11、12)見いだせる。



ところで、K135遺跡4丁目地点Ⅶ1群土器を破片資料も含めて概観すると、口唇部直下に縦位、斜位、弧状に、3条1単位あるいは2条1単位で構成される、並行した短い微隆起線(以下、短並行微隆起線と表記。)を持つものが7点ほど含まれている(図1-2、3など)ことが分かる。しかし、同遺跡のⅦ2群土器全体の中に、この文様要素は全く存在しない。この短並行微隆起線は、後北C1式によく見られ、後北C2-D式第1段階の基準資料(北海道七飯町聖山遺跡KⅢ群土器)にも認められることから、この短並行微隆起線は後北C1式から後北C2-D式の第2段階-1まで継続し、第2段階-2以降は消滅した可能性が高いと言える。

寒川Ⅱ遺跡の資料はあくまでも土壙墓に伴ったものであることから、各土壙墓間にはある程度の時間差を想定することができる。そのように考えた場合、第3号土壙墓資料(9)には、短並行微隆起線が施されていることから、本資料は第2段階-1に属す可能性が高く、また、同土壙墓は本遺跡における墓域形成の初期段階に位置している可能性もある。このようなことなども考え合わせると、これら寒川Ⅱ遺跡の後北C2-D式の全体は、編年的には、第2段階-1の後半から、第2段階-2を中心とした時期に位置づけられる可能性が考えられる。

## (2) 永福寺山遺跡(図4)

**【遺跡の概要】** 岩手県盛岡市に所在する永福寺山遺跡からは、後北C2-D式期の土壙墓が7基検出され、各土壙墓からは後北C2-D式と塩釜式が出土している(3~46)。これらのうち土壙墓5(13~29)と土壙墓7(34~46)の2基からは、破片ではあるが、まとまった量の後北C2-D式と塩釜式が出土している(津嶋ほか1997)。

**【塩釜式土器の編年的位置】** 調査報告書では、出土した後北C2-D式土器を「中段階」(K135遺跡4丁目地点出土Ⅶ2群土器の時期)に、古式土師器を「塩釜式新段階」(辻編年Ⅲ期)に位置付け、両者が並行関係にあると結論づけている(津嶋ほか1997)。同遺跡の塩釜式を辻編年Ⅲ期に位置づけた根拠は、主として福島・宮城県域の遺跡から出土した塩釜式との類似性にあるが、永福寺山遺跡出土のこれら塩釜式の大半は破片であるため、辻編年Ⅲ期という大枠での位置づけはやむを得ない結果と言える。しかし、辻編年Ⅲ期という大枠での位置付けであれば、塩釜式と「共伴もしくは並行関係」を有す後北C2-D式の、塩釜式に対する編年的位置も大枠でしか捉えることができなくなる<sup>11</sup>。よって、ここでは、破片であっても特徴的な要素を明瞭に残している資料として、口縁部に円形浮文の付される壺<sup>12</sup>(1)と口縁部に縦位棒状浮文の付される壺<sup>13</sup>(2)、そして土壙墓7から出土している頸部下位の屈曲部に横位隆帶の付される壺(46)の3点の資料に注目し、辻編年Ⅲ期のどのあたりに位置づけられるものか検討してみたい。

辻編年において提示されている壺形土器の中で、口縁部に縦位棒状浮文の付されるものは、形態がやや異なるものの、I-2期からⅢ-1期にまで見られ、Ⅲ-2期以降には見られない。また、頸部下位の屈曲部に横位隆帶の付される壺は、形態がやや異なるものの、I-2期からⅡ-2期にまでみられ、Ⅲ-1期以降には見られない。これらのことから、縦位棒状浮文と横位隆帶の2種の文様要素は、少なくともⅢ期の後半には存在していないものと考えられる。ただし、辻編年において提示されている壺形土器の中に、口縁部に円形浮文の付される壺は含まれていないため、このような壺が、畿内・東海・関東・北陸地方ではどのような編年位置にあるのかを以下に確認してみたい。

**[畿内]** 石野博信は、纏向遺跡の編年の中で、口縁部に円形浮文の付される壺を、「壺A」の「A1」と「A3」に該当させ、「壺A1」を「纏向1式」(庄内式期I)から「纏向4式」(庄内式期V/布留式期I)に、「壺A3」を「纏向1式」から「纏向3式」(庄内式期III-IV)に位置づけている。なお、「纏向4式」の「壺A3は確実な例は見当た

らない」ことから、「この時期には消滅した」可能性を指摘している。また、「縹向4式」(庄内式期V/布留式期I)の説明の中で、「この壺は辻土壤4下層では出土せず、はたしてどの程度縹向4式まで残存するのかはわからない」と述べている(石野1976)。

寺沢薰は、矢部遺跡の編年の中で口縁部に円形浮文の付される壺を、「大和における古式土師器の編年細分(1)」の付図において、「広口壺E」と「二重口縁壺㊯(小型)」の系統の中に位置づけ、「広口壺E」は、「庄内0式」(庄内式期I)のみに、そして「二重口縁壺㊯(小型)」は「庄内0式」から「布留1式」(庄内式期V/布留式期I)に該当させている。なお、「布留1式」の「二重口縁壺は加飾性のあるものが激減し、無文のものが定型化して盛行」すると述べている(寺沢1986)。

[東海] 赤塚次郎は、廻間遺跡の編年(赤塚1990)の中で、口縁部に円形浮文の付される壺を、「廻間式土器編年表」と「壺Aの変遷」において、廻間I式2段階(廻間遺跡3期:庄内式期I)の「壺A1」(バレス壺)と廻間II式2段階(廻間遺跡8期:庄内式期V/布留式期I)の「壺E」(二重口縁壺)に、位置づけている。なお、「廻間式土器編年表」の中で、壺形土器の口縁部に付される円形浮文以外の円形浮文は、廻間I式3段階の高坏の口縁部と、廻間I式1段階の「壺B」の肩部に見られる。

[関東] 比田井克仁による編年(比田井1991, 1994)の中において、口縁部に円形浮文の付される壺は、直接的には提示されていないが、比田井は千葉県市原市に所在する神門3・4・5号墳の性格を検討する過程で、各古墳の時期を「南関東前期I段階古相」から「I段階新相」に位置付け、5号墳出土の高坏を「廻間I式4段階もしくは廻間II式1段階相当」(庄内式期II)に、4号墳出土の高坏と小型高坏・器台を「廻間II式前半相当」(庄内式期II~III)に

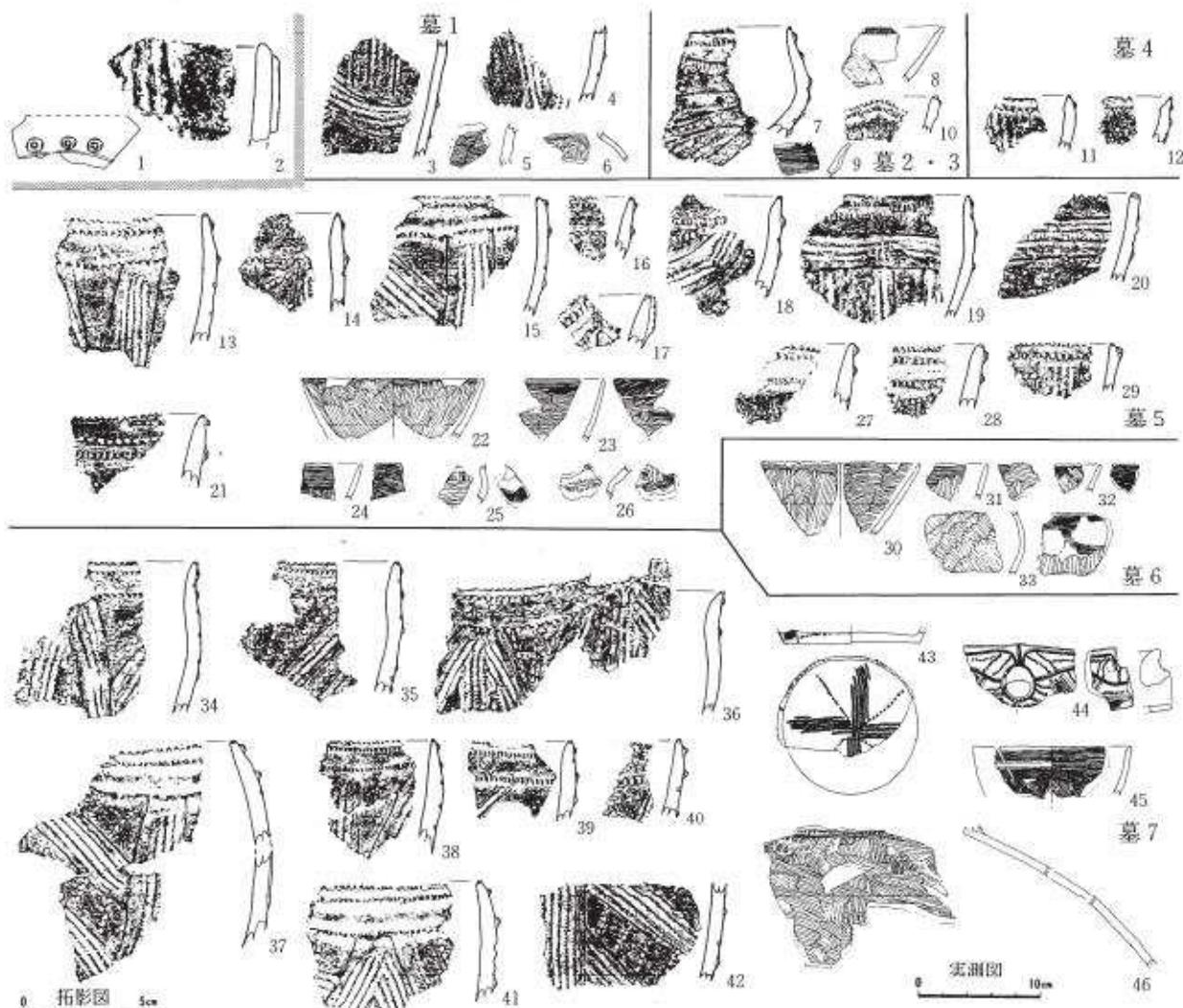


図4 永福寺山遺跡・出土土器(一部)

位置づけている（北田井1997b）。これら5号墳、4号墳には、口縁部に円形浮文の付される壺が伴っている。

【北陸】田嶋明人による漆町遺跡の編年（田嶋1986）の中で、口縁部に円形浮文の付される壺形土器は、「漆町5群」（庄内式期II）の中に見られ、また、谷内尾吉司による編年（谷内尾1983）では、「古府ケルビ式」（漆町7群：庄内式期IV）の中に見られる。

以上、畿内・東海・関東・北陸地方における、口縁部に円形浮文の付される壺の編年的位置を概観してみた。結果をまとめれば、このような壺形土器は主に庄内式期に特徴的で、庄内式期V/布留式期I（辻編年III-1期）にもわずかに残存していることが理解できる。

では再び永福寺山遺跡の塩釜式の問題に戻る。前述の通り、報告書においてこれらの塩釜式は、辻編年III期として位置づけられたが、辻編年における提示資料の内容と他地域における編年の内容を確認した結果、口縁部に円形浮文の付される壺と口縁部に縦位棒状浮文の付される壺の最終段階は、辻編年III-1期にあるようである。よって、頸部の屈曲部に横位隆帯の付される壺もほぼ同じ時期に存在したものと考えられ、これら永福寺山遺跡の口縁部に円形浮文の付される壺、口縁部に縦位棒状浮文の付される壺、頸部の屈曲部に横位隆帯の付される壺は、辻編年III期の中でも1期あたりに位置づけられる可能性がある。ただし、口縁部に円形浮文の付される壺は、庄内式期V/布留式期Iの時期においてはかなり減少している状況（石野1976・寺沢1986）を考慮すれば、これらの塩釜式は、辻編年III-1期の古い段階に位置づけられる可能性が考えられる<sup>14)</sup>。

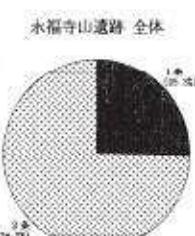
【後北C2-D式土器の編年的位置】 後北C2-D式の大半は細片資料であり、時期決定が困難であるものの、「円環状のモチーフがないこと…（中略）…キザミを加えた隆線が2本のものが多いこと…（中略）…K135遺跡4丁目地点VII2群土器に様相が近い」（津嶋ほか1997）という記述通り、大半が2条タイプの口縁部で占められ、1条タイプのものはごくわずかである。この状況をまとめたものが表4である。

表4 永福寺山遺跡

土壤墓番号と出土地点	総点数	1条タイプ		2条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
土壤墓1	—	—	—	—	—
土壤墓2・3	口縁 0.2	0.1	50.0	0.1	50.0
土壤墓4	口縁 0.2	0.2	100.	—	—
土壤墓5	口縁 1.1	0.3	27.3	0.8	72.7
土壤墓6	—	—	—	—	—
土壤墓7	口縁 0.9	—	—	0.9	100.
土壤墓合計	2.4	0.6	25.0	1.8	75.0
トレンチ	口縁 3.6	1.1	30.6	2.5	69.4
採集土器	口縁 1.5	0.2	13.3	1.3	86.7
全体合計	7.5	1.9	25.3	5.6	74.7

永福寺山遺跡から出土した後北C2-D式全体（トレンチ出土資料・採集資料含む）の1条タイプと2条タイプの構成比は、25.3%と74.7%を示し、グラフ3で巨視的に見れば、K135遺跡4丁目地点のVII2群土器、即ち、第2段階-2における1条タイプと2条タイプの構成比が逆転した状態にはほぼ等しい。また、1条タイプと2条タイプの両方の後北C2-D式が出土している土壤墓5の構成比グラフも、上記の結果と非常に近似している。このことから、これら2つの結果は、永福寺山遺跡全体の特徴を良く表しているものと捉えることができる。

K135遺跡4丁目地点資料に見られるように、第2段階-1においては1条タイプが数量的に圧倒的であって、第2段階-2以降、2条タイプが増加傾向にあるならば、これら全体としての永福寺山遺跡の資料は、第2段階-2以降として位置づけられることになろう。しかし、図示資料以外の資料の文様構成を見ると、土壤墓7から出土している胴部破片の中には、曲線状の隆線帶繩文を持つものがみられ、また、トレンチから出土している底部破片は上げ底を呈しており、加えて、同土壤墓出土の注口土器(44)の丁寧なつくりから見れば、これらの資料は少なくとも第3段階まで降ることはないものと考えられる。従って、これら永福寺山遺跡の資料は、第2段階-2の終末あたりに位置する可能性が考えられる。



グラフ3 1条タイプと2条タイプの構成比

(3) 隠川(11)遺跡<sup>註16</sup>(図5)

【遺跡の概要】 青森県五所川原市に所在する隠川(11)遺跡からは、後北C2・D式と塩釜式が出土している。弥生系土器は出土していない。本遺跡における後北式期の遺構は検出されなかったものの、後北C2・D式と塩釜式は耕作土(搅乱層)である第I層と無搅乱層である第II層から出土しており、それらは平面的に約25×35mの限定された範囲に重複して分布している。第I層出土の後北C2・D式と塩釜式は、本来、第II層の遺物と同レベルに存在していて、その後、現代の耕作によって浮上したものと考えられる。これら後北C2・D式と塩釜式は、その出土層位より、共伴関係にあるものとは断言できないが、両者とも単独で出土することさえも極めて稀である上に、平面的なまとまりをもって出土している状況から、これら両者間に大きな時間差を持たせて考えることは難しい<sup>註18</sup>。このような状況から、これら後北C2・D式と塩釜式は、共存したものと考えた方が自然である。よって、ここではこれらが並行関係にあるものと判断し、以下に述べる。

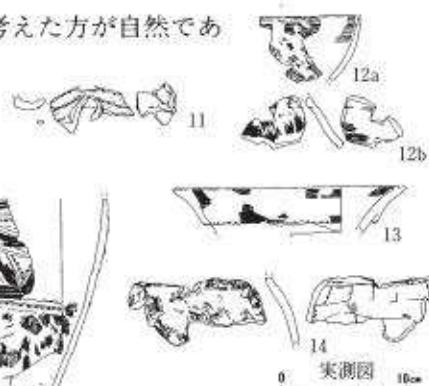


図5 隠川(11)遺跡・出土土器(一部)

【塩釜式土器の編年的位置】 第I・II層出土の塩釜式は、全て破片資料であるが、少なくとも4個体あり、器種毎の内訳は、壺形土器2点、高環形土器1点、甕形土器1点である。2点の壺形土器の口縁部形態は、いずれも複合口縁であり、うち、1点の口縁部の内面には赤彩が施され、もう1点(13)の複合口縁部の下端には、刻目が施されている。また、高環形土器(12a、12b)は、脚部内面を除いて全面に赤彩が施されるもので、ミガキは口唇部外面直下にのみ顯著で、外面のほぼ全体にハケメが意図的(?)に残されている。甕形土器(14)は、口縁部を欠失しているが、外面に粗いハケメが観察される。

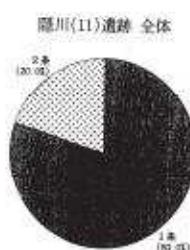
これら塩釜式の全体器形の完全な把握は不可能であるものの、壺形土器の複合口縁部下端の刻目の存在および高環形土器の器面調整のあり方、そしてその環部のやや碗型を呈す器形から、およそ庄内IV式期の後半あたりから庄内式期V/布留式期Iの初頭あたりに並行するものと判断され<sup>註17</sup>、ほぼ辻編年II-2期に相当する<sup>註18</sup>と考えられる。

【後北C2・D式土器の編年位置】 第I・II層出土の後北C2・D式も破片資料が主体であるが、8~9個体あるものとみられる。部分的な文様構成を概観すると、全て第2段階に位置づけられるものと考えられるが、曲線状の文様構成を持つものは少なく直線的なものが多い<sup>註19</sup>。また、帶縄文間に施される刺突の形状をみると、三

角形やD字形、円形のものや紡錘形のもの等、種類に富んでいる。このような特徴から、これらの後北C2・D式は、第2段階の中でも時間的に新しい様相をうかがわせるが、口縁部形態に注目すると、注口土器1個体のみが2条タイプで、ほかは全て1条タイプのものである。

表5 隠川(11)遺跡

出土地点	総点数	1条タイプ		2条タイプ	
		点数	比率	点数	比率
第I・II層	口縁 1.5	1.2	80.0	0.3	20.0



グラフ4 1条タイプと2条タイプの構成比

これら後北C2-D式の口縁部破片の全体における1条タイプと2条タイプの構成比についてまとめたものが表5である。1条タイプと2条タイプの構成比は80.0%と20.0%を示し、グラフ4で確認すれば、2条タイプが全体の4分の1以下となっており、K135遺跡4丁目地点のⅦ1群土器とⅦ2群土器における構成比の中間的な状態を示す。よって、これら隠川(11)遺跡出土の後北C2-D式の全体は、ほぼ第2段階-1と2の中間に位置づけられる可能性が考えられる。

## VII 弥生系土器の編年的位置

以上、寒川Ⅱ、永福寺山、隠川(11)の3遺跡から出土した後北C2-D式と塩釜式の編年的位置について検討した。結果を整理すると、寒川Ⅱ遺跡の後北C2-D式は、ほぼ第2段階-1の後半から第2段階-2に、永福寺山遺跡出土の後北C2-D式は、第2段階-2の終末あたりに、そして、隠川(11)遺跡出土の後北C2-D式は、ほぼ第2段階-1と2の中間に位置づけられる可能性が考えられる。

また、永福寺山遺跡出土の塩釜式はⅢ-1期の古い段階に、隠川(11)遺跡出土の塩釜式はほぼⅡ-2期に位置づけられると考えられる。

これらのことから、隠川遺跡の事例より、後北C2-D式の第2段階-1と第2段階-2の中間に塩釜式Ⅱ-2期が対応し、また、永福寺山遺跡の事例より、後北C2-D式第2段階-2の終末に塩釜式Ⅲ-1期の古い段階が対応すると考えられる。では、後北C2-D式第2段階-1の始まりは古式土師器の編年のどのあたりに対応するのであろうか。このことを確認するために、新潟県西山町に所在する内越遺跡の事例を見ておきたい。

内越遺跡では、住居跡の覆土から弥生時代終末の塚崎I式土器（畿内第V様式末期）と「後北C1式の新しいもの」と報告された資料が共伴<sup>20</sup>している（大森ほか1983）。この「後北C1式」は破片であるが、施されている文様要素は、北海道七飯町に所在する聖山遺跡出土のKⅢ群土器と類似しており、後北C2-D式の第1段階に位置づけられる（木村1994）。

この事例から、後北C2-D式第1段階は、畿内第V様式の末とほぼ並行し、後北C2-D式第2段階-1の始まりは、おおよそ庄内式期Iのあたりにあるものと考えられる。よって、前述の内容も加えれば、後北C2-D式第2段階-1は、庄内式期Iから庄内式期IVのあたりにはほぼ並行する可能性が高く、後北C2-D式第2段階-1の後半から第2段階-2に位置づけられる寒川Ⅱ遺跡は、ほぼ辻編年I-2期からⅢ-1期の古い段階に並行するものと捉えられる。

ところで、寒川Ⅱ遺跡の第2号土壙墓から出土した羽状撲糸文壺形土器は、十王台式の系譜上に属するものと考えられるが、十王台式の変遷については鈴木素行により5段階に分けられており、その型式名と変遷過程は、「十王台1a式」→「十王台1b式」→「十王台1c式」→「十王台2a式」→「十王台2b式」というものである（鈴木1992,1994）。この鈴木編年を念頭に置きつつ関東地方の古墳時代の土器編年を概観すると、比田井克仁は、十王台2a式（千葉県佐倉市大崎台遺跡第230号住居跡出土資料）を比田井編年I段階古相（庄内式期I・II）に位置付け（比田井1994）、茨城県域における塩谷修による編年では、十王台2b式（茨城県東海村部原北遺跡第2号住居跡出土資料）を比田井編年I段階古相（庄内式期I・II）に位置づけている（古墳時代研究会1997 P87）。このことから、十王台2a式と2b式は庄内式期I-Ⅱの時期に存在している可能性がうかがえる。

寒川Ⅱ遺跡の壺形土器は、類例の不足から型式学的にはその編年的位置を明確に定められないものの、かなり変容した器形と文様のあり方を退化した状態と捉えた場合、十王台式の変遷過程の中においては終末の資料よりもさらに後出のものと見なされよう。そのような見地からこの資料の編年的位置を想定すれば十王台2b式より後出のものと捉えられ、先に述べた比田井編年の内容から、庄内式期ⅢかⅣにおおよそ並行している可能性が高いと考えられる。このことと、先述の寒川Ⅱ遺跡の後北

C2・D式全体の資料が辻編年I-2期からIII-1期の古い段階にあるという検討結果との間に大きな矛盾は生じない。これらの2つの事項の重複する部分を採用すれば、寒川II遺跡の第2号土壙墓の羽状撲糸文壺形土器（弥生系土器）は、辻編年I-2期からII-2期あたりに存在している可能性が高く、即ち、塩釜式II-1期を前後する時期に並行していると考えられる。

## V 広域編年（今後の展望）

以上、寒川II、永福寺山、隠川(11)、内越の4遺跡における共伴事例をもとに、後北C2・D式第1段階と第2段階-1、第2段階-2の古式土師器に対する位置が把握できたが、ここではその後の段階の後北C2・D式の編年的位置についても若干考えてみたい。

上記4遺跡以外において、後北C2・D式が古式土師器と共に伴した事例としては、宮城県篆館町伊治城跡が挙げられる。伊治城跡（佐藤1992）では、S D260、261溝の覆土（大別1層下部から2層の上面）において、北大I式<sup>21</sup>と後北式に属する可能性のある破片が丹羽編年第II段階の塩釜式と共に伴している。「後北式に属する可能性」のある資料は、後北C2・D式第4段階に比定されるものであることから、同遺構から出土した北大I式は、後北C2・D式第4段階と一緒に並行する最古段階の資料として考えられる（木村1994）とともに、この後北C2・D式は第4段階の中でもさらに新しい段階に位置づけられる。

また、丹羽編年第II段階に位置づけられた塩釜式は後に、岩見和泰によって辻編年III-3期に位置付けられている（岩見1993）。

表6 古式土師器と続縄文土器の対応表

畿内 (河内) 米田	東海 (鷹尾平野) 赤塚	北陸 (南西部) 田嶋	関東 (南部) 比田井	東北 (南部) 辻	東北地方 の後北 C2・D式	共伴例
第V様式期					第1段階	内越
庄内式期I	遅間I式0~2	漆3・4群			I-1期	
庄内式期II	遅間I~II式	漆5群	I段階古		I-2期	
庄内式期III	遅間II式2~3	漆6群	I段階新		II-1期	
庄内式期IV	遅間II~III式	漆7群			II-2期	寒川II 隠川(11)
庄内式期V					第2段階-2	
布留式期I		漆町8群		III-1期		永福寺山
	遅間III式2~3		II段階			
布留式期II		漆町9群		III-2期		
布留式期III	遅間III式4	漆町10群	III段階	III-3期	第4段階	伊治城跡

\* 東北辻編年の左側には、時間軸としての畿内、東海、北陸、関東の編年を対照させ、東北辻編年の右側には後北C2・D式の各段階と、本稿で扱った遺跡名を組み込んでみた。

なお、この表の縦の幅は、実年代幅（時間幅）を考慮している。年代幅は、比田井による最近の検討結果（比田井1997b）を参考にした。ただしこの表は、あくまでも現時点における推定の範囲内にあるもので、今後、弥生系土器、古式土師器、続縄文土器の共伴事例の追加に応じて修正を要する暫定的なものである。

先に検討した永福寺山遺跡出土の塙釜式がⅢ-1期の古い段階で、それに伴う後北C2·D式は第2段階-2の終末あたりと推定されたが、後北C2·D式第2段階-2と第4段階の間には第3段階が存在していることを考慮すれば、伊治城跡の後北C2·D式第4段階と最古段階の北大I式が辻編年Ⅲ-3期の塙釜式と共に伴った事実は、後北C2·D式の変遷過程との対応面に整合する。

以上、寒川II・永福寺山・隠川(11)・内越遺跡の4遺跡の事例に、伊治城跡の事例を加え、古式土師器の既存編年との対応を検討してみた。この結果をまとめたものが表6である。

5遺跡における共伴事例から、後北C2·D式は、畿内第V様式末期から辻編年Ⅲ-3期(布留式期Ⅲ)のあたりまで存続していると推定される。しかし今のところ、塙釜式と後北C2·D式第3段階の共伴事例は皆無であるため、後北C2·D式第3段階と塙釜式がどのように並行しているのかは判断できない。よって、後北C2·D式第3段階の資料については、今後さらに注意して検出につとめることが必要であるし、また、後北C2·D式第3段階の資料と塙釜式の共伴事例が今後増加すれば、後北C2·D式と塙釜式との対応関係はより的確に捉えられるようになると思われる。

## VI まとめ

以上、秋田県能代市寒川II遺跡、岩手県盛岡市永福寺山遺跡、青森県五所川原市隠川(11)遺跡の3遺跡における事例をもとに、弥生系土器と塙釜式土器の時間的関係について検討を行った。また、これら3遺跡の事例に宮城県築館町伊治城跡と新潟県西山町内越遺跡の2遺跡における事例を加えて、後北C2·D式土器の弥生土器と古式土師器に対する編年的位置についても検討を行い、全体として以下の3点を指摘した。

- ① 後北C2·D式第2段階-1と第2段階-2の間に塙釜式II-2期が対応し、さらに後北C2·D式第2段階-2に塙釜式III-1期の古い段階が対応すると考えられる。
- ② 寒川II遺跡の第2号土壙墓において後北C2·D式に共伴した羽状撫糸文壺形土器(弥生系土器)は、辻編年I-2期からII-2期あたりに並行している可能性がある。
- ③ 後北C2·D式は、畿内第V様式末期から塙釜式III-3期(布留式期Ⅲ)のあたりまで存続していると推定される。

北東北における古墳時代前期の土器様相については、今後も解明しなければならない課題が山積している。庄内式期から布留式期にかけては、列島規模での著しい人の移動のあったことが明らかにされてきているが、後北C2·D式土器の東北地方における出土や赤穴式土器の北海道における出土もその動きの一部を構成しているものと考えられる。ある特定地域の歴史的動態を他地域との関連で考える際に必要とされるものは、言うまでもなく土器編年によって構築される各地域共通の時間軸(広域編年)である。そのような意味で、今回扱った寒川II遺跡の弥生系土器と、一般的に赤穴式と呼称されている土器群の型式学的な検討、そして後北C2·D式と赤穴式との時間的関係の追究は今後の重要な課題と言える。現状では、北東北出土の該期の土器資料は破片資料が大半であることから、こういった諸課題に対しては、積極的な仮説提示が大切であると思われる。

筆者の力量不足ゆえ、本稿には多くの誤解等が多くみられるものと思う。先学諸氏の御叱正を賜りたいと思う次第である。

最後になりましたが、福田友之氏と浅田智晴氏には種々のご協力を賜りました。心より厚く感謝申し上げます。

## 註

- (1) 具体的には、ほぼ青森県域、秋田県域、岩手県域を指す。
- (2) ここでは田中新史の言う「出現期」(田中1984)と辻編年Ⅲ-3期までを古墳時代前期と表記する。
- (3) 古墳時代前期に存在する弥生土器の系譜上に属する資料を指す。具体的には、寒川Ⅱ遺跡から出土した羽状燃系文の施された壺形土器のような資料を指すが、この資料以外の「弥生系土器」を現段階において明確にすることは難しい。
- (4) ここでは、米田編年の庄内式期Ⅰから辻編年Ⅲ-3期までの資料に対して用いる。
- (5) 新潟県巻町南赤坂遺跡と宮城県石巻市新金沼遺跡では、古墳時代前期の遺構から後北C2-D式が出土している。
- (6) この口縁部形態に注目する発想は、高橋信雄がかつて行った「Aタイプ」「Bタイプ」の分類(高橋1982)から得たものである。なお、「後北C2-D式後葉」にも1条タイプは見られるが、これは「一般的なC2-D式」にみられるものとはかなり異なり。口唇部の直下に貼付されるものではなく、もっと下に貼付されるものである。ここではこの「後北C2-D式後葉」に見られるようなタイプのものは対象としない。いずれこの刻目貼付帯の各タイプについて考えてみたいと思っている。
- (7) 今のところ全く実証できないが、北海道のある地域においては、早い段階から2条タイプが出現している可能性があると考えている。このことが実証されれば、本稿の今回の分析は、再考が必要となる。なお、私見では、徐々に1条タイプが減少し、2条タイプが優勢となり、最終的に「後北C2-D式末」の段階では、2条タイプと0条タイプのみで大半を占めるようになり、2条タイプの一部は口縁部に2条巡らす隆起線へと変化するのではないかと考えている。
- (8) 本稿で扱う資料は数量的に非常に少ないため、構成比を求める作業としては、統計学的に問題が残されるが、少ない資料に対して厳密な姿勢を固持すると、何も分析できない状況にあるため、やむを得ないことをとしてご容赦いただきたい。構成比を求める際は、個体数を確実に把握することが望ましいが、東北地方出土資料のような断片的な資料から個体数を導き出すのはかなり困難である。資料の制約上、口縁部計測法を利用できる場面も限られるし、また、肉眼による観察結果も果たしてどの程度正確であるか疑わしい。例えば、一人の製作者が同一時期に数個体の同じ様な土器を作成し、それが破片となった場合、肉眼による個体数識別にはかなりの誤差が含まれるであろう。それならば、今回のような1点の破片資料を大小にこだわらず、機械的に0.1個体と数える方法も容認されて良いと思われる。
- (9) このことは、米田編年以外の編年を認めないとするものではなく、単に名称の相違による混乱を避けるためである。
- (10) 第5号土塙墓からは、縄文時代晩期の壺形土器に類似する資料が出土しているが、ここではあえて問題にしない。
- (11) 遺構の配置から見ても、永福寺山遺跡の塩釜式は新古の2段階に分かれる可能性も十分考えられるが、散逸してしまった資料も多いことから、ここではこのことについて深く追究できない。
- (12) この資料は、中村五郎により庄内式並行に位置づけられている(中村1992)。なお、この口縁部に円形浮文の付される壺は、保管場所が不明であって、報告書には掲載されていない。現在では岩手県水沢市高山遺跡の報告書(水沢市教育委員会1978)等に掲載された白黒写真でしか見ることができない。よって、遺構に伴ったものかどうかも不明である。図は、高山遺跡の報告書に掲載された白黒写真を筆者がトレースしたものである。
- (13) この資料の保管場所は現在不明であり、報告書には掲載されていない。よって、遺構に伴ったものかどうかも不明である。拓影図は、高橋昭治と武田良夫の論文(高橋・武田1982)に掲載されたものを転載したものである。
- (14) ただし、永福寺山遺跡の装飾文様を持たない資料は辻編年Ⅲ-3期との共通点が多い。このことから、これらの塩釜式はⅢ-1期とⅢ-3期に分かれる可能性もあるが、装飾文様を持たない資料を破片で時期判別することは難しいため、これ以上の追究は行い得ない。
- (15) 1997年に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施。1999年3月報告書刊行予定。
- (16) これら後北C2-D式と塩釜式は時期の異なるもので、ただ単に近くから出土しただけであるといった消極的な捉え方もできるが、これら両者が時期の異なるものとした場合、限定された範囲に、重複して分布しているこの状況に対し、適切な説明を加えることは難しい。詳細については報告書を参照されたい。
- (17) 比田井克仁氏と赤塚次郎氏に御教示いただいた。深く感謝の意を表したい。
- (18) 辻秀人氏に御教示いただいた。深く感謝の意を表したい。
- (19) 曲線的な文様構成が1つの完形個体において施される割合は非常に少ないし、また、本来的に曲線的なものであったとしても、それが緩やかな弧を描くものであれば、破片になった場合、大半は直線的なものに見える。よって、破片資料を見る際、曲線的な文様構成を持つものが少なくとも、それは時期判別の根拠とはならない。
- (20) 住居跡覆土の堆積状況に関する記述がみられず、土器の出土地点も示されていないため共伴として捉えることに疑問視する見解も見られる(中村1995)が、調査者である大森は、両者はほとんど床直上に近い状況で共伴したこと述べている(水澤1998)。
- (21) 大沼編年(大沼1997)に掲ると、このような北大I式は、「北大I式(古)」に位置づけられている。

## 引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990 「廻間遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
 阿部義平 1998 「本州北部の続縄文文化—森ヶ沢遺跡を巡って—」『月刊考古学ジャーナル』No.436 ニューサイエンス社  
 甘粕 健 1997 「第五章 古墳時代」『巻町史 通史編上巻』巻町

- 石井 淳 1994 「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号  
筑波大学歴史・人類学系
- 石野博信・関川尚功 1976 「縄向」 桜井市教育委員会
- 石橋孝夫ほか 1977 「Wakkaio - 一石狩、ワカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査-」  
北海道石狩郡石狩町教育委員会
- 石本省三ほか 1979 「聖山 北海道七飯郡龜田町における縄文時代遺跡の調査」 七飯町教育委員会
- 石本省三 1984 「北海道南部の続縄文文化」『北海道の研究』第1巻 考古編 I
- 井上雅孝 1994 「PIXEによる続縄文土器の胎土分析」『NMCC共同利用研究成果報文集』 1
- 岩見和泰 1993 「(5)伊治城(いじょう)跡」「シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討」  
日本考古学協会1993年度新潟大会実行委員会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典 1972 「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号 北奥古代文化研究会
- 上野秀一 1987 「第3章 遺物」「K135遺跡4丁目地点5丁目地点」 札幌市文化財調査報告書XXX  
札幌市教育委員会
- 上野秀一 1992 「北海道における天王山式系土器について-札幌市K135遺跡4丁目地点出土資料を中心に-」  
『東北文化論のための先史学歴史学論集』 加藤稔先生還暦記念会
- 上野秀一 1994 「北海道続縄文文化の諸問題-北大式をめぐって-」  
『第5回縄文文化検討会シンポジウム 北日本続縄文文化の実像』 縄文文化検討会
- 大島秀俊 1991 「小樽市蘭島餅屋沢遺跡」 小樽市埋蔵文化財調査報告書第2輯 小樽市教育委員会
- 大沼忠春 1978 「東北地方北部の後北式土器について」『考古風土記』第3号
- 大沼忠春 1982a 「後北式土器」「縄文土器大成 5 続縄文」 講談社
- 大沼忠春 1989 「続縄文式土器様式」「縄文土器大觀 4 後期・晚期・続縄文」 小学館
- 大沼忠春 1997a 「手宮洞窟の時代-続縄文時代の北海道-」「手宮洞窟シンポジウム記録集」 小樽市教育委員会
- 大沼忠春 1997b 「8・9世紀の土器-口縁部に沈線文のある變形土器」「蝦夷・律令国家・日本海-  
シンポジウムII・資料集-」 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
- 大森勉・横山勝栄ほか 1983 「内越遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査報告書第33 新潟県教育委員会
- 木村 高 1994 「東北地方-後北C2-D式土器、北大I式土器の周辺-」『北海道考古学』第30輯 北海道考古学会
- 木村 高 1996 「青森市玉清水(1)遺跡出土の後北式土器」『青森県考古学』第9号 青森県考古学会
- 日下和寿 1997 「山形村丹内I遺跡発掘調査報告書」 岩手県立博物館調査研究報告書第13冊 岩手県立博物館
- 小林克ほか 1988 「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1  
-寒川I遺跡・寒川II遺跡-」 秋田県文化財調査報告書第167集 秋田県埋蔵文化財センター
- 小林 克 1991 「農耕社会に南下した狩猟採集民-秋田県能代市寒川II遺跡の事例-」  
『月刊考古学ジャーナル』No341 ニューサイエンス社
- 小林 克 1992 「「東北続縄紋式」学説史的覚え書き」「北奥古代文化」第22号 北奥古代文化研究会
- 小林 克 1993a 「東北北部の続縄紋期の土器」「二十一世紀への考古学」 櫻井清彦先生古稀記念会
- 小林 克 1993b 「江別C2式土器の本州分布をめぐって-「東北続縄紋式」の視点から-」  
『先史考古学研究』第4号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 古墳時代土器研究会 1997 「土器が語る-関東古墳時代の黎明-」 古墳時代時研究会
- 斎藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第5号 岩手考古学会
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」「東北考古学の諸問題」 東北考古学会
- 佐藤信行 1983 「宮城県内の北海道系遺物」「北奥古代文化」第14号 北奥古代文化研究会
- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」「宮城の研究」第1巻
- 佐藤則之 1992 「IV.第18次調査」「伊治城跡」 萩館町文化財報告書第5集 萩館町教育委員会
- 鈴木正博 1990 「鈴木「先史土器」研究の課題(一)」「古代」第89号 早稲田大学考古学会
- 鈴木 信 1998 「(3)後北C2-D式の分類案」「千歳市ユカンボシC15遺跡(1)」  
(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木素行 1992 「7 弥生時代遺物の編年的位置」「武田V-1991年度武田遺跡群発掘調査の成果-」 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第7集 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行 1994 「4 弥生時代遺物の編年位置・II」「武田VI-1993年度武田遺跡群発掘調査の成果-」 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第9集 (財)勝田市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木素行 1998 「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について-「十王台式」分析のための基礎的な作業-」  
『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告15
- 高橋昭治・武田良夫 1982 「岩手県における後北式文化」「北奥古代文化」第13号 北奥古代文化研究会
- 高橋誠明 1998 「角塚古墳前夜の大崎平野」「角塚古墳シンポジウム 最北境の前方後円墳」 胆沢町教育委員会

- 高橋信雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
- 田中 敏 1987 「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号 福島県立博物館
- 千代 肇 1965 「北海道の縄繩文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯 北海道考古学会
- 次山 淳 1992 「塙釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会
- 辻 秀人 1993 「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム2東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会1993年度新潟大会実行委員会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年その1 会津盆地」『東北学院大学論集』歴史学・地理学26号 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集』歴史学・地理学27号 東北学院大学学術研究会
- 津嶋知弘ほか 1997 「永福寺山遺跡－昭和40・41年発掘調査報告書－」 盛岡市教育委員会
- 寺沢 薫 1980 「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県教育委員会
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
- 豊田宏良 1991 「第二節 第1黑色土層出土の遺物」『祝梅川山田遺跡における考古学的調査』 千歳市文化財調査報告書X VI 千歳市教育委員会
- 中村五郎 1982 「縄繩紋土器編年をめぐる諸問題」『北奥古代文化』第13号 北奥古代文化研究会
- 中村五郎 1990 「弥生土器から土師器へ」『福島考古』第31号 福島県考古学会
- 中村五郎 1992 「古式土師器・縄繩紋土器編年をめぐって」『北海道考古学』第28輯 北海道考古学会
- 中村五郎 1995 「弥生土器・縄繩文土器・古式土師器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 丹羽 茂 1985 「IV 考察 今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』 宮城県文化財調査報告書第104集 宮城県教育委員会
- 芳賀英実 1997 「石巻市新金沼遺跡」『平成9年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県史跡整備市町村協議会
- 比田井克仁 1991 「西相模の弥生後期から古墳前期の土器様相」『足もとに眠る歴史 西相模の三・四世紀』 東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査団
- 比田井克仁 1994 「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究V-1』 庄内式土器研究会
- 比田井克仁 1997a 「弥生時代後期における時間軸の検討－南武藏地域の検討を通して－」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 比田井克仁 1997b 「定型化古墳出現前における濃尾、畿内と関東の確執」『考古学研究』第44卷第2号 考古学研究編集委員会
- 藤沢 敦 1996 「仙台平野における古墳の変遷－その断絶と画期をめぐって－」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 前山精明 1993 「新潟県巻南赤坂遺跡発掘調査の概要」『1993年度遺跡調査報告会』 北海道考古学会
- 前山精明 1994 「新潟県巻南赤坂遺跡をめぐる諸問題」『第5回縄文文化検討会シンポジウム 北日本縄文文化の実像』 縄文文化検討会
- 水澤幸一 1998 「兵衛遺跡・四ツ持遺跡」 中条町埋蔵文化財報告書第15集 中条町教育委員会
- 水沢市教育委員会 1978 「高山遺跡」 岩手県水沢市文化財報告書1集 高山遺跡調査委員会
- 森田知忠 1967 「北海道の縄繩文文化」『古代文化』第19卷第2号 古代學協會
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会
- 米田敏幸 1992 「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』第6卷 土師器と須恵器 雄山閣
- 米田敏幸 1994a 「庄内・布留式期の畿内と関東」『庄内式土器研究V』 庄内式土器研究会
- 米田敏幸 1994b 「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究VI』 庄内式土器研究会

# 高屋敷館遺跡について

畠山昇

## 1 はじめに

発掘現場で調査しているときや、整理作業に携わっているときいろいろな問題点に遭遇するときがある。また、遺構や遺物の多い遺跡の報告書を作成しなければならない時には、事実記載のみに終始せざるをえない状況となり、調査者としての遺跡観を提示しないまま、終わってしまうこともよくあることである。しかし、報告書が刊行されると、ある種の安堵感と次に控えている仕事に取りかからざるを得ない状況から、かつて頭にあった問題点が徐々に薄らぎ、ついには消滅してしまうこともよくある。消滅するのであればまだよい方であるが、それが頭の片隅に残っていると、消化不良を起こして日々とする日々を送ることになる。筆者にとっては、高屋敷館遺跡がそれにあてはまる。

浪岡町に所在する高屋敷館遺跡は、平成6年・7年の2年間にわたって発掘調査が行われ、平成9年には調査概報が、平成10年には調査報告書が刊行された。筆者は当事者の一人であったが、膨大な資料の整理作業に終始したため、報告書に記述できなかった部分や調査者としての遺跡観を提示できなかった。ここでは、それを補う意味で、本遺跡における住居跡の変遷と性格について、筆者なりの高屋敷館遺跡を概観してみたいと思う。

## 2 遺跡の概要

八甲田西麓及び梵珠山に連なる浪岡町の丘陵地帯には、平安時代の遺跡が数多く所在している。そして、それらのほとんどが9~10世紀代の遺跡であり、11~12世紀代の遺跡は少ないようである。本遺跡は、9世紀末葉から12世紀前葉まで連続した遺跡であることに加え、土塁と濠に囲まれた集落跡であることが特徴となっている。土塁は濠の外側に造られており、西日本における弥生時代の環濠集落とその構造が類似する。この環濠集落が形成されるのは10世紀前半の中頃であり、当初は野尻(3)遺跡を含めた区域が集落の範囲であった。そして、環濠で区画された区域が区域外の住民を含めた重要な共有施設でもあったと考えられる。また、環濠の出入り口も西<sup>1</sup>・南東・北側の三カ所で発見されたが、そのうち北側の出入り口は、外部で生活していた人々が環濠内に移り住むようになった頃に閉ざされたものと考えられる。環濠で囲まれた区域からは、多数の竪穴住居のほか、鍛冶工房や土坑、井戸跡、溝跡などの遺構も検出された。鍛冶工房では他地域から供給された銑鉄を用いて鋼を造り、それを素材として鋼製鉄器の製作がなされていた。それはおそらく10世紀後半に始まったと考えられ、11世紀後半まで続いている可能性が考えられる。また多量の鉄滓の出土は、単に集落内における自給だけでなく、周辺の集落にも供給されていた可能性を示唆している。出土遺物は、土師器や須恵器の他に、鉄器(刀子、鎌、斧、鋤先、鉄鎌、紡錘車など)、銅製品、土製品、木製品(菰柵、竪杵、椀など)、石製品(砥石、台石、基石?など)、擦文土器など多種多様である。なかでも県内でも類例の少ない内耳土器や片口土器、宗教性の強い杖頭状(錫杖状)鉄製品や銅椀・自在鉤状銅製品、土鈴、土玉、勾玉など、北方的な遺物や律令国家的な色彩の強い遺物などがある。

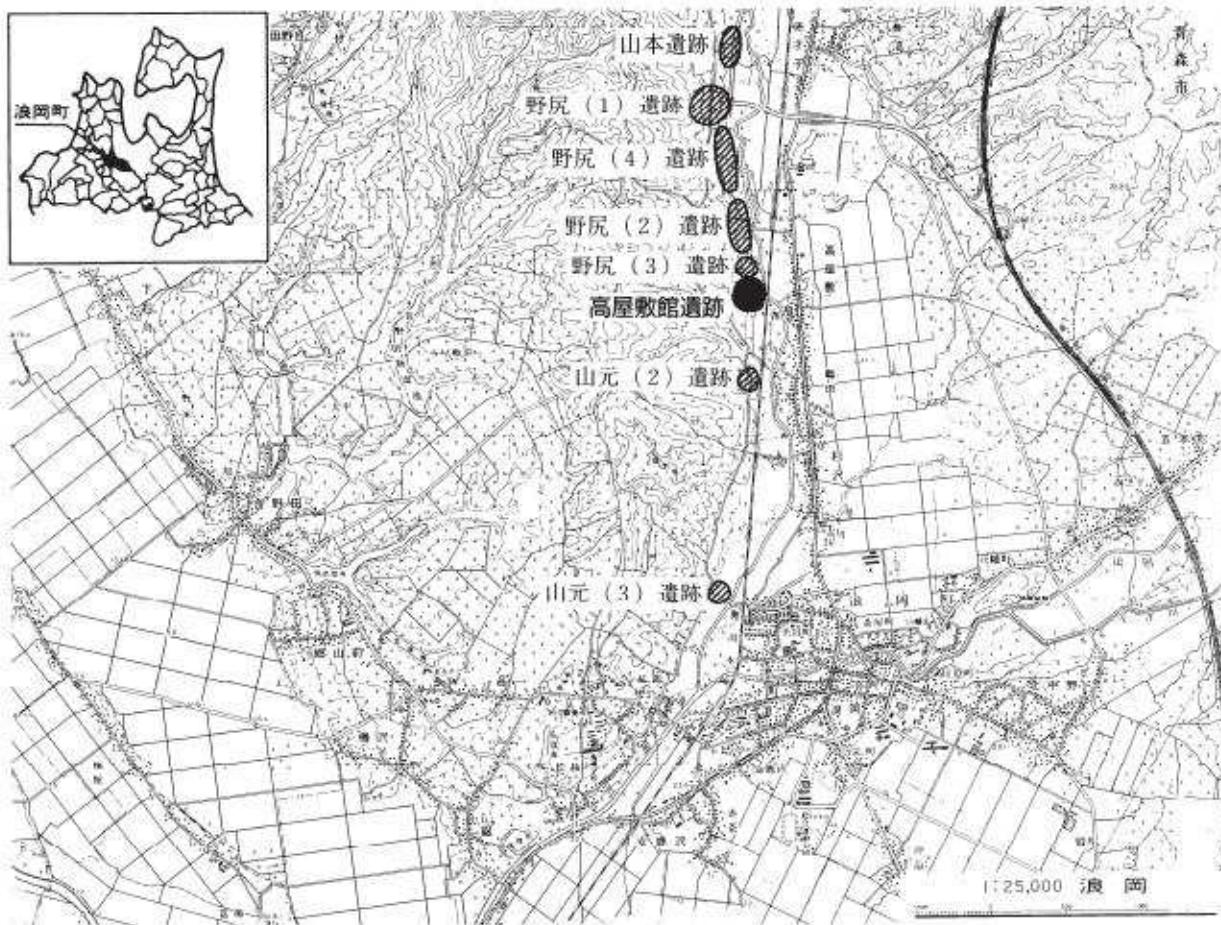


図1 遺跡位置図

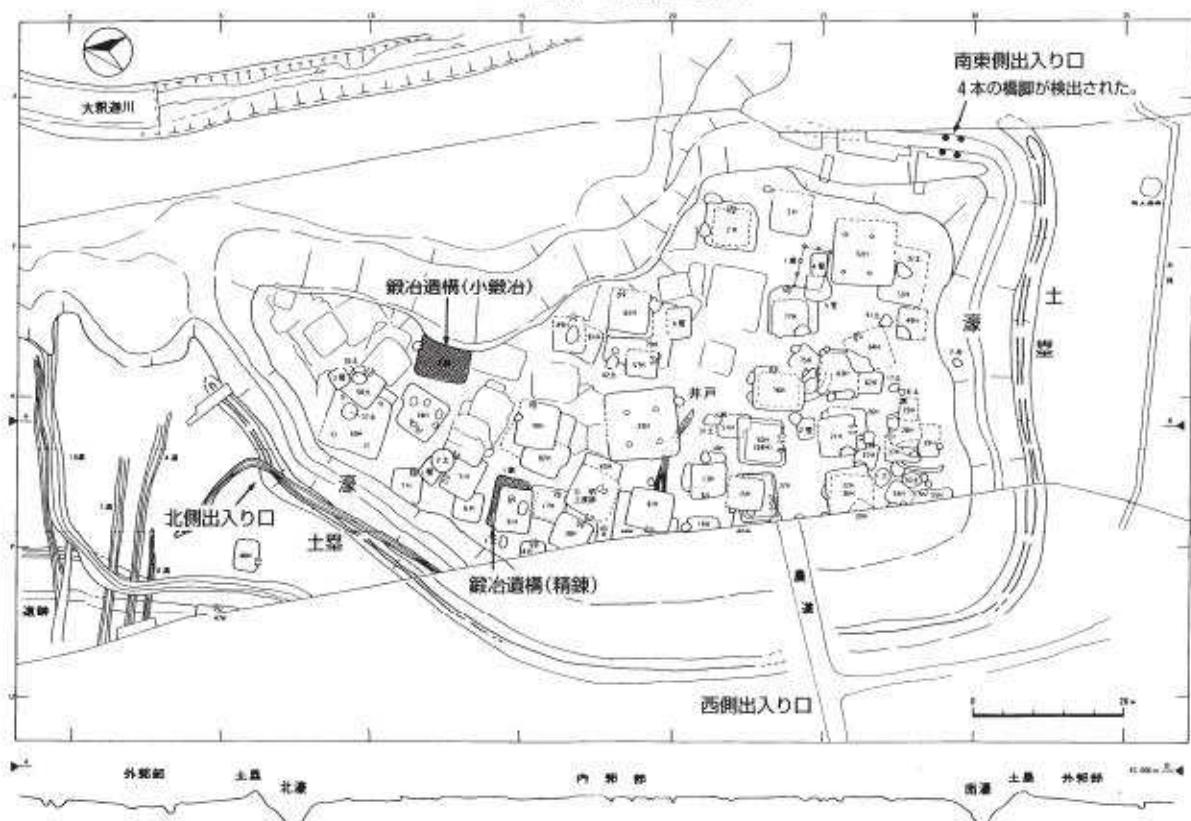


図2 遺構配図

### 3 住居跡の変遷

遺構の変遷を考えるにあたっては、白頭山・苦小牧火山灰（B-Tm）の降下年代と橋脚に用いられた木柱及び板状木製品の年輪年代を念頭に置いた。白頭山火山灰の降下年代については、いまだに結論が出ていないが、ここでは10世紀前半の923～938年頃という説<sup>2</sup>に基づいて論を進めることにした。また、濠から出土した木柱と板状木製品の年輪年代は12世紀初頭を示していること、出土遺物の中に12世紀中葉以降と思われるものが見られないことから、本遺跡の終末を12世紀前葉頃と想定した。

上記の年代観に基づいて、検出遺構の新旧関係を重視し、これに伴う住居構造の変化もその視野においていた。これによって、住居構造のうち、壁ぎわに柱穴列が並ぶタイプ（いわゆる壁立構造のもの）やカマドが住居の壁辺よりも内側にあるもの、二つのカマドを持つものは、本遺跡の中でも新しい時期に属するものであることがわかった。そして、これらの住居跡から出土した遺物には把手付土器や内耳土器があることから、これらの住居の年代をおおむね11世紀代と考えることができた。

なお、本来であれば出土土器の編年からも追求すべきと思われるが、遺構の重複が激しい場合、古い時代の遺物の混入が見られることが一般的であり、出土遺物の共伴関係を見極めることが難しい。本遺跡の場合、良好な出土状況のものが少ないと見られることから、出土遺物については参考程度にしている。また、本県における11～12世紀の土器の変遷については未だ不十分な点が多く、今後の研究の進展によっては、本遺跡出土土器のなかに12世紀代の土器も相当数含まれることも予想される。このことからも、将来的には出土遺物からも検討する必要があろう。さらに、完掘できなかった住居跡や確認だけの住居跡、未調査の区域において明らかに周辺よりも新しいと見られる住居跡など、まだかなりの部分が調査されずに残されている。試論とはいえ、それらを抜きにして論じているため、今後の調査によっては修正されるべきと考えてもいる。以上のことから、本遺跡における住居跡の変遷を試みてみるが、現時点での一つの試案として理解されたい。

#### （1）9世紀後半から10世紀前葉（図3左）

大沢迦川西岸の台地上に集落が見られるようになるのは、これまでの発掘調査では9世紀に入ってからで、9世紀後半以降になると住居の数が増加傾向にあることが知られている。本遺跡において、集落が営まれるようになるのは、おそらく9世紀末葉から10世紀初頭の頃と思われるが、この頃から環濠が造られるまでを一つの時期とした。この時期に該当すると思われる住居跡は6軒ほどであるが、掘り方のみで確認した住居跡もこの時期に含まれる可能性があることから、もう少し多いかも知れない。この時期の住居跡には、竪穴部分だけで建つ一般的な住居の他に、外周溝が付随した住居跡が1軒ある。このほかにも、住居跡の外周溝と考えられる溝跡が数条検出されている。発掘調査では明瞭な形で検出出来なかつたが、周辺の遺跡で見られるような住居+掘立柱建物+外周溝で構成される建物も存在していた可能性が考えられる。おそらく、環濠を造った人々による度重なる造成工事などによって破壊されたものと思われる。

周辺の状況を見ると、野尻(1)～(4)遺跡で「住居+掘立柱建物+外周溝」というスタイルの建物が多数報告されている。また、野尻(2)・(3)遺跡では、墓と考えられている円形周溝が多数造られ、白頭山火山灰との関係から10世紀前葉頃まで続くことが確認されている。さらに野尻(4)跡では、白頭山火山灰の降下前のある段階で、集落の一部を囲む小規模な環濠が報告されている（図6）。環濠集落の発生・起源を考える上で興味深い事例である。

### (2) 10世紀中葉から10世紀後半（図3右）

濠が造られた年代については明確にできなかったが、南側土塁の崩落土と地山との間に検出した白頭山火山灰のあり方から、この降下年代に近い時期に造られたと考えている。環濠で囲まれた区域の出入り口は、西側のはかに、北側にも設けられており、木橋が架かっていた。また、南東部の出入り口－木橋については、この頃から存在していたものと考えておきたい。

上記の観点に立ったとき、環濠が造られた頃には、まだ周辺にも住居が存在していたことが考えられる。そして後半以降になると、他遺跡では住居跡の減少傾向が見られるようになるが、本遺跡では住居跡の数が増えてくるようになる。

本遺跡の北側に隣接する野尻(3)遺跡では、この時期に住居+掘立柱建物+外周溝のセットの住居が整然と並ぶ住居跡群が報告されている。また遺物の上でも、野尻(3)遺跡との関連がうかがわれるものが出土しており、本遺跡との同時存在を示唆している。しかも、これらの住居群に通ずる環濠集落の北側の出入り口の存在から、環濠で囲まれた区域から北側の野尻(3)遺跡を含んだ区域が高屋敷館集落の範囲であったことが考えられる。しかし、この時期、環濠内には住居+掘立柱建物+外周溝の住居跡が見られず、豊穴部分だけで建つ大小の住居跡が存在している。また、環濠内の北側で銅精錬や小鍛冶が操業され始めたのもこの頃と考えられる。鉄滓の出土量からは、集落内における自給だけでなく、周辺の集落にも供給されていたものと考えられる。

環濠の内外で住居の様相が異なっている状況は、重要な問題であり、なお検討を要するが、居住している人間の職能差や階層差等に由来するものとも考えられる。本遺跡の性格を考える上でも非常に興味深い現象であり、単に「防御」だけの側面だけでは説明しきれないようと思われる。

野尻(3)遺跡では、三点セットの建物跡の後に、掘立柱建物跡も外周溝も持たない住居も続くことが重複関係から確かめられている。また10世紀の終わり頃には、環濠の外部で生活していた人々も、環濠の中に移り住むようになったと思われる。さらに、濠際の住居跡の存在から、大規模な改修工事も行われ、北側の出入り口も塞がれたのではないかと考えられる。

### (3) 11世紀代前半（図4左）

この時期の住居跡はまだ東カマドを持つ住居跡が主体となっているが、新旧関係からは、北カマドの第19号住居跡や第28号住居跡もこの段階に含まれる。住居の構造では、壁際に柱穴が多数巡る壁柱穴タイプのものが多く見られるようになり、改築が行われている住居跡も少なくない。また、カマドの多くは壁辺に造られているが、これよりも内側に造られ煙道部が設けられない構造のものも出現していくようになる。それらは、この時期の中でも、より新しい方に属するのではないかと考えられる。また、カマドの前庭部には灰溜ピットが設けられている住居もあるが、まだ少数である。集落の中央には、大型住居が位置しているのが象徴的である。また、前代に続いて銅精錬や小鍛冶も行われている。銅精錬の工房が他の住居により切られているという状況から、他の場所へ移っている可能性も考えられる。

なお第70号住居跡は、カマドの向きや住居構造の点からこの時期に含めたが、この住居跡からは金属器を模倣したと思われる片口土器が出土しており、もっと新しい時期に造られた可能性も考えられる。

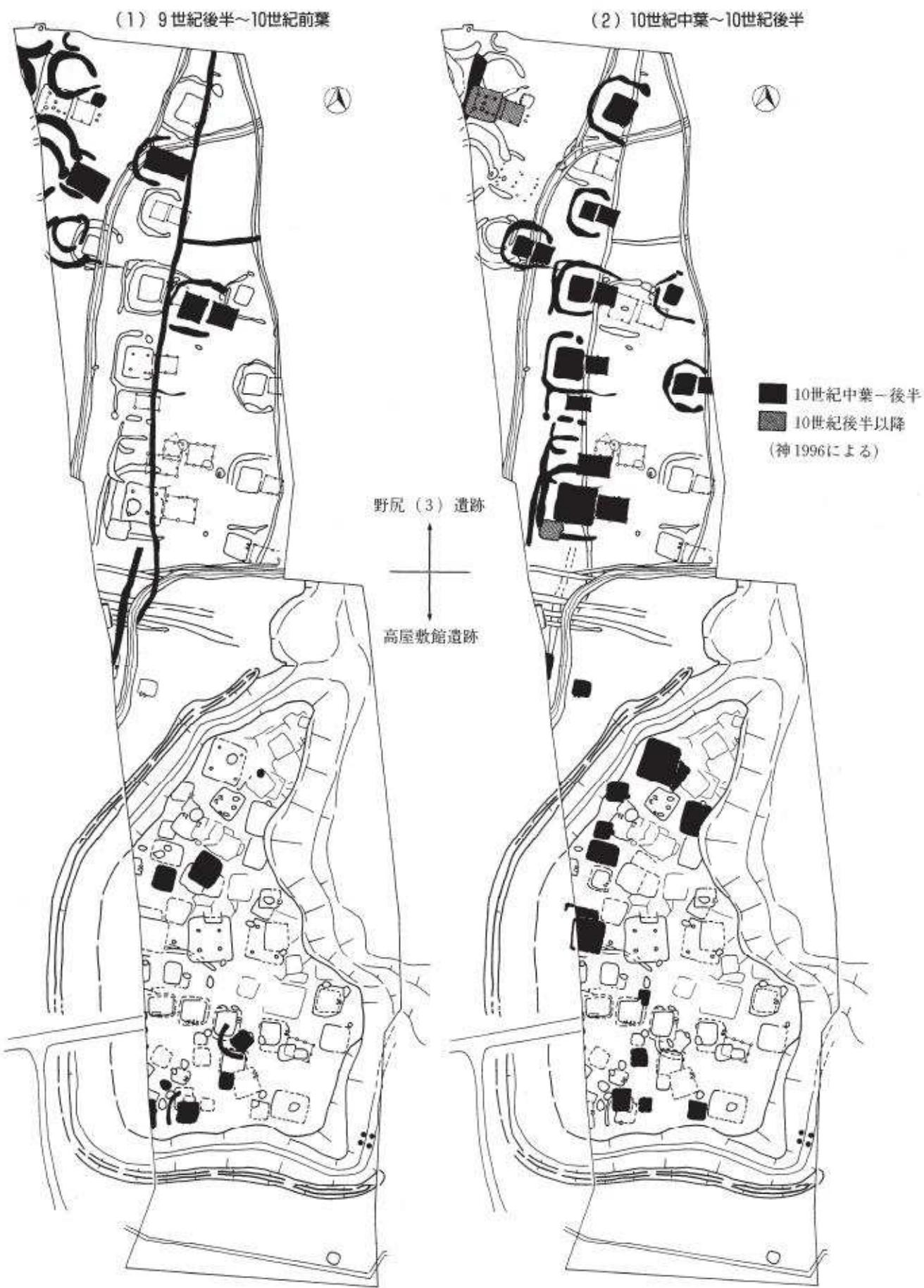


図3 住居跡変遷図（1）

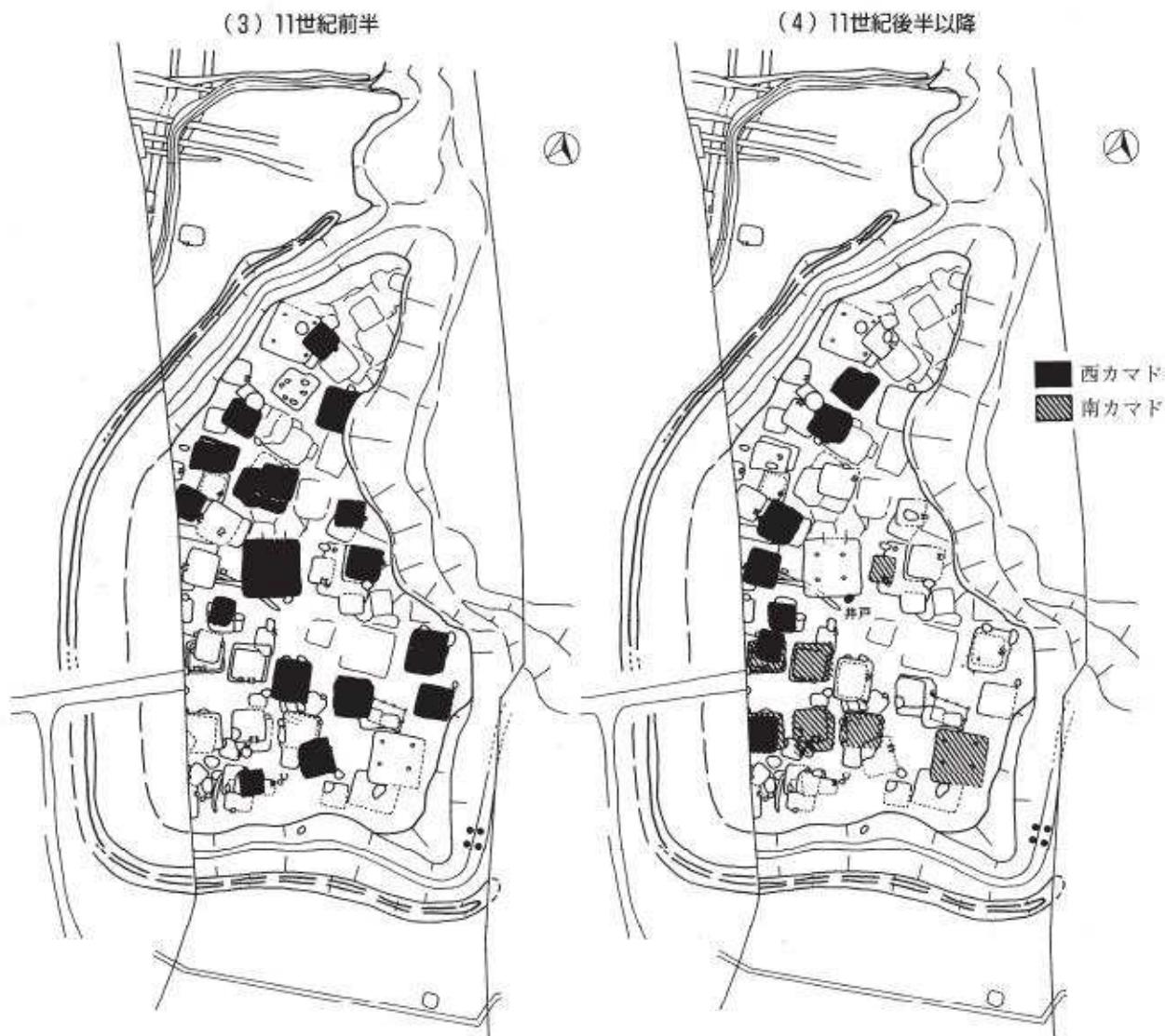


図4 住居跡変遷図（2）

## (4) 11世紀後半から12世紀前葉 (図4右)

西カマドと南カマドを持つ住居跡が主体となる。これらのカマドは住居跡の重複関係においても、新しい方に多い傾向にある。また、南カマドの第22号住居跡と西カマドの第36号住居跡との重複関係では、前者が後者よりも古いことが確認されている。前代に続いて壁柱穴のタイプが主体であり、拡張や同位置における改築が行われているものが多く見受けられる。カマドは壁辺に設けられるものとやや内側に設けられているものがあり、二つのカマドが設けられているものもある。また、大半のカマドには灰溜ピットが設けられている。

環濠の内側全体を概観したとき、中央に位置している井戸を囲むように、西側には西カマドの住居跡が、南側には南カマドの住居跡が濠に沿うように存在している。おそらく、西カマドを持つ住居と南カマドを持つ住居は、若干の時間差を持つものもあるものの、同時存在のものも多いと考えられる。南東部の出入り口近くには、大型住居が位置している。また銅精錬と小鍛冶の工房は、環濠内の別の場所で操業を続けていると思われるが、ある時期にはそれも行われなくなっていくと思われる。なお、

性格不明の工房跡とした遺構は、西壁に造り付けのカマドを、中央には炉を持つ建物である。中央の炉について調査していないため断言できないが、鉄滓がほとんど出土していないことから、鉄に関連した遺構の可能性は低い。また、杖頭状（錫杖状）鉄製品が出土した第74号住居跡はこの時期に含まれる。

最終的には、どの住居跡が残るのか不明であるが、第15号住居跡が最終段階に近いものと思われる。カマドが検出されていないが、もともと造られなかった可能性もある。

12世紀の初め頃には、橋脚の建て替えが行われている。そして、12世紀前葉頃には本遺跡が営まれなくなるのである。

#### 4 本遺跡の性格について

本遺跡に見られるような濠と土塁は、外部と集落を遮断して防衛するための施設であり、このような構造の集落は「防御性集落」であるという見方が一般的である。古代における防御性集落については、三浦氏や本堂氏、工藤雅樹氏らによって、精力的に事例集成が行われ、北奥・道南地方における考古学的地域性の一つとして理解されている。また、文献資料の少ない時代とも云われているが、新たな考古学的発見によって資料の見直しが行われ、文献史学の面からの論考も見られるようになってきた（齊藤；1996）。これに対し、防衛における実効性の問題や環濠集落発生段階における認識の相違から、別な考えが提示されている。

前者は、「内部の人間を囮う」といったいわば捕虜収容所的な施設であるという説であり、「濠の外側に土塁が作られるいわゆる外土塁の存在は、中世城館の構造上の常識から逸脱したものであり、防衛施設ではありえない。防衛であれば、壕の内側に盛土し、柵を構築するはずである」という見解である（岡本；1998）。また、佐賀県吉野ヶ里遺跡の攻防戦想像図では、吉野ヶ里集落側が苦戦している様子が描かれており「防衛」を考えたとき象徴的である。この点について、本堂氏はそのような不合理性を認めた上で、「防衛や社会生活による属性から究明すべき」であり、「外に高い土塁を設け、要害地への移転を求めなかった高屋敷館集落民のその行為には、居住地既得の表示とか、武力の誇示といった威儀を含め、好戦的でなく、戦闘回避の契約性が表現されていまいか。武器や鍛冶遺構に認められるようにお互い自給と自衛を絶対とした排他的社会であっても、集落防衛においてその皆殺しを覚悟するほどの実戦的展開はなかった」という見解を提示している（本堂；1997）。本堂氏の云うように武器や鍛冶遺構が自給と自衛を絶対とした排他的社会とは思えないが、一つの見解として評価できよう。また、当時の戦闘形態がどのようにあったか不明であるが、内部抗争の激しい時代であり、数十人程度の争いと考えれば、十分防衛になったという見方もある（齊藤；1996）。また、人間を閉じこめるためにあれほどの大規模な濠を造り、虎口状の出入り口まで造る必要があるのかどうか。また今までして閉じこめられる人間とはいったい何か、といった疑問が生じることから、人間を閉じこめるための施設とは考えにくい。鐵鎌の出土は、武装集団としての性格も有していると考えられることから、防衛性を否定することは出来ないのではないか。

後者は、発生段階の環濠集落を「防御性」以外の観点から論じたものである（工藤；1997）。八戸市上七崎遺跡から宗教性の強い杖頭状（錫杖状）鉄製品が出土していること、そして10世紀後半以降広範囲な広がりを持ち、他の環濠集落においてもそれが見られること、また環濠内から検出された遺構や遺物に戦闘的要素や階層的要素が薄いことなどを根拠において、「古代環濠集落の発生に関しては、前段として上七崎遺跡に見られるような象徴的区画が存在し、戦闘を想定した防衛的区画領域というよりは、特定の（聖なる）集落に認められる一種のアジール的区画領域」であるとし、そして、



図5 北奥・道南地方の防御性集落分布図（三浦1996）

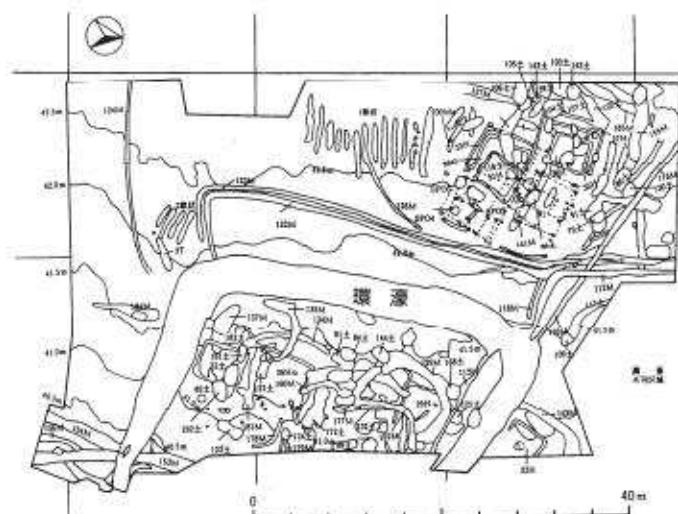


図6 野尻(4)遺跡（青森県教委1996）



図7 上七崎遺跡（八戸市教委1996）

それは北奥における中世城館の構造まで波及するという見解である。しかし、これは発生段階についてのことであり、これ以降に現れる環濠集落については、防御性それ自体については否定していないようである。むしろ、そこで検出された遺構や出土した多様な遺物—言い換れば発掘調査によって得られた考古学的資料から、環濠集落を理解しようとしたものと考えられ、本遺跡のような環濠集落は、地域豪族の拠点施設であるとともに、宗教的な側面や経済的な側面も持っていたと考えているようである。

本遺跡において環濠が造られた頃は、野尻(3)遺跡を含めた区域が高屋敷館集落の範囲であって、環濠で区画された区域は区域外の住民をも含めた重要な共有施設であった。そして環濠の内と外では様相が異なっていた。環濠の外では計画的な住居跡配置が特徴的であり、濠で囲まれた区域では銅と鉄器生産が行われるようになった。そのようなあり方からは、階層差や職能差の可能性も想定され、そのことが大規模な土木工事を可能にしたものと考えられる。社会的な緊張がより高まるようになると、区画外の住民も環濠内に入るようになるが、それにしたがって、鉄鎌の出土も目立つようになっている。このことから、武装したムラの姿とともに、銅と鉄器生産が行われ他集落へも供給されているという経済的な側面や宗教的な側面も見られるのである。さらに、南北交流を示す遺物も出土していることから、閉鎖的でない社会の姿も見られるのである。以上のことからも、本遺跡は、先学諸氏の云うように当時の社会における拠点集落の一つであったことは間違いないであろう。

## 5 おわりに

以上、本遺跡における住居跡の変遷や性格について概観してきたが、前述したように、住居跡の変遷については、今後の調査や研究の進展によって修正されるべきと考えている。また、環濠集落の西側及び南東部の出入り口の外側の状況や野尻(3)遺跡の西側がどのような状況になっているのかという問題や対岸に推定されるもう一つの郭の存在もある。本遺跡を本当の意味で理解するには、それらの区域の解明も必要である。木を見て森を見ることにならないために、今回調査した環濠部分だけではなく、もっと広い範囲の中で理解するのでなければ、本当の高屋敷館遺跡の姿は見えないであろう。

本論を草するにあたっては、報告書作成中の最中にも関わらず、職場の仲間には参考となる意見や原稿の修正などいろいろな点で御世話になった。末尾ながら、お礼を申しあげる次第である。

## 注

1 平成8年5月に浪岡町教育委員会によって、西側の出入り口部分の発掘調査が行われた。この時の調査により、(1)土壘のずれが、環濠集落成立当初からのものであり、濠がこの部分で蛇行していること、(2)耕形状の出入り口施設が検出出来なかったこと、(3)木橋が架かっていた可能性が高いこと、等が確認されている。

木村浩一 1998「高屋敷館遺跡の出入り口部分の発掘調査について」『東奥文化』第68号 青森県文化財保護研究会

2 町田氏らの研究による。十和田a火山灰の年代を扶桑略紀の記述から915年7月とし、小川原湖底の堆積物から十和田a火山灰と白頭山火山灰との年齢がほぼ8年分挟まれているという。このことから、白頭山火山灰の降下年代を923年から924年にかけての冬季と推定したが、その後、923~938年と幅をもたせているという。

町田洋・福沢仁之 1996「湖底堆積物からみた10世紀白頭山火山灰大噴火の発生年代」『日本第四紀学会講演要旨集』

中島友文 1997「青森県内の平安時代の火山灰について」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1978 「高館遺跡」青埋文報第40集
- 青森県教育委員会 1979 「大鰐町砂沢平遺跡」青埋文報第53集
- 青森県教育委員会 1980 「碇ヶ関古館遺跡発掘調査概報」青埋文報第54集
- 青森県教育委員会 1980 「永野遺跡発掘調査報告書」青埋文報第56集
- 青森県教育委員会 1987 「山本遺跡」青埋文報第105集
- 青森県教育委員会 1994 「山元（3）遺跡」青埋文報第159集
- 青森県教育委員会 1995 「野尻（2）遺跡」青埋文報第172集
- 青森県教育委員会 1996 「野尻（2）遺跡Ⅱ・野尻（3）遺跡」「野尻（4）遺跡」青埋文報第186集
- 青森県教育委員会 1997 「高屋敷館遺跡発掘調査概報」青埋文報第206集
- 青森県教育委員会 1998 「高屋敷館遺跡」青埋文報第243集
- 宇部則保 1996 「上七崎遺跡」「上七崎遺跡、蛇ヶ沢遺跡、上蛇沢（2）遺跡」八戸市埋文報第62集
- 岡本孝之 1998 「外土塁環濠集落の性格」「異貌」第16号 共同体研究会
- 工藤雅樹 1998 「東北北部の古代高地性集落」「中世城郭研究」第12号
- 工藤雅樹 1995 「北日本の平安時代環濠集落・高地性集落」『考古学ジャーナル』No387
- 工藤清泰 1996 「高屋敷館遺跡の歴史的意義」東北史学会・考古学部会発表要旨
- 工藤清泰 1997 「考古学研究における境界性」—古代・中世の視点から—『青森県史研究』第1号
- 久保 泰・森 広樹 1995 「渡島半島南部の擦文土器時代の防御集落」『考古学ジャーナル』No387
- 櫻井清彦・菊池徹夫編 1987 「蓬田大館遺跡」早稲田大学文学部考古学研究室報告 蓬田村教育委員会
- 齊藤利夫 1996 「蝦夷社会の交流と「エゾ」世界の変容」「古代蝦夷の世界と交流」古代王権と交流 1 名著出版
- 齊藤利夫 1996 「北方の環濠集落—高屋敷館遺跡、觀音林館遺跡を中心に」『北奥文化』第17号 北奥文化研
- 高橋 学 1995 「秋田県における平安時代の防御性集落」『考古学ジャーナル』No387
- 高橋与右衛門・室野秀文・本堂寿一 1995 「岩手県における平安時代の防御性集落」『考古学ジャーナル』No387
- 本堂寿一 1998 「北日本古代防御性集落について」『中世城郭研究』第12号
- 本堂寿一 1994 「所謂蝦夷館から柳之御所まで」『歴史評論』11月号 校倉書房
- 本堂寿一 1997 「北日本古代防衛性集落の調査成果と課題」—いわゆる蝦夷館の実態とその系譜について—『北上市立博物館研究報告』第11号
- 三浦圭介 1995 「青森県における古代末期の防衛性集落」『考古学ジャーナル』No387
- 三浦圭介 1996 「北奥羽・北海道地域における古代防衛性集落の発生と展開」『国立歴史博物館研究報告』第64集 青森県十三湊遺跡・福島城の研究
- 三浦圭介 1996 「文化財レポート 高屋敷館遺跡の調査」『日本歴史』第578号
- 三浦圭介 1996 「防衛性集落 高屋敷館遺跡」「別冊歴史読本71 城郭研究最前線 ここまで見えてきた城の実像」新人物往来社
- 三浦圭介 1998 「高屋敷館と北日本の古代防衛性集落」『中世城郭研究』第12号

---

研究紀要第4号

1999年3月28日 印刷

1999年3月31日 発行

編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

電話 0177-88-5701

FAX 0177-88-5702

印 刷 長尾印刷株式会社

〒030-0931 青森市平新田字森越17-1

電話 0177-26-7121

---



